the magician's reunion

冴木遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｔｈｅ　ｍａｇｉｃｉａｎ'ｓ　ｒｅｕｎｉｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ６４４５Ｓ

【作者名】
冴木遥

【あらすじ】
幼いころの小さな約束を忘れられなかった少年と少女の再会物語。国立魔術師育成学園に秘められた恐ろしく悲しい謎を、主人公は知りたくもないのに解き明かしていってしまう。面白おかしい学園生活の裏で、古来より受け継がれてきた先の見えない計画が進行していた。空白の数年があるけど、そんなの短いと思えるぐらいずっと一緒にいてやるから、この手をとれよ・・・。シリアスパートも入ると思いますが、基本ハートフルギャグコメディにしたいです。

序章　始まりの日（1）

私は約束を果たしに来た。

大事な、大切な友達だったから・・・

だから叶えたいと強く思うことができたのだろう。

もし君が忘れていたとしても、それでも私は・・・

＊＊＊＊＊

桜が咲き誇り、花びらが舞いあがる春。

私こと『藤城裕哉（ふじきゆうや）』は約束の地へと足を踏み出した。

男みたい、というよりも男の名前を付けられてしまい、いろいろ勘違いされ、大変な思いもしてきましたが、こればかりは仕方がないのでしょう。なにせ、子供には親を選ぶなんてことはできないのだから・・・

（まあ、医者がいけないんだろうな、間違えたんだし。でも、それに悪乗りした親はもっと悪いと思うけど。）

「くぁ・・・・・。それにしても久しぶりだ。・・・何年振りだろう・・・。」

私は小さい頃この町に住んでいた・・・ガキ大将として。

「確か幼稚園のころに引っ越したわけだろ？・・・９年、ほとんど１０年振りかぁ。」

久しぶりだと言っても、この１０年でほとんど変わってしまったみたいだ。

たとえば、子分とザリガニやカエルなどを捕えて遊んだ田んぼは埋め立てられ、高層ビルやマンションが建ち並び、田舎町が大都市へと姿を変えてしまった。それでも、１つ細道に入れば、懐かしの駄菓子屋や公園などはまだまだ健在していた。

そして、何より懐かしいと感じたのは、この町の匂いが１０年過ぎた今でも変わっていなかったからだろう。

＊＊＊＊＊

「まあ、街が変わった原因でもあるこの学園は相変わらず昔のままだな。」

私はとある学園の門の前で、目の前にそびえる学園を見上げて微笑んだ。
この『国立魔術師育成学園』は、今日から5年間、私が勉学に勤しむところだ。
この学園のような魔法を学ぶところは全国に存在するが、国立はこの場所のみとなっているため、大勢の志願者がここには集まる。というより、集まらないほうがおかしい。なぜなら、多くの国の有力者の子息子女も通っているため、有力者がこの学園の運営に協力しており、他で学ぶより遥かに多くの知識を得ることができるから、ということだ。
まあ、ほんとよく受かることができたというものだ。そんな好条件（知識もだけどほら、玉の輿とかな！）のせいで外部生内部生問わず、毎年ふるいにかけられ、生き残るのはとても至難の業だから。
そして今、私はその学園へと一歩足を踏み入れた。

＊＊＊＊＊

カラスの濡れ羽のような漆黒の、前も後ろも長い髪を耳にかけようとして失敗し、前髪がまた落ちてきて目の前がまた暗くなる。それをうっとうしいと思いつつ事務室のドアをノックした。

「あのぉ・・すみません。今年入学するものですが、寮監督は居らっしゃいますか？」

ドアを開きながらそう声をかけた。
目の前に座っていた人がキィと椅子を鳴らしながら振り向いた。

「はいはい。私がそ・・・あなたまるでお化けみたいな髪ねぇ・・・・」

「ええ！第一声目がそれですか！？どう受け答えればいいんですかそれ！！」

「あら、粋のいい反応ね。女の子なのがもったいないわ。」

ペロリと唇をなめて“男の子だったらよかったのに”と小声で付け加えられ、背筋が寒くなった。

（というか、成人してない子供に手を出したら教師免許取り上げられるだろう。）

そんなことを考えつつ、資料を探す寮監督の姿をおびえた目で追った。

「あ、あったあった。これね、藤城裕哉さん・・・男の子みたいな名前ね・・・ほんとに男の子だったらよかったのに。残念ね、本当に。」

（今度は本人の目の前で言いましたよこの人。名前のことはそんなに気にしてないけど、失礼すぎないか。こんなんでよく教職なんてやってられるな！）

私は顔をひきつらせつつ相手に声をかけた。といっても髪のせいで

口元から下しか見えていないと思うが。

「あのう・・・先生？大丈夫ですか・・・？」

相手はどこか空を見つめ惚けていた。・・・頬を紅く染めながら・・・何故かは考えない方がいいのだろう、自分のために。まあ、なんとなくわかってしまったけれども・・・

「あら？ごめんなさいね？今、私男気なくて困っているのよ。」

（そこまで男に飢えてるのか教師よ・・・）

しかし、“今”と言っているのだから昔はあったのだろう。目の前の女（ヒト）は美人という部類に入ると思う。腰まである艶やかな長い髪、艶美な表情や仕草、ナイスバディなプロポーション・・・というか、完璧な容姿である。そこまでいくと中身に重要な欠点があるのだと思うが、まあ知りたいとは思わない。

「はあ、そうですか・・・で資料が見つかったのでしたら、そろそろ寮の方へ向かいたいのですが・・・」

どうしても自分の身が危なく感じ始めたので先を急ぐこととした。誰だって自分の身は可愛いだろう？

先生は何故か少し不服そうな顔をしながら電話に手をかけた。

「そうね。仕方ないわね、確認はＯＫよ。連絡入れとくから行きなさい。学園を出た左の道に沿って歩けばすぐ着くわ。ちなみに右側は男子寮につながってるから気を付けてね？すぐ噂になるから？」

「わかりました・・・ご忠告ありがとうございます。」

少し・・・というよりかなり気になる言葉を聞いた気がするが、これもまた気にしない方がいいのだろう。ああ、そうだろうとも、私は絶対に気になどしていないぞ！
先生の言葉にひきつりつつも感謝の言葉を述べ、部屋を出た。が、その寸前

「あ～あ。男の子だったらよかったのに・・・。」

という言葉が私の耳にしっかりと届いた。

（いつまでそのネタ引っ張るんだよ！！しつこすぎる！！）

内心でとても憤慨しながら、足早に校舎の中を歩き始めた。
しかし、歩いていると急に落ち着いてきた。来る時も感じたことだが、春休みでも、部活とかで人が居るはずなのに、とても静かである。そして未熟な私にわかるほど清浄な空気が漂っていることもあり、その静けさがより際立ち、神聖なはずのこの空間が逆に恐ろしく感じてくる。乱れていた気が強制的に直されより恐ろしく思い、廊下を走りだした。
何がそう思わせるのか・・・この学園には多くの謎がある。だからこそ、ここを約束の場所にしたのだから。

＊＊＊＊＊

はてさて、皆様。寮というからにはどういったものを想像しますか？ん？はい、そうですね。アパートのような建物ですね。私もそんな感じのものを想像していたんだけど、寮というものの定義を疑われるような建物を見上げ呆然とした。

（え、ここでいいんだよね・・・ありえない。）

ここは外国ですか？と思わせるような西洋建造物が厳かにそびえていた。

学園もすごかったが、さすが最近建てられた建造物なだけあり、近代的なデザインであった。こちらは、確かに規模は寮と言えるのだろう。だが、この建物だけは思いっきりな洋館である。多めに木が植えてあることもあり、なんとか周りの風景に溶け込んでいるが、気づいてしまうと思いっきり違和感がある。さすがにこんな所に住みたくないとか思ってしまうが、今からアパート探しなんてできるわけもなく・・・

（お金の工面も大変だしな。）

この学園は別に寮に入るのを強制していない。ただ単に寮があるなら寮に入ればいいじゃない、と思っただけだ。けして、学園が結構街から離れていて、結構山の中に立っているからめぼしい住居が見つからなくて、学校から寮まで歩いて5分だったからとかじゃありません。ええけしてね。

私は気を取り直して、地面に落してしまった荷物を拾い上げ、居空間へと侵入した。小市民の私がこれからきっとお目にかかれない芸術品のようなドアノブに手を伸ばし、恐る恐る回した。

“うわぁーーー！！きゃぁーーー！！大変よ！！だめーーー！！お前ら何やってんだ！！”

何が起こってるんですか？と思わざるを得ないこの騒ぎっぷり。おそらく“音”の魔法がかけられているのだろう。開けた瞬間、一気に騒音が聞こえてきた。

“誰か助けてぇ！！ふざけんな！！やめてぇーーー！！”

中がこんなにうるさいのにやはり魔法ってすごい。私も早くいろいろ覚えたいなぁ・・・と危機に面しているのにもかかわらず呑気なことを考えつつ、ドアを全開にした。

「すみません！新しくこの寮に入ることになったものですが・・・」

そんな呑気なことを考えていたからいけなかったのか、はたまたこの寮にこのタイミングで来たこと自体が間違いだったのか。

「くらえ！必殺・鎌いたち！！」

「ぎゃぁぁぁーーー！！」

そしたらこんなことにはならなかったのに。

「危ないわ！！」

「へ？」

まあ、後悔先立たずって言うし、仕方ないのかな

「「「きゃーーー！！」」」

女の子の一際大きな悲鳴がこだました。
なぜなら、寮のエントランスでは2人の生徒が暴れており、片方が放った魔法が今まさに私へ当たろうとしているのだから。受けるはずだった人が寸前のところで避けたせいで。

「！！！」

気がついた時には既に遅かった。初めに肩が痛いと感じた瞬間次々に“風の刃”が襲ってきて、私の体を次々に切り裂いていった。とっさのことだったので、無意識に顔だけは防御することには成功したが、体中切り裂かれたので服も髪もかばんもボロボロになり、そこまで傷は深くなかったが、至る所から血が出ているので、傍から見たら相当ひどい姿になってるんじゃないか？そのせいか、今まで騒がしかったエントランスホールが嘘のように静まり返ってしまった。まあ、長ったらしかった髪がザンバラになり、切られた髪が床に散らばっていることが余計今の私の姿・状況に拍車をかけているのだろう。
居ごこちの悪さを感じつつも一番落ち着いて見える人に声をかけた。

「すいません。今日から入寮予定だったんですが・・・」

相手にはおそらくとても不気味に見えたのではないだろうか。血だらけで、前髪でほとんど顔を見ることのできない人間に、口元だけでにこりと笑いかけられたのだから。もし、私が話しかけられたら速攻で後ろ振り返って逃げます。

「・・・ああ、連絡は来ている。でも、その前に治療が必要だな。」

この人、普通に接してくるあたり、常人ではなさそうだ。とても知的そうに見えたのに・・・判断を誤ったか・・・！

「なんか言ったか？」
「いいえ何も！よろしくお願いします！！」
余計なことを考えるとそのうち大変な目にあいそうだ。
「そうだ、お前ら、関係ない奴まで巻き込みやがって。明日までに反省文３０枚考えとけ」
「「ええ！３０枚も！？」」
「当たり前だ。いつもよりたった１０枚増えただけだろう？」
「「そ、そんなぁ・・・」」
首犯の二人は肩と気を落として、座り込んでしまった。
（と、言うか、いつもこんなことしてんのかよ。勘弁してくれ・・・）
私の平穏な日常生活が・・・と思っていると、フリーズしていた他の生徒たちもやっと動き出した。
「よし、じゃあお前、医務室に行くぞ。ついてこい。」
「は、はい！」
２人の反論を無視して私に振り返ったその人は医務室に行こうとして立ち止まった。
「あ、そうそう。お前ら、ここ、きちんと片づけておけよ？もし明日までできれいになってなかったら・・・その時は、わかるよなぁ？」
「「ラ、ラジャー・・・」」

笑顔なのに全く笑ってないその顔に、自分に向けられているわけじゃないのに、背中に何か冷たいものが通った気がしてヒヤっとした。その証拠に、目の前の二人はけして目を合わせようとせず、下を向いてぶるぶると震えていた。

「新入生、もたもたしてないで行くぞ。」

「あ、はい！」

さっき切り裂かれたせいで持ち手が無くなってしまったかばんを手に持ち、目の前の人に続いた。

「悪かったな。あいつらのせいで、入寮の日にこんな目にあわせて。」

「あ、いえ。大丈夫ですよ。見た目ほど傷深くないですし。」

「それでもあいつの放った魔法で怪我したのは事実だろ。寮長として、謝らせてくれ。」

すると、急に頭を下げられた。

「うわっ、そんな気にしてないですから、やめてください！・・・てか寮長なんですか！？」

「ん？知ってて声をかけたんじゃなかったのか？」

なるほど、だから落ち着きのある人だったのか。あんな喧嘩を毎日仲裁していたらそんな感じになるのだろう。

「知らなかったのか。まあ、よろしくな。あいつら、仲悪いわけじゃ人だが、よく暴れてるから、巻き込まれないように気をつけろよ。」

だからってあれはちょっと過激すぎないか？それとも外部生だからそんなこと思うのか・・・つうか、寮長、そうやって微笑まれると

（かなり美人なんですけど！！）

美人が怒ると怖いってやつなんだろうな。

「ああ、そうだ、その荷物全部よこせ。ずっと持ったままだと血つくし、それに直さないとダメだろ？直したら部屋に案内するついでに一緒に持っていくから、声かけてくれ。寮長室に居るから。」

「あ、ありがとうございます・・・」

「ん？お礼なんかいいよ、だってあいつらにやらせるんだからな。」

一瞬呆気にとられたが、次のせりふを聞いた瞬間また震えてきた。いや、別に寮長のニヤリ顔が恐ろしかったわけじゃないっすよ・・・

「ん？どうかしたか？」

「いいえ！なんでもないです！！」

まさか、寮長がサドで鬼畜な女王様なんじゃ・・・とかまったく思ってないです。というかそんなこと口に出したら殺される・・・！！！

「あ、おい！どこまで行く気だ。ここが医務室だ。」

「え？すみません・・・」

少しでも寮長と距離を取りたいと思ってしまったせいで、医務室を通り過ぎてしまったみたいだ。

「それじゃ、ちゃんと治してもらえよ。」

そう言って私の頭をポンポンととなでてエントランスの方へまた戻っていった。おそらく今、一生懸命掃除しているあの2人のもとへ行ったのだろう。

（・・・ほんとご愁傷様です。）

手を合わせて可愛そうなことにこれからなるだろう2人に手を合わせた。

妙な共感と、疲れを感じつつ医務室に入った。

「失礼します。」

「はい。どう・・・ぞ。」

これぞ保険医といった先生が出迎えてくれた。とても優しそうな感じがする・・・寮長と直前まで一緒にいたから余計そう感じるのか？

「・・・聞くまでもないわけ、さあ、椅子に腰かけて。」

ちょっとびっくりしていたみたいだけど、さすが医療に携わる人だ。すぐに持ち直したらしい。

言われた通り保険医の目の前にある居るに腰を下ろすと、傷の様子を見始めた。

「さっき、騒がしいとは思ったのよ。また喧嘩してたのね『胡桃』と『紅葉』は。まったく困ったものね。」

胡桃と紅葉・・・あの2人の名前だろう。どっちがどっちか分からないが。よく喧嘩するってことは、あの二人はここの常連さんか？

「うん、あんまり深くないみたいね。これなら自然治癒で傷も残ら

ないわ。女の子だもの。体に傷なんて作ってられないわよね。」
「そうですか・・・？」
「そうよ。あたりまえじゃない。」
男兄弟の末っ子だったから生傷なんか絶えなかったから、そんなの気にしたこと無かったなあ。
保険医はそういうと棚から緑なんだか紫なんだか色わからない薬を取り出してきた。思わず薬を注視してしまう。
「あら？どうかした？」
「・・・いえ・・」
（まてまて、早まるな。まだ私が飲むとは決まったわけじゃない。それみろ、保険医の反応からして飲むのは私じゃない。そこに置いてたのを思い出して片づけようと思って持ってきただけだ！そうだ、そうに違いない！！）
「じゃあ、治療を始めるわね。体を楽にして、目を閉じてね。」
目の前にある薬は気になるが、とりあえず言われた通り目を閉じる。すると、右手を取られ、目を覆うように手を置かれる。
「“痛いの痛いの飛んで行け～☆”」
（・・・）
「え？」
「ん？」
今、聞いたことあるフレーズを聞いた気が、と思ったその時、触れ

られている部分が温かくなってきて、ドッと疲れが出てきた。

「はい、おしまい。大丈夫？呪文は適当に付けたけど、今の治癒魔法はさっき言った通り自然治癒を促進させるものだから、疲れが出ちゃうんだよね。人が元から持ってる治癒力を一気に高めて治すってことね？」

すごいな治癒魔法。全部治ってる。治癒魔法は高度な部類に入るらしいけど学生でもできるのかな。

「よし、それじゃ、洋服も治さないとね！いくら女子寮って言ってもそれじゃ嫌だもんね。」

「うおっ！！」

保険医がそれっと軽く指を振ると切り裂かれていた服が元に戻った。いきなりのことでびっくりしたが、こんな短時間にたくさんの魔法を見ることができてちょっと楽しい。

「髪の毛も・・・と言いたいところなんだけど、髪の毛って死んだ細胞だから“治す”ことはできないんだけど、どうする？魔法で伸ばすことができないわけじゃないんだけど。」

「いや、別に好きで伸ばしてたわけじゃなかったのでちょうどよかったです。」

そう。別に人に素顔見られるの嫌！とか、そんな人間不信なわけではなく、ただ、単純に切りに行く暇がなかっただけだ。だって、ここほんと倍率高ったんだよ！！どのくらい高いのか知ったその日から体力づくりと勉強で手いっぱいだったんだから！！

「そう。でもそろえないといけないでしょ？この学園、人がいっぱ

いいるだけあって美容師を目指している子がいるのよ。その子に頼むといいわ。きっといい練習台だって言ってやってくれるわ。腕もいいし一押しよ？」

「えーと・・？じゃあ、お言葉に甘えて・・・？」

何か勝手に決められてるような気をしなくないが、腕がいいなら別に問題ないだろう。タダでやってもらえるんだからいいと思わなくちゃ。

「では、そろそろ失礼します・・！」

ガタンッ

「！！・・・あ、あれ？」

立ち上がろうとして、足に力が入らず床に座り込んでしまった。何が起こったのか訳がわからず、保険医の顔を仰ぐと、何ら変わりない微笑みのままあたしを見返していた。

「やっぱり。一番足がひどかったからそこに副作用が来ちゃったのね。寝れば治るっていってもお昼過ぎたくらいだし・・・今から寝るなんてきついわよね？」

「そ、そんなことないですよ・・・？」

なんだか嫌な予感がしてきた。保険医の変わらない微笑みがなおさら怖い・・・！

「それでね、これ・・・飲んでほしいの・・・」

（でたあーーーー！！よくわからない代物！ここで来ましたあ！！

！）

コトンと目の前に置かれた緑だか紫だかわからない色をしたビーカーに入った薬のようなものに目を向けた。

「先生が心をこめて作った体力増幅剤の“新作の薬”なの。味はとってもまずいけど即効性だからすぐ立てるようになれるわ。」

（いやいやいや、だからって誰が命売るんだよ！つーか絶対実験台になれってことだろ！！）

だらだらと冷や汗を流しながらとりあえず反論してみる。

「いや・・あのぉ・・・・その・・・ねえ・・・？」

どう切り返したものか、と私がまごついていると相手はしびれを切らしたのか強行突破に出た。

「さあ！行ってみよう！！」

教師は顔に似つかず、私の顎を掴むと口を無理やり開かせ薬を流し込んだ。

「もが！もが、もが、が、が、が、が、が・・・が・・・」

その後の記憶は私にはない。

序章　始まりの日（2）

「ひどい目にあった・・・」

私はさっきの保険医とのやり取りを、まだ口の中に味が残ってるせいでまざまざと思い出しながら顔をしかめた。

（あの保険医・・・見た目がぽやぽやしていたくせに、握力っつうか、力がめちゃくちゃ強かった。意識のなかった私をベットに運んだみたいだし。あの姿は演技なのか・・・私は図られていたのか・・・ああいうタイプが切れたら一番怖いってやつだよな。普段おとなしいせいで、日々蓄積されてきた鬱憤が爆発するからな。あと、ギャップもあるよなぁ、おとなしい奴が急に怒りだしたら怖いし。）

そんなことをぶつぶつ呟きながら、散髪してもらうため、元来た道を戻っていくと先ほどの事件のあったエントランスホールに出た。そこにはあの二人がいた。驚いたことに本当に2人だけですべての掃除をこなしていた。しかも、とても手慣れた手つきで、一言も発しないで、今にも喧嘩しだしそうなオーラを出しながら。まだ、仲直りしていないらしい。寮長の恐ろしさから、協力して掃除をしているみたいだ。

（まるで恐怖政治のようだ・・・）

そんなことを考えて、これから自分も巻き込まれるのであろう寮長のまだ見ぬ掟とやらに震えた。

恐怖を体から振り払い頭を上げた。とりあえず目先の問題は、私の髪の毛である。教えてもらった部屋へと足を速めた。

少しして、爆音とともに怒鳴り声が後ろの方から響いてきたような

気がしたが、きっと私の気のせいなのだろう。

＊＊＊＊＊

初めて寮を見たときに普通のアパートくらいの大きさだ・・・と言ったが、大間違いだ。とてつもなく広い。そこら辺に建っているアパートなんて目じゃない。樹とかで騙されてたが、めちゃくちゃ広い。洋館なだけあって、味のあるレトロな感じが漂っていて、なんだか少し落ち着く。

まあ、そんな広いわけで、初めて見る洋館なせいで、先輩の部屋を探しだすのは困難極まりなかった。もし、この建物が単純な構造をしてなかったら絶対迷っていただろう。案内板とか作ってほしいなぁ、至る所に。一階にあったから、一応それを確認してきたけど、４階まで来たらもう分んなくなるよね、エレベーターとかもないしね。

やっと見つけ出した部屋の前で私は膝に手をついて息をはきだした。

（はぁーーー。なんか気が滅入りそう。）

ガンっ！！

「ぐお！！」

「誰かいるの？」

まあ、部屋の目の前に居た私が悪かったが、扉の目の前に人がいるってわかっておきながらどうしてそんな勢いよく扉を開けるのかな。

「なに？」

（いやいやいやいや！まず謝るのが先だろう！！）

私は少し涙目になりながら頭に今できてしまったコブをさすりながら顔を上げた。

「その髪何？そんな髪型何てはやらないわよ。」

「いえ、好きでしているわけではないので、というかこんな髪型がはやられても困ります。」

「そう、わかっているならいいわ。」

なんかめっちゃ偉そうなんですけど。大丈夫か？ほんとに揃えてもらえるんだろうか？

「・・・ん？・・・ああそうか、さっきの喧嘩のとばっちり受けた人ね。あの時私もあの場にいたからどうしてそんな状況になっているのか聞かないわ。」

「あ、ご配慮ありがとうございます。」

この学園に来てから初めて常識人と話してる気がする。

「そんな格好、寮長が許したとしても、私のプライドが許さないわ。」

（どんな理由だ！！というか、やっぱり基準は寮長なのか！！）

心の中で思いっきり突っ込みを入れてしまった・・・

この学園にはやっぱり常識人はいないんですね・・・それを悟った瞬間でした。

それとも逆に常識を知る機会が少ないのかも知れない。魔法・魔術は普及しているといってもやっぱり使えない人の方が多い。小さいころからそんな常識の外にあるようなところで育ったら、そんな風にもなるか？常識の外といっても、魔法・魔術は高等部からしか教えてくれないから、中等部までは私立・公立と同ことを学ぶはずだけど。

「何あほみたいな顔して突っ立ってるの？早く中に入って」

（前言撤回、やっぱ人徳の問題だ。）

部屋の主に促されて中に入った。寮の外装が外装なだけあって、中もゴテゴテしているのかと思ったら意外とシンプルだった。この様子からすると４人部屋みたいだ。

部屋割といえば、何人部屋で過ごしているかでどのクラスなのか大体分かる。なぜならクラスごとに部屋割されているからだ。

１学年１０クラスで“Ａ～Ｊ”クラスまであり、Ａクラスから順番に成績順にクラス分けされていく。つまりＡクラスはトップ集団、Ｊクラスは落ちこぼれ、といった具合だ。そのため、目立った贔屓はされないが、Ａクラスは２人部屋Ｂクラスは３人部屋と順々に降りて行き、Ｅクラス以下になると、今度は部屋に人がそんなに入れなくなってしまうので、一律で６人部屋となる。まあ、そんな小さな優遇があったりする。

最後に豆知識だが、全生徒が寮で生活しているわけではないので、本当の首席というわけではないが、寮内で首席となったものは一人

部屋が与えられる。５学年あるので、寮で生活している人の中でたった５人だけが悠々自適な生活をしているということだ、なんてうらやましい。

「見て分かる通り、今誰もいないのよ。帰省から戻ってきたの私が一番早かったみたいで。」

私が部屋をまじまじと見て言葉を発しなかったことを、４人部屋なのに他に人の気配を感じないから不思議そうにしていたと勘違いしたらしい。

「まあ、そのおかげで集中して貴方の髪が切れるわ。」

さっきドアを開けたときとは打って変わってとても機嫌のよさそうな声が聞こえて驚き振り向くとそこには誰もいなかった。

「何振り返ってるの？早く椅子に座って。」

今度は前から声が聞こえたことに驚いて前を向くと何故かすでに散髪セットが準備されていた。

「い今、私の後ろに居ましたよね！？」

「何を言ってるの、貴方の目の前に居るじゃない。冗談言ってないではやくこっち来なさい。」

（う、嘘だ！だってさっき私の後ろに居たし！！人の気配がほとんど感じられないほど物とかきれいに片付いてたのに！！）

なんなんだよ、魔法か、魔法なのか？つうかこんなことで魔法使うんじゃねぇよ、どんだけ髪切れることが嬉しいんだよ。

と怪訝に思いながら相手の顔を少しのぞきこむと目が合い、その目が吊り上っていったので急いで用意された椅子に腰かけた。

「それではどんな髪型がいいのかしら。一応雑誌も用意したけれど。」

「そんな、簡単でいいですよ。切り裂かれ方からいってショートヘアしかでいないでしょう。」

ただ、一般的な髪形の中で今の状態から持っていくならショートヘアだろうと思って言ったのだが、相手はそうとは取ってくれなかった。

「む、そんなことないわ、レイヤに見せることだってできるし、右が短いみたいだからわざと左だけ長く・・」

「わー!!すいません!!そんなつもりで言った訳でなくですね、ただ一般的な髪形がいいというだけですので!!ショートヘア、ショートヘアにしたいです!!」

なんだかすごい奇抜な髪形にされそうな気がして、相手の話に割り込んだ。

それがきにくわなかったのか、それともまだプライドが許さないのか分からないが、納得してなさそうにショートヘアを了承した。

「そう、短く切るのね。もったいないわ、こんなにきれいな髪してるのに。」

「そうですか?私としてはやっとうっとうしくなくなるので万々歳ですけど。」

そうだ、時間がないからって何年も切らないのはただのあほの所業でした。まあ、結んでればよかったから楽っちゃ楽だけど、長すぎ

て座ったときとか自分で尻尾踏むのはさすがに痛かった。それにやっと視界も良好になるし、ほんといいことずくめだ。

「うっとうしい・・・？」

私の言葉に先輩は声のトーンを下げた。驚いて振り向くと、頭を掴まれ無理やり前を向かされた。そう、あれだ、アイアンクローだ。片手で掴まれてるなずなのに、なにこの握力！？
どんどん力がプラスされていく。痛い痛い痛い！！マジすいません！え、私何かしましたっけ！？

「こんなきれいな髪しときながらよくそんなことが言えるわねえ・・・」

（そ、そんなこと言われても！！）

痛すぎて声も出ない。てか、きれいって言われても特に手入れとかしてなかったし、使ってたシャンプー・リンスも男兄弟の使ってるものを使ってたし！！

「まったく、どうしてこんな子が・・・もうっ、ほんっとうらやましい！！」
「だ、だからずっと髪梳かしてたんですかぁ・・・」

だ、だめだ力尽きる・・・と思った時、ふっと頭の痛みが薄れた。

「・・・そうね、ずっと触ってたわ、気がつかなかった。」

（なんだそれぇ！！）

そうなのだ、どんな髪型にするか聞かれた時からずっとさわさわと手櫛を受けていたのだ。どんな髪にするか触ってイメージを固めているのかと思ったら、なんだ、ただ羨ましかったのか、私の髪質が・・・う、うれしくねぇ！！

「悪かったわね。さあ、気を取り直して作業を開始するわ。ちゃんと前向いて。・・・はぁ、ほんと不釣り合いに切られて・・・」

かなり残念そうにぶつくさと文句をいいながら作業を開始されたせいで、だんだんと罪悪感が生まれんてくる。人間不思議なもので、自分のせいじゃないって分かっていても、近くで負の感情を撒き散らされると引きずられてしまう。

（私、何も悪いことしてないのに・・・）

ちょっとびくびくしながら切られていたが、特に何か話題があったわけでもなく、先輩が、すんごい集中力で作業していくものだから、私はいつの間にか寝てしまった。というか、接客業がそれでいいのか？

＊＊＊＊＊

ぐらぐらと左右に揺らされる。

“ね・・・ちょ・・・・・・・・・・・・ぇ・・・・”

左右に揺らされながら誰かが呼びかけてきている気がする。

（ええい、私の安眠を妨害すんじゃねぇ・・・！）

「・・・早く起きないと眉まで切り落とすわよ。」

「はい！寝てません！起きてました！！すいませんっした！！」

「あら・・・別に寝ててもよかったのに。」

（耳元で物凄いこと言われたよ！？ちょっと、切り落とすって、怖いんですが！！）

何かまた脅される前にまっすぐ前にある鏡を向く。後ろの髪は揃え終わり、後は前髪を揃えるばかりとなっていた。

「まったく、散髪中に寝るなんて・・・アホみたいに口開けて寝てるせいで切っていいんだか切って悪いんだか・・・」

「ああ、それはすみません。」

「別にいいんだけどね。ただ、あなたが起きた時口の中が髪の毛だらけになるだけだから。」

（それってある意味怖くね？ホラーでしょ。）

てことは、あれか。気持ち良さそうに寝てたからイラっとして脅して起こしたってわけか。この学園、マジでこんな人しかいないのかなあ。

これから先の未来を案じつつ、前髪を切るとのことで口と目を閉じ

てじっとしていた。

シャキン、シャキン

前髪を切る一定の音だけが私の耳に届いてくる。さっき言われた“眉も切り落とすぞ”ということを気にしてハラハラしつつ、ただ大人しくじっとしていた。

今度は、脅されたこともあり、寝ずに緊張しながら待っていると急に相手の動きが止まった。唐突に止まったので、より緊張が高まり、息も止めて何らかのアクションを待っていたのだが、何の音沙汰もないので、ソッと目を開けた。鏡の中には数時間前とは打って変わって、きちんと切りそろえられた私が座っていた。何だ、最後まで終わってるじゃないか、と思い、斜め後ろに立っている先輩の顔を見上げると、鏡の中の私を見て呆然としていた。

「・・・どうかしましたか・・？」

私が直で顔を見上げているというのに、信じられないといった顔をして、ずっと鏡の中の私を見ているので、不思議に思い声をかけた。すると、先輩は鏡の中の私を見たまま逆に問い返してきた。

「あなた・・・男なの・・・？」

「は？」

（おっといけねぇ、空耳が聞こえたぞ。なんか、よくわかんないことが聞こえ・・・）

「な・・んで女子寮に・・・」

「ちょっとまったぁ！！自分女、女ですから！！そんな驚愕な顔して出て行こうとしないでください！！」

私は必死で引きとめた。ええ、もうそりゃかなり必死に。こんなことで入学取り消しにでもなったらと考えたら・・・恐ろしい。私の努力が全部水の泡になる。

「だって・・・男の子にしか見えないんだもの。」

先輩は落ち着きを取り戻し、それでもやはり、私が男だと疑う。まあね。いいけどね。昔から男みたいな名前に、男みたいな姿恰好だったから慣れっこだからね。

「でも、私寮長に認めてもらってここにい・・・」

るんですよ？と続けようとして

「そうよね、寮長が認めたんだから、男なわけないわよね。」

と、私が最後まで言うまでもなく納得された。やっぱ寮長最強説は事実ですよね。

「そうですよ。確かに昔から男に間違えられてましたけど、寮長が認めたとおりれっきとした女ですよ。」

“寮長”を強調しないと認めてもらえないという悔しい思いをしつつ、それでもなんだか納得できるなぁと考えてしまい、困ったように笑うと、先輩は目を見開き、顔を真っ赤にした。“えっ”と思ったので、赤くなった先輩の頬を触ってちょっとひきつり笑いをして、先輩に問いかけた。

「・・・顔、赤いですけどだい・・・」

「今すぐ出てってーーーー！！！」

手を振り払われ、大音量で叫ばれ、物を投げられるのまで良かったが、火の呪文を唱え始めたので、お礼もそこそこにダッシュで退出した。閉じられたドアに爆発音がぶつかったような気がしたのは気のせいだと思いたい。

（先輩、男の人に免疫ないんだろうなぁ）

今の私を見た人は１００人中１００人が必ず男と答えるだろう。どちらかといえば母より父に似てしまったのでこんなことになってしまった。上に兄２人、下に弟１人いるが皆父似だ。一番上と一番下が母にも少し似ているが、真ん中２人はあまり母に似ていない。毛色と趣向が少し似ているくらいだ。男兄弟に女が１人ということもあって、性格も男勝りになってしまったため、よく間違えられた。ただ、ここ最近はぼさぼさ頭だったので話しかけてくる人の方が少なかったが・・・

（まあ、いいけどね。）

荷物を取りに寮長室へ向かいながら、そんなことを考えていた。久しぶりの反応だったので、少しだけショックを受けていると目の前の寮長室と書かれたドアが急に開いた。

ドガンっ！！！

（あ、なんかブジャヴ・・・）

さっきとは力のレベルが全く違う勢いのいいドアにぶつかった私は、眩暈を催しながら後ろに吹っ飛んだ。

中からは見たことのある2人組が

「うわーーーん！バカーーー！！」

「りょ、寮長なんて、大好きだーーー！！」

バタバタふみふみバタバタふみふみ

「ぐえ、ぐえ」

と罵倒・・片方おかしかった気がしなくもないが・・しながら走り去って行った。もちろん床に倒れていた私を思いっきり踏みながら。

「なぁ、藤城。あいつら何が言いたかったんだと思う？」

「じ、自分に聞かないでください・・・」

というか助けてほしかった、と思い、目の前でドアに持たれながら走り去って行った2人を眺めている寮長を見上げた。

「くっ・・お前、あいつらに踏まれていったろ。」

見上げた私に気がついた寮長は私を見下ろし軽く笑いながら声をかけた。

「笑わないでくださいよ。確かに踏まれて行きましたが・・・中で何かあったんですか？」

「ん？気になるか？」

踏まれていった腹を抱えながら立ち上がる私を助けようともせず、面白そうといった目をして問いかけてきた。

「まあ、少しは。」
「またとばっちりくらってるもんなお前は。」
「む」

またくつくつと笑い始めるので、何がおかしいのかと思えば、1日に2度もあの2人の喧嘩のとばっちりをくらっているから、らしかった。

「で、何があったんですか。」
「・・・ああ、また喧嘩しだしたから反省が足りないと思ってな。また犠牲者を出さないように寮長の特権で魔法の制限をかけたんだ。」
「制限？」
「そ、制限。・・・ん？“魔法”は“魔術”と違って制限をかけられるんだ。知らなかったか？」
「・・・“魔法”と“魔術”って何か違うんですか？」
「・・・そうか、そういう奴も入ってくるのか・・・」

2つの違いについて聞き返すと、まるで心底驚いたとでも言うように目を見開いてじいっと顔を見つめられ、なんだか失礼なことを言われた。

「・・・知らないとまずいことですか？」

寮長の性格的に今みたいな表情はあんまりしない人だと思っていたにで、少し不安に思い、聞き返した。

「いや、確かに基礎的なことだが、外部生なら知らないやつがいてもおかしくない。すまん。基本ここに入学する奴らは基礎は知ってるやつの方が多いからな。」

「知ってるやつの方が多い・・・？」
「ほら、ここ、“国立”だから。」
ああ、なんとなくわかってしまった。国の有力者が運営に携わっているんだ、自分の子供たちに基礎を幼いころから教えていてもおかしくない。
「まあ、基礎を知っていたとしても、素質がなければ“魔術”を使えるようになんかならないけどな。」
ん？なんだか今、よくわからないことを言われた気がする。
私がそんな風にして？を飛ばしていたら、寮長が苦笑しながら説明してくれた。
「そんなに首かしげるとそのうち取れるぞ。簡単なことだ。魔法とは魔力量さえあれば誰でも使える呪文・・・つまり、教科書とかに載ってるようなもののことだな。それに比べ、魔術とは技術や知識がきちんと備わってないと使えないもの・・・まあ、一般的なものは無詠唱魔法だったり・・・自分で魔法を作り上げ、施行できるもの、それが魔術だな。」
「え～と・・・？」
「難しいか？簡単にまとめると魔“法”とは、基本だ。魔“術”とは応用。まあ、おいおい分かってくると思うから、頭の片隅にでも置いとけ。」
「いってっ」
こめかみあたりを軽くでこピンされ、なんだか軽そうな音だな、というセリフに反論しつつ、質問した。
「でも、それが罰則として何がそんなに悪いんですか？」

「お前、数学で公式使わずに関数とけって言われて・・・できるか？」

うっ・・・それにはちょっと詰まる。おそらくできなくはないが物凄い労力と時間がかかる気が・・・

「魔法が使えないってことはそういうことだよ。」

鬼！！いや鬼畜！Ｓ！どＳ！！どＳがいる！！

「何事も基本ができないと応用できないだろう？応用できるようになる奴らを魔術師という。その魔術師を育成するのがこの学園だ。まあ、魔術師になれるの何て、ほんの一握りしかいないけどな。だから、魔術は魔法と違って制限をかけられない・・・いや掛けずらい、かな。できないわけじゃないけど、相手より多くの知識を持っていなきゃできないな。」

分かったような、分からないような・・・

でも、なんとなく魔術師が少ないのは分かった気がする。５年１０年と学んでいるのに、今ある公式すら理解できないのに、新しい公式を作り出せって・・・あきらめてしまう人がいるのも仕方がないのかな・・・

「ああ、そういえば、荷物を取りに来たんだろう？さっきまでアホコンビがいたから治させた。」

ほらっといって私のかばんを投げてよこした。

手持ちがちぎれ、ところどころ破れ中身がはみ出していたはずのかばんは、きちんと元通りに直っていた。さっき付けてしまった血の跡すら残っていない。

「ちゃんと直ってるだろ？」
「はい！ありがとうございます！やっぱ魔法ってすごいですね！」
「まるで子供みたいなことを言うなぁ。自分たちで犯した落とし前くらい自分たちできちんとつけさせるさ。」

あああ、こ、こわっ！！え笑顔なのに笑顔じゃない！く、黒い、黒いよ笑顔が！！
またしても、寮長が黒オーラを放ち始めたので、ぶるぶると小さく震えながら、ここから退散することとした。

「そ、それじゃ、そろそろ失礼します・・・」
「ああ、そうだな。お前の部屋は6人部屋だからな、プレートを見て確認するように。まあ、行けば分かると思うよ。」
「はい！分かりました。」
「ああ、あと」
「あと？」
「お前、男みたいな容姿してたんだな。」

（今頃ですか！？）

男みたいな容姿って・・・やっぱすぐに見抜いていたのか・・・寮長・・・侮れん・・・！

＊＊＊＊＊

さきほど、寮長は“行けば分かる”とおっしゃっていましたが、もちろん迷いました。ええ、先輩の部屋に行った時のことをもうすでに忘れていましたよ。
ええ、忘れていましたとも。
6人部屋だって言っていたとしても、Eクラス以下は皆6人部屋だ。つまり一番多い訳で。たくさんありすぎて見つけ出すのが大変でした。
しかも、結局あった場所が、一番端っこの部屋だということ。

（端っこにあるなら、端にあるって教えてくれてもよかったじゃないか。）

と、思わず文句を言ってしまうのも仕方がないだろう。

（今日は、いろいろあったな・・・）

ベットに思い体を沈ませ今日の出来事を思い出していた。

（というより、いろいろありすぎたな・・・）

新しい土地に来たばかりなのに濃い1日を過ごした私は、いつの間にかそのまま眠りについた。
これから出会うであろう友人を思い出しながら・・・

（うさ・・・もうちょっとだよ・・・）

第一話　問題炸裂！？

壁に掛けてある制服に手を伸ばし、手にとってしばらく眺め、ため息をついた。

入寮して数日が過ぎ、やっと迎えた入学式。部屋には私ともう一人でこの広い6人部屋を占領している。人数の関係でここだけ2人部屋になってしまったとのこと・・・まあいいけどね、余計な心配事が減った分な。

今日を迎えるまで静かに過ごせた・・・訳もなく、数日がまるで1、2週間を過ごしたような気分になった。

まず、もちろん例の2人組がやらかす。毎日ではなかったのでよかったが、仲が悪くないのに初日を含めて3回も喧嘩するってどゆこと！？まあ、一緒に食事をとっているところを見かけたから仲がいいっていうのは嘘ではないのだろう。まあ、いい。そんなことはこれから日常化していくのだろうから。

一番の問題は、やっぱり私の容姿についてだ。

始業式まで残り2日となって寮生がドッと戻ってきた。そのせいで会う人会う人に詰め寄られるは、追い返されそうになるわで大変だった。そこでやっぱり寮長に助けてもらって難を逃れたのだが・・・最後の方、いちいち説明するのが面倒くさくなったのか、ほんとに外に放り出された時はさすがに泣いた。

私の容姿に反応した人の中でも一番リアクションがデカかったのは、この同室の子の反応だ。

部屋の外に出るとどうしても問題が起きるので、ベットに横になって雑誌を読んでいると、急にドアが開いた。すると、ドアを開けた相手は私を見て驚いて固まり、私は油断しているときに急に人が来

たことに驚き、お互いにお互いの顔を見つめあってしまった。先に回復したのは私の方で、同室の子だ、と少しテンション高めに近づいていくと、肩がそれはもう盛大にビクッと跳ねたので、心配して声をかけつつ相手の顔を覗き込んだ瞬間、両手で突き飛ばされた。そして真っ赤な顔で声にならない悲鳴を上げると、バタンっと大きな音を立ててドアを閉められた。一瞬唖然としたが、さっきの反応は今までと違ってホントにヤバイ、と思って逃げたであろうその子の後を追いかけた。すぐ捕まえることはできたが、今度はホントに悲鳴を上げられ、寮生が集まってきてしまい、焦って手を放してしまった。そして逃げたその先が、悲鳴を聞きつけて問題を解決しに来たであろう寮長の背後であり、私も思わず泣きついて寮長に助けを求めてしまった。

物凄くめんどくさそうな顔をされたがなんとかきちんと説明していただくことができた。そのおかげで、今ではかなり打ち解けた仲になっている。ほんの数日前だけど、懐かしいと感じる。同室の彼女は実際にはめちゃくちゃクール・・・というか感情を表にほとんど出さないみたいだから。

数日間のことを思い返し、また、私の手元にある制服に目を落としてため息をついた。

嫌々ながらその制服に着替えると、ここ数日で日課となった同室の彼女を起こすことにする。あたしの朝は早い。今まで体力づくりのために毎朝朝練していたためだ。でも朝が強い訳ではないので、どんなことをしていたかはあまり覚えてない。ただ、結果的にきちんと体力はついた。ちなみに今日は気づいたら腹筋をしていたぜ☆

ユサユサユサユサ・・・

「絢子～、朝だよ～。」

「・・・」

「絢子〜、起きろぉ。」

ユサユサユサユベシッ！！

「・・・・おはよう絢子。」

同室の彼女改め『杉沢絢子（すぎさわ あやこ）』は私以上に朝に弱い。今までどうやって起きてたんだ、と思わずにはいられないほど寝起きが悪い・・・というより起きない！！今だってずっと揺らしてた手を払い落してやっと起きたし・・・あんまり盛大に起こしすぎると痛い目に会うのだ・・・初日でもう学んだよ・・・

「おはよう・・・今、何時・・・」

「今7時。今日は入学式だから2度寝するなよ。少し早目に起こしたんだからちゃんと目ぇ覚ましとけよ。」

のろのろとした動作で上半身だけを起こし、私の言葉にコクン、コクンと2度頷いた。分かってるのか、分かってないのか、よくわからなかったが話はちゃんと聞いていたんだろうと理解し、それを確認して私は朝食を採りに食堂へ向かった。

＊＊＊＊＊

入学式は9時からだ。
新入生を迎えるため、在校生が少し朝早くから入学式の準備をしている。そのためか寮の中はとても静かだった。というか、国立といっても、入学式とかの準備を在校生がやるってシステムはどこも変わらないらしい。
誰もいないガランとした食堂に入ると厨房の方におばちゃんがいる。近づくとこちらを振り返り、私の姿を見て驚愕の表情をされたが、何かと目立つ容姿のおかげで私だと分かってくれたらしい。

（私としては納得いかないけど。）

「おはよう。今日も時間通りだね。注文は何にするんだい？」
それでもいつもの嫌みのない優しい笑顔をたえながら話しかけられたので、あまり気にしないこととする。

「おはようございます。そうだなぁ、今日はパンが食べたいからパンセットでお願いします。」
「あいよ。ちょっとだけ待っててね。」
少しするとパンの焼けるにおいとともに、卵やベーコンの焼ける音やにおいが漂ってきた。

「はい、おまたせ。しっかり食べるんだよ。」
「ありがとうございます。」
そうして出来上がった朝食が乗ったお盆を受け取り近場にある席に座った。
とその時、食堂の出入口のドアがガチャという音を立てて開いたよ

うな気がして振り返ると、全開に開かれたドアがあるだけで、そこには誰もいなかった。

「あれ？ヨーコちゃん。私ドア開けたままにしてたっけ？」

さっき確かに閉めたような気がしていたので、全開になっているドアを疑問に思い、ヨーコちゃんに確認した。しかし、聞くとヨーコちゃんも分からないみたいだった。

「さあね。厨房の中からじゃドアは見にくいからわからないね。ほらほら、そんなこと気にしてる暇があったらちゃんとご飯食べなさい！せっかく作ったんだから温かいうちに食べないと。」

「はあい。」

納得がいかない感じだけど、ヨーコちゃんの言うことにも一理ある。ドアが開いてたって閉まってたってそんなの今は関係ないだろう。目の前の食事に集中するとしよう。

「あーー、でもさあヨーコちゃん、」

「なんだい。」

「ドアはやっぱきちんと閉めないとだめだよね。」

私は箸を咥えたまましゃべると、行儀悪いと注意されながら怒鳴られた。

「そんなに気になるんだったら自分で勝手に閉めてきなさい！！」

そんなことでこの私がめげるわけもなく、いそいそとドアを閉めると、いつも通りヨーコちゃんと会話しつつ、食べ進めた。

「それにしても、他の人たち全く来ないなあ。」

食堂にはいつも早く来ているが、それでも既に数人いたりするのだが、今日は食べ終わったのにもかかわらず誰一人としてこない。ちなみに、食堂に早く来るのはよい子は寝る時間が早いからだぞぉ☆・・・・な訳もなく、朝からひと騒動なんて御免だからな。

「なに項垂れてんだい？」

「うん、ちょっとね、自分がどんだけ気持ち悪いのか考えてしまって。」

「ははは！何だねそれは。ホント面白い子だね！」

そんな陽気に笑うヨーコちゃんがまぶしいぜ・・！！

まあ、余談はそれくらいにしておき、7時半を回っているというのに誰一人としてこない。

「入学式っていう晴れ舞台なのに、新入生すら来ないっていうのは・・みんな意外と余裕？」

私は全然余裕じゃないけどな！平静を装ってますがかなりバクバクいってます。ええ、すげぇー緊張しております。今だここに受かったなんて信じられません。

「そうなのかねぇ・・・朝ごはん食べないで行くつもりかね。朝はしっかり食べないと元気でないっていうのに。」

苦笑して洗いものに目を落とされると、こちらもどう反応していいものか分からない。ヨーコちゃんは寮生の栄養管理とか自主的にしているから食べないで行く子とかいるといつもさびしそうな顔をする。

二人とも黙ってしまったので、食堂がシン・・・と静まり返り、ヨーコちゃんが洗い物をする音だけが響く。
と、そこで食堂の外が騒がしいことに気がついた。
“ちょっと！どうするの！？もうこんな時間になっちゃったじゃない！寮長はまだ来ないの！？早く連れてきてよ！遅刻しちゃうじゃない！！”
ボソボソと音量を下げて怒鳴りあっているような声がする。なんか嫌な予感を感じながらも、気づいてしまったのだからほっとくことも出来ず、何をしているか聞きに行こうとして立ちあがったその時、一際大きな声が食堂の中に響きわたった。
「だから、さっきから言ってるじゃないですか！！なんでそんなに面倒くさそうにするんですか！？そんなに信じられないならちゃんと見てくださいよ！！」
キーンと耳に残るアルト声の悲鳴じみた怒鳴り声と同時に食堂のドアが勢いよく開かれた。
「お、本当に男子生徒がいる。」
開かれたドアの前に居たのは寮長と、その後ろでササメキ合っている2，30人のココ寮生たちだった。
その人数に驚いて固まっていると、寮長がコツコツ・・と音を立てて私の方に歩いてきた。
（と、いうか）
「寮長・・・」

恨めしそうな声が出た。

「ああ、くつくつ・・・もちろん冗談だから安心しろ。」

「・・・冗談に聞こえない冗談はやめてください。」

今はめちゃくちゃ笑われているからかなりイラついているが、先ほどのは、いつもの無表情で言われたので一瞬寮長でもわからないのか！？と思ってしまった、そんなわけがないのに。髪切った後に全く動じなかった人がこんなカッコしてるから気づかないなんて、あり得ない。

「？・・・なんだい、入り口でみんなたむろして・・・何か問題でもあったのかい？」

おそらく一番この状況が理解できないであろうヨーコちゃんは、我慢できなくなったのか声をかけてきた。

「何かって、目の前に問題があるじゃないですか！？」

さっきからずっと叫んでいる子が、私と寮長にやり取りを見て呆気にとられていたようだが、ヨーコちゃんの言葉とともに復活した。

「？・・・目の前・・」

（あああ・・・そこで私に目を向けないでください・・指を差されたからって、そんな純粋な目で私を見つめないでくださいごめんなさい。）

「そうだ。聞いた話では女子寮の食堂で“男子生徒”が一人で朝食

を食べている・・・という話を聞かされてなあ・・・準備で忙しいって言ってるにもかかわらず急に連れ戻されたんだ。」

「・・・ぶ・・」

（・・・）

「あはははははははははは！！」

（くそう！そんな腹を抱えて笑わなくたっていいじゃないか！）

「・・・ぷ・・」

「寮長！あなたは笑いすぎですよ！さっきから！！」

笑い続けている二人を睨めつけながら絶対後で痛い目見せてやる・・・などと出来もしないことを想像しつつ憂さを晴らしているとまた怒声が響きわたった。

「何がおかしいんですか！？朝早くから女子寮に男子がいるなんて問題ですよ！！」

「いや、こいつがここに居ても特に問題ないぞ。」

「何でですか！？」

寮長は笑いから一旦引き戻されると、叫んでいる子へ否定を示した。というか、すぐにフォローすればいいのに引っ張るからだんだんとヒートアップしてきた。

「いや、だから大丈夫なんだって。」

「何が大丈夫なんですか！？そこに居るその人は何なんですか！？どこからどう見ても男子生徒じゃないですか！！」

「いや、違うよ」
「でも、」
そこでビシッと私の胸辺りを指差し、
「あれは男子の制服じゃないですか！！」
（ぐ・・・やっぱりそこに来ますよね。言われると思ってましたよ。ええもう、ほんとどうしようかね。）
今宣言されたとうり、私は男子の制服を着ている。何故かって？それは1か月前にさかのぼる。
の前に、そこで吹き出しそうになってる二人、マジでしめる！

＊＊＊＊＊

3月のうららかな日差しが降り注ぐ某日。学校用品を揃えるため、第5陣の買い物に出かけた。
（あ～～、だるい・・・しかも日差し強いし。やっぱ昨日出かければよかった。）

3月にしては日差しの強い、でも春の近づきを思わせる暖かさの感じられる中、グタグタとだるそうに愚痴をこぼす。いや、でも、起きて窓見たときは天気だからよかったと思って出かけたんだ。昨日はくもり空だったから気が乗らなかったんだし。でもやはり、昨日に引き続いて絶好の昼寝日和なのに・・・

だらだらと眠気を誘う陽気の中、目的地まで歩く。

今日はいろいろな所に行ったり来たり、下を向いたり上を向いたりで忙しいだろうと思い、腰まである長い髪を頭の上で一本に縛っている。そして中途半端な長さの前髪は、簡単に左右に分け、ヘアピンでとめた。

そこで、お気づきの方もいると思いますが、もちろん、現在顔が露見しているわけでして・・・ハイ！そうです。パーカーにジーンズといった簡単格好でもあるので、男に間違えられて逆ナンされるはされるわ・・・それをかわすのがかなり大変です。そのせいで余計疲れ倍増です。まだ、目的地にすらついてないのに・・・

（なんでそんなに声かけてくるかね・・・見ようによっちゃ女に見えると思うんだけど。）

もっとそれらしい姿をすれば分からなくもないが、今着ている服は兄たちのおさがりだ。こんなダボついた服着てるやつになんで声をかけてくるかわからん。あ、あれか、今流行りのダメージジーンズみたいなやつなのか！！古着とか今も昔も関係なく流行るからな！！

（まあいい。こんな疲れることからも解放される！！今日で全部揃うんだ！！）

“第5陣”と言っていた通り、今日で買い物に出かけたのは5回目だ。いやね、初めは一日で終わる予定だったんだ。けど女の人が寄ってくるせいで、疲れきってすぐ帰っちゃったんだよね。それでち

びちびと集めてやっと今日で終わる！

（最後は、一番人でごった返しているであろう制服！）

目的地は“ｕｎｉｆｏｒｍ　ｓｐｅｃｉａｌ　ｓｔｏｒｅ”と看板が出ているはずの店だ。その名の通り“制服専門店”である。意外と学園の制服を扱っているところは少ない。なぜなら、魔術を教えるところなので、布とか扱う素材に特殊なものを使っているらしく、こういった大手専門店とかじゃないと扱ってない。

カランカランッ

お店は大通りに面していたのですぐ見つけることができた。意外と可愛らしい建物で、入るのに少し躊躇してしまった。
ドアを開けると内側についていたのであろうベルが鳴ったのだが、その音をかき消すほどの忙しさらしく、意外に広い室内は店員と思わしき人たちが右へ左へ行ったり来たりしていた。
声をかけるべきか否か、考えて入口で突っ立ていると、一番近くに居た店員がこちらの存在にやっと気がついてくれた。

「いらっしゃいませ。お待たせして申し訳ありません。こちらではお示しいただければ、どんな制服でもお作りいたします。どちらの物を御所望でしょうか。」
「ああ、えっと、国立魔術師育成学園高等部に今度入学するんですけど・・・」
「まあ、魔学の新入生の方だったんですね。おめでとうございます。では、ご案内いたします。」

一般的に、国立に入ることができるのはほんとにおめでたいことなので、とても驚かれた。接客業の人が知りあいでもないのにここま

で打ち解けるって、おかしいだろう？
店員についていくと、寸法台に着いた。
「ただいま込み合っておりましたので、こちらで少々お待ちください。もうしばらくで終わりますので。」
そういうと、軽く頭を下げてきた道を戻って行ってしまった。とりあえず、並べてある椅子に腰掛け、慌ただしい店内を見渡した。さっき一瞬見ただけでは分からなかったが、本当にいろいろな服が取り揃えてある。学生服はもちろん、警察官、消防士、看護師、どっかのコンビニ、ファミレス・・・あ、魔法少女！？
（いや、確かに魔術を学ぶわけだから魔法少女ではあるけど、あれは、どう見てもコスプレの域だろう。）
ここは、デザインさえあれば何でも作ってくれるっていうのは嘘じゃなかったんだな。
（あ、魔学の制服もある。）
おそらく見本に使うのであろう女子の制服が見えた。
その奥の方では親子が嬉しそうに制服の試着をしている。
（いいなぁ、お母さんと一緒に買い物来たんだ。）
羨ましいなと思っていると後ろの方から威勢のいい声が聞こえた。
「大変お待たせいたしました！」
振り返ると笑顔万点のいかにも新人そうな店員が立っていた。

「学生服のお求めですよね？前の方が終わりましたので、どうぞこちらへお進みください！」
「ええっと、さっきの人は・・？」
「ああ、お客様。ご心配なさらないでください。先の者は受付でございますので、実際には私がが担当させていただきます！」
「そうですか・・・」

私の困惑を察してくれたらしく、フォローを入れられた。でも、心配してたのはそんなことじゃなく、ただ単に、もう少し静かに対応していただけたらと思っただけだ。この店に来るだけで、かなりの体力を消耗したので。

「あれ？本日はお一人でいらしたんですか？」
「ええまあ。親と都合が合わなくて。」
「そうなんですか。私の時は無理やりついてきたんですよ～。」

いいなあ。都合が合わないっていたけど、実はそんな理由じゃない。1回目に買い物に出かけた時はもちろん母さんと一緒に出たのだが、ちょっと離れたすきに次々と女の人に声をかけられたせいだ。1回目だけだったらよかったんだが、2回目も同じことがあり、“2度あることは3度ある”とか言い出し、3度目からは1人で出るようになった。まあ、実際には5度あったわけですが。

「こんな方向音痴を広い土地になんて1人で放せいない、とか言いましてね。」

（予想してなかった答えですよ！）

やはり世の中にはいろいろな親がいたものだ。

「では、測らせていただきます。」
店員はゴソゴソとメジャーを取り出し、肩や腕など、寸法を測りはじめた。
「身長はおいくつありますか？」
「１５８ｃｍだったと思います。」
「１５８ｃｍですね。」
測りつつ、身長や体重、座高などを聞き取り、用紙へ書き込んでいく。
「初めにお聞きするのを忘れてしまっていたんですが、お名前をお聞きしてもいいですか？」
「はい。藤城裕哉です。」
「新入生ということでしたので、今年で１６歳ですね。」
「はい。」
私の個人情報について答えつつぼんやりしながら書き留めていく用紙を眺める。
（て、あああああ！！）
おそらく忙しかったことと、年齢についても、自分の予想が当たったので、私に確認を取らなかったのだろう。間違えられたか所をガン見して、直してもらおうと口を開いた。
「あ「では、続いて、住所と連絡先をお願いします。なお、制服は完成次第、こちらの住所の方へと送らせていただきますので、送付

先をお願いします。」
「え、あ、じゅ、住所は・・・」
しどろもどろになりながら何とか受け答えるが、間違えられている性別の欄が気になって仕方がない。忙しさからなのか、私からの反論を一切受け付けず、聞き取りを終えるとそのまま流で退出させられてしまった。
店の外に立ちつくし、でも、もう一度中に入る気にもなれず、そのまま肩を落として家路に着いたのであった。

＊＊＊＊＊

（やっぱり、問題になるよね。いやでも、まあいいかなって思っちゃったんだよなあ。）

一か月前のことを思い返しながら深々とため息を吐いた。

「まあ、藤城は女だってちゃんと報告は来てるんだ。それでよくないか？それに、規則には、制服は着用しろ、としか書いてない。男子用を着てても別に校則違反じゃないぞ。」
「そんなのへ理屈ですよ！！」

なんだか、私が少し沈んでいる間になんだか進展があったみたいだ。
「へ理屈でも何でもいい。私が今いいと言ったんだ。だからかまうな。」
（じょ、女王様がおいでなすったーーー！！！）
寮長は思い出したころに横暴な一面を見せる気がする。いつもは真面目な寮長なんだけど、めんどくさそうなこととかあると、急に変なことを言うような？
突っかかっていた彼女もさすがにその台詞には驚いたようで固まってしまった。やっぱりさすがに非常識すぎる。
「それにな、こいつがスカートなんて履いてたら、変態じゃないか。」
「ちょ、寮長、なんてことうおお！！」
さすがの暴言に言い返そうとしたら、首根っこを掴まれ急に方向転換させられた。目の前には寮長のせいで固まってしまった彼女がかなり真近に居る。お互いに驚いて目を見開くが、私はまた叫ばれたら耳がやられると思い、すぐ愛想笑いに切り替えた。
「悪い。まさか私も本当に男子の制服が届くとは思わなかったんだ。買いなおしてる暇もないし、寮長の言ったことは納得いかないけど本当だし、このままじゃ、ダメ、かな」
と、困ったような顔をしたまま相手の目を見据え、軽く首をかしげると、超音速気味に顔お逸らされた。
（え）

「いいんじゃないの、そのままで。」

そう言って。私の体を押しのけ、ヨーコちゃんに朝ごはんを注文しに行ってしまった。それがきっかけとなって、ドアの前で入りかねていた寮生たちも食堂の中へと入ってきて、いつもの食堂の風景が作り上げられた。

（ん？あれ、何があった？）

「お前・・・・」

寮長は、最後の言葉は発せず、無言のまま、掴んだ襟首引っ張り、廊下へと2人で移動した。食堂の扉を閉めると、その奥から、話声とかが聞こえてくる。

「まったく、世話が焼けるなぁ。」

「うう・・・その点におきましては大変申し訳なく思ってます。」

苦々しく思いつつ、沈みながら答える。

「そう思ってるなら、自分で解決しろ。」

そう注意を受けながらでこピンされる。これがまた結構痛かったりする。

「すみません。」

「でもまあ、学園の方ではもう大丈夫だろ。」

「なんでそう思うんですか？」

「だって、これからその恰好なんだろう？だったらもう起こりえな

いなよな？」

ビクッ！！

「・・・」

「では、私は戻るぞ。まだやることを少し残してきたからな。」

過ぎ去る寮長の後姿を眺めながら、反論できない自分がみじめに思った・・・が、そんな黒い顔で脅されたら誰だって何も言えなくなるっての！

閑章　やくそく（前書き）

短いです。番外編です。・・・すみません。

閑章　やくそく

「う・・・ひっく・・・ぅ・・・ぅぅぅ〜〜〜・・・・」

陽はすでに沈み、空に星と満月が輝いている。
その満天の星空の輝きをうけ、まだ咲初めの桜が照らし出されている。
その桜の木の下では、小さな子供たちが向かい合ってしゃがみこんでいた。

「おいおい、なくなよぉ。あたしにどうしろっていうんだよぉ。」

泣き続ける友人うさに対して、私は困り果てながら、なんとか泣きやんでくれないかと話しかけていた。

「だって、だって・・・ゆうちゃんが・・・」
「さっきからゆってるけど、どうしようもないだろ？それでなっとくしてよ。」
「・・ひっく・・・でも、」
「でもじゃない。こんなところにげこんで、みつかったらおこられるだろ。」
「ご・・・ごめんな・・さい・・・」

謝られても、仕方がないような気がする。ここの関係者の人に見つからず帰れたとしても、こんな遅くまで子供だけで外に居るのだから、親にはこってり絞られるのは確実だろう。

「はぁ・・・」

ビクゥ！！

親に怒られることを考えてため息が出たのだが、それを勘違いして自分せいだとでも思ったのか、大きく体を揺らし、激しく泣き始めた。

「うぅぅぅ・・・うぅぅぅぅ～～～～～・・」

「あ～～、そんなびくつくなって！べつにおまえにおこってるわけじゃないんだから！！」

「・・う・・ん・・・・」

「よし。じゃあかえろう！みんなしんぱいしてるだろうからさ！！」

泣き方は激しさを増してしまったが、私の言葉をきちんと聞き取ることができたのか、少しだけ落ち着いてきたみたいだった。だから私はもう大丈夫だろうと思い、家へ帰るため、立ち上がって相手へと手を差し伸べた。

すると、一瞬理解できなかったのか、きょとんとした顔をした。その後すぐに顔をしかめ、ジッと、まるで親の仇を見たかのように差し出した私の掌を睨みつけた。

べし！

睨めつけていたかと思ったら、次の瞬間たたき落とされた。

「・・・おまえは・・・ほんとうにどうしたいんだよ！！」

陽がほとんど沈みあたりが暗くなったときから、ずっとこの調子で要領を得ないため、さすがに頭に来てしまった。勢いを付けて怒鳴りつけてやろうとしたら、何か小さな声で言っていることに気がつ

いた。

「なんだって？ききとれないよ！」

私がそう叫ぶと、泣いてグチャグチャな顔を上げて睨みつけ、叫びながら立ち上がった。

「ゆうちゃんはかってだよ！！」

立ち上がる勢いがよかったので、驚いて後ろに少しさがりつつ、叫ばれた内容がよくわからず首をかしげた。

「なにがかってだよ。」

「ぼくのこと、たすけてくれて、ずっと、おおきくなるなっても、ずっと、ずっといっしょにいてくれるって、ずっといっしょにいてくれるって、いってたのに、それなのに・・・それなのに、ぼくからはなれてとおくにいちゃうんだ！！」

今まで思っていたであろうことを一気に吐きだし、肩で息をしていたかと思ったら、急に桜並木の奥の方へと走り出して行ってしまった。私は、うさがこんなに大きな声で話すことがなかったため驚いてしまい、反応が遅れ捕まえる事が出来なかったので、すぐに追いかけた。

「ちょっとまてぇぇぇぇぇ！どこいくんだよ〜〜〜！！」

「おいかけてこないで！！」

「おいかけるわ！」

「うそつき！！」

「しかたないだろう！！とうさんがしごとでひっこすって言ってんだから！！」

「ずっといっしょだって！」
「いったけど！！」
「そばにいてくれるって！！」
「いったけど！！」

走りながらうさが叫ぶものだから、それに受け答えをするものの、こっちの話は全く聞いていないため、どうすべきか必死に考えていた。

（もう、こんなおくまできちゃった。どうやってとめればいいんだ！？）

走りながら、受け答えしながら、相手が納得するようなことを言わなければいけなかった。一度に3つのことを行っていたため、だんだんと訳が分からなくなっていき、私の中の容量がパンクしてしまい、突拍子もない行動に出てしまった。

「いいから、と・ま・れーーー！！」

まだ何かごちゃごちゃと叫んでいるようではあったが、頭がパンクしてしまった私にはもう、聞こえなかった。そして私は思いっきり地面を蹴ってうさへ飛びかかった。

「うわぁ！」

どんっ、ズサァ。

危ない方法ではあったが、なんとか捕まえることができた。
また逃げられることがないように、ぎゅうっと腰に回している腕に力を入れた。

「やっと、つかまえたぞ。」
「いやだ～～～！！」
「いやって、おま、あばれるなぁ！！」

腕に力を入れた瞬間、ジタバタと暴れ始めた。腹に蹴りを入れられ、頭を押さえつけられるが、うさが暴れれば暴れるほど腕に力を増していく。

「はなして！！」
「はなすか！」
「いや～～！！」
「いっ」
「！」

うさが私を引きはがそうとする際、顔を押さえつけるので、うさの爪で目の下あたりが切れて血が出てしまった。しかし、そのおかげで、うさは驚いたのか大人しくなった。

「・・・」
「きにしなくていいから、だからもうにげたり、あばれたりするなよ？」

目を見てそう言い聞かせると、コクンと小さく首を縦に振った。だいぶ落ち着いたようではあるが、まだ目に涙がたまり、小さくしゃっくりしていた。
その姿を確認して、ソッと回していた腕を解いた。お互いに地面に座り込んだまま向かい合うとうさから話を切り出した。

「ねぇ、ゆうちゃん。」

「ん？」
「ほんとうにとおくにいっちゃうの？」
「うん・・・」
「そっか・・」
「うん。ごめんな、やくそく、まもれなくて・・」
うさは横に小さく首を振る。
「ううん。」
「こどものあたしたちには、どうすることもできないんだ。」
「そうだね、はやくおとなになりたい・・」
“ずっといっしょにいる”
そう言ったことがある。初めて会った時にうさはいじめに合っていたのだ。私もよく男女（おとこおんな）と悪口を言われていたので思わず助けてしまった。その時のうさの情けないこと・・・だから助けてくれる人がいないって言うなら私が“ずっといっしょにいてやる”と言い放った。私もその時の勢いで言ったものであったので、まさかここまでうさの中に残っているものとは思わなかった。
とても顔を合わせられなかったので、うさから顔をそむけた。その先にあったものは・・・
「なぁ・・・ここって・・・」
「がくえんだね。」
目の前にそびえていたもの、それは“国立魔術師育成学園”。魔法・魔術というものが発見された時建てられた建物だ。
「そうだ！ここにこよう！」

「え？」

私は唐突に、いいことが思い浮かんだとでも言うように勢いよく立ちあがり、うさへと言い放った。

「さっきのやくそく、まもれなかったから、あたらしいやくそくだ！ここでまたあおう！このがくえんで、またいっしょにいっぱいあそぼう！！」

「あたらしい、やくそく？」

「そう！ここにはいれるくらいになったら、いまよりもっとじゅうになるし！ここにはいるのむずかしいらしいけど、ここ、ふしぎなうわさとかあるらしいし、そんなところだったら、いまよりいっぱいあそべるだろ！！」

満面の笑みでうさに言うと、最初はびっくりして聞いていたみたいだったが、話の内容を理解することができたのか、泣いて赤くなった目を細くして微笑んだ。

「うん、やくそく。」

「またあうときはこのばしょで！！」

まだ地面に座り込んでいるうさへ立ち上がるためにと手を差し伸べて、重ねた手をまるで約束の契りとするかのように、お互いにぎゅっと強く握りしめた。

閑章　やくそく（後書き）

うん。フラグとか伏線って回収するの大変じゃないですか。
ばっきばっき折ってこうと思います。（ネタばれ上等！）
私的には深みのある話って言うんでしょうか、考えさせられるような話好きなんです。でもプロット苦手なせいで絶対回収できなくて、訳わかんないまま終わっちゃうので、先だし又は即回収で行きたいと思ってます・・・
（ヘタレですみません。）

第二話　入学

“・・・であるからして・・・この学園では・・・・・・”

式が始まって数刻。私は朝の出来事もあったせいで、既に疲れ切っていた。いや、そもそも、在校生が準備していたにもかかわらず、なんだこの普通さは。だって唯一の国立魔術師育成学園だよ？華やかさに期待するじゃないか！なのに普通だ、普通すぎる。人数が公立の学校より多いことが理由で準備を総出でやってただけなのか！？つまらねぇ！！

（つーか、まじでだるい。寮長の意味ありげな顔も怖かったし・・・もう寝たい。）

おそらく、この場所でこんなダレてしまっているのは私以外いないだろう。周りを見渡せば、ビシッと制服を着こなして、教師の話を真剣に聞いているものや、これから起こることに対してだろうか、不安そうな顔をしている者もいる。しかし、やはり一番多いのは、誰もが憧れるこの学園の生徒になれたことによる誇りと期待に満ちた表情をした者たちだ。

ひとつ一応言っておくと、私も着こなしているかどうかわからないが、きちんと制服を着ているぞ。男子の制服だがな。入口に風紀委員と思われる生徒が立っていて身だしなみを注意していたから、着崩している新入生は一人も見当たらない。

“続きまして、新入生の言葉。新入生代表『佐倉葵（さくらあおい）』”

「はい。」

おそらく、最初から配慮して前の方に座っていたのだろう。私は後ろの方に座っていたので全く見えないが、前の方に座っていた新入生が一人立ち上がり、壇上の方へと歩いていく。

（あおいちゃん？女の子？ははぁ、男尊女卑の姿勢がまだ残るこのご時世に女の子が新入生代表かぁ。よっぽど頭いいのかな。）

今でもまだ男性の方が優位なこの社会の中で、誰しもが注目するこの学園の入学式で、まさか女子生徒が壇上に立つとは思わなかった。どんな子が壇上に上がるのかと、そわそわしつつ眺めていると、下にズボンをはいているのが見えた。

（チッ。男か。面白くないな。）

女子生徒だとばかり思っていたので、実際に壇上に上がったのが男子生徒だということで気が抜けてしまった。思っていたより入学式ということで緊張していたらしく、今ので本当に緊張の糸が緩んだようで、周りの新入生たちが何か小声で話しあっている声が聞こえてきた。

“まぁた佐倉だよ。何年連続だよあいつ。お前知ってるか。かなり前からずっとだろ。まじすげぇよな。やっぱお坊ちゃんは俺たちと格が違うってか。お前あいつと話したことある。いや、俺はないな。俺あるんだけど、あいつムカつくんだよ。何が。何事にも無関心で話しかけても必要ないって思ったら無視すんだよ。マジで。そんで見るといっつも一人で勉強してんだよ。うわ、なんだそれ。もうあれ、勉強中毒だよ。うわぁ気持ちわりぃ。”

近くにいた男子生徒達は、クスクスと嫌な笑い方をした。なんだかだんだんと悪口、というよりもタダの僻みのようなことを話し合っ

ている。また、後ろの方からは女子生徒のヒソヒソと話す声が聞こえてくる。

“すごーい。やっぱり今年も葵君よ。さすがよねぇ。首席は葵君だったのね。勉強できるし、スポーツもなんだってできるし。ルックスもいいよね。家柄だっていいし。ちょっと冷たいところがまたいいよね。”

小さな声でキャイキャイと黄色い声をあげている。その佐倉葵が現在新入生の言葉を語っているにも関わらずずっとしゃべり続けている。

ヒソヒソとしゃべる生徒が多くなってしまったこともあり、教師たちがこちらもまた小さな声で注意していた。一方壇上の上にいる彼の人は涼しい顔で朗々と読み上げている。

（ああ、あれか。少女マンガとかに出てくる王子様タイプのあれか。新入生代表ってわけだし、トップだろうから私にはまったく関係ないか。どうせＡクラスだろうし。）

「・・・・。これを新入生代表の言葉とします。１―Ａ佐倉葵」

最後に新入生全員が立ち上がり一礼した。

（はあ。・・・プログラム、後いくつ残ってたっけ？）

＊＊＊＊＊

やっと終わり、大講堂から出ていくと後ろから声をかけられた。

「すごく疲れてるわね。」

振り返るとそこには絢子がいた。というか、後ろ姿ですら分かるぐらい疲れた雰囲気でてるのか？

「おう、絢子は元気そうだな。ずっと座ったままだったっていうのに。」

「そうね。晴れの舞台だというのにそんな疲れてる人も珍しいと思うけど。」

朝にあれだけ騒げば誰だって疲れると思う。ちなみに絢子は私が部屋に戻ってからやっと食堂に向かった。

「ははは。いやぁ、仕方ないだろう？それにほら、私、なんでも顔に出ちゃうからさ。」

「確かになんでも顔に出るわよね。何というか、嘘のつけなさそうな人。」

「そうか？だからって素直ってわけじゃないぞ。」

「そうね。」

（即答！どちらかといえば否定してほしかった。）

嘘とか絢子の前で吐いたことあったかどうかぶつぶつと呟きながら

考えていたら、盛大なため息を疲れてしまった。

「そんなことより、早くクラスを見に行くわよ。」

「うう、すんません。て、絢子待ってよ！」

まるで、バカのとなりは歩きたくないとでもいうかのようにスタスタと先に歩いて行ってしまった。

必死で絢子の早歩きについていくと人がゴッたかえしているところに着いた。今は見えないが、おそらくこの前の方には掲示板があってそこにクラス表が貼り出されているのだろう。歓声やら悲鳴やらが聞こえ、まるで、大人数でおしくらまんじゅうをしているかのような光景だ。

「て、あれ？絢子？」

こんな中に入って行かなきゃいけないの嫌だなぁと思って、光景を眺めていたら、隣にいたはずの絢子がいつの間にかいなくなってしまっていた。先に掲示板を見に行ったのかもしれない。女の子の標準身長よりも小さい絢子を見つけ出すのは難しいかもしれないなぁと感じつつも、ずっとここに居ても時間ばかりが過ぎてしまうので、突入する決意を固めた。

（はあ。頭が良ければ、寮の部屋割りの時点で分かったんだけどな。）

Ａクラス～Ｄクラスまでは、クラスごとに部屋が分かれているため、ほとんどここには来ていない。Ｅクラス～Ｊクラスの者が今ここに集まって、皆必死に自分のクラスを確認しようとしている。

（おや？あそこは何してんだ？）

突入しようとした時、後ろの方で何か怒声のような声が聞こえた気がして、振り返ると、ここより少し規模は小さいが人が集まっているのが見えた。興味がわいてしまった私はその集団へと近づいて行った。・・・こっちの方が人数少ないから入るならこっちだとか全然思ってないですよ？

「やんのかコラァ！！」

「弱いくせに吠えてんじゃないよ！！」

（や、ヤクザの戦い・・・？）

目の前に広がっていた光景はまるでヤクザのごとき荒れた生徒たちが対立している風景であった。その周りを一般生徒が取り囲んでいる。おそらく前に一歩出て睨みあっているのがリーダーなのであろう。周りの子分と思わしき奴らがその人達より前に出ようとしない。

「あ”あ”！！女風情が何語ってんだ！？」

巻き舌交えて叫ぶと同時に、男の方のリーダーが女のリーダーに殴りかかった。

ヒュッ、バシンッ！！！

「いって・・！」

「「「「！！」」」」

「だ、誰だテメェ！！」

思わず、本当に思わず女性が殴られると思ったので前に出てしまった。女のリーダーの方は、まさか公衆の面前で殴りかかってくると

は思ってなかったらしく、全くの無防備だった。なので思わずヤバいと感じて庇うように前に出て、相手が繰り出した拳を左手で受け止めた。

（うあ・・・ど、どうしよう。）

「お、落ち着きませんか、先輩方。」

今、この周りには、離れたところでクラスが掲示されている掲示板を見ていた生徒たちも、こちらの騒動に気付いて周りに集まってきていた。集まった生徒たちが、先ほどまでヒソヒソと話し合っていたのが、今では大きな声でこちらの様子を語り合っていた。

“あの子、バカじゃないの。あいつ終わったな。何を思って割り込んだのかしら。佐倉家と朝倉家の仲の悪さは有名だっていうのに。知らないの。死にに行ったようなもんだ。誰か助けてやったら。だったらおまえが行けよ。やだよ。”

などなど・・・このヤクザみたいな人達のことについて聞くことができた。

（し、仕方なかったんだ！思わず飛び出しちゃったんだよ！）

今更ながら、飛び出したことを後悔し始めた。前に出た一瞬だけは両者共驚き、唖然としていたのだが、今や先ほどの倍の殺気を放っている。

「どこの誰だか知らないけど、どきなさい！」

「いきなり声かけてきてんじゃねぇ！ぶっとばすぞ！！」

（あああ・・・時間を戻せるなら戻したい・・時間の魔法とかないんでしょうか。）

「何ずっと黙ってんだ。てめぇもしかしてこいつらの仲間か！」

リーダーと思わしき男は急に思いいたったとでも言うように叫んだ。それを聞いた女の方の集団が騒ぎ出す。

「何いってんだ！ふざけたこと言ってんじゃねぇ！！」

（私は一般人です。こんな人達の仲間なんて思われたなんて心外です。）

などと考えつつ、この場がさらに殺伐としたものに変化していく。そして、とあるキーワードによって、このいがみ合い・・・もとい喧嘩のスイッチが入った。

「お前ら朝倉家みたいに私たちは落ちぶれてねぇんだよ！！」

「！貴様！！」

私はずっといがみ合いの真ん中にいて暴言を一身に浴びており、えっと思った瞬間、男の方のリーダーが殴りかかった。

ゴッ！！！

“キャーーー！！ほんとに殴ったぞ！！どうすんだよ！誰か先生呼んで来い！！近くに風紀委員いたんじゃないか！？誰でもいいから制止できる奴連れてこい！！”

ギャラリーが叫び声をあげて叫びだしたが、私の耳にはまったく入

ってこなかった。

（な、んで・・・）

ギリッ

思いっきり奥歯をかみしめた。ついさっきまで、ただただ困惑していが、今では腹腸が煮えくりかえっていた。両者の集団は、リーダーが殴り合いを始めたこと、リーダーが殴り倒されたことにより、乱闘体制を取った。が、乱闘は起きなかった。なぜなら、私が女を殴った男をひねり？あげたからだ。一瞬で相手の懐まで入り込み、勢いづいて前の目になった体の襟元をひっつかみ後方へ軽く押して思いっきり前へ引いた。それと同時に自分の頭も同じようにして相手の額へと叩きつけた。

ゴヅンッ！！

「い”！！」

もちろんその場は突然の私の行動でシンと静まった。頭突きをうけた男はかなりの衝撃だったのか、体に力が入らなくなっていた。私は掴んだままの男の襟元を引き上げ、顔を近づけた。

「っ」

「男が、女より先に手ぇ出してんじゃねぇよ、みっともねぇ。」

私はそう一言だけ言い放つと地面へと投げ捨て、ジッと睨みつけた。先ほどまでかなり腰が低かったのに、急な変わりようだったせいで誰もが声を出さず、動けずにいた。

「チッ。お前、後で後悔する羽目になるからな。」

という言葉を残して男の集団は去って行った。

（・・・後悔する羽目・・・ね・・・・つーか、既に後悔してるから！！）

これからこの学園でやってけるのかなぁとか、そんなことを考えつつぼんやりと去って行った男たちの方を見ていたら後ろから声をかけられた。

「おい、あんた」

そう言えば後ろにも人がいたなぁと思い振り返ると、殴られた頬を腫らして怪訝そうな顔をしてこちらを睨む女性がいた。

「何でしょうか。」

「どこの誰かは知らないけど、助けてもらった身だ、一応礼を言っておくよ。」

「いえ。お礼を言われ」

「けどな、これは私らの問題なんだ。何も知らないような奴に口を出されちゃ困るんだよ。」

言葉を途中で遮られ、強く睨みつけながら迷惑そうに言われた。リーダーの後ろにいた人たちも頷いたりして肯定する雰囲気を醸し出している。

「ええっと、困ると言われましても・・・ただ見逃せなかっただけなんですが・・・」

「見逃せなかった、ですって？私たちはあいつらに負けるように見

えたっていうのか！」

リーダーを中心に仲間たちが騒ぎ出す。私は、ちょっとした興味本位でこの騒ぎに近寄ってしまったことを後悔した。野次馬でいるつもりでいたのだ、近寄って行った時は。

どうしたものかと私が黙っていると、相手がいきり立ってきた。

「おい、てめぇ！なん」

「あなたたちが弱くないことはこの学園にいることで証明されています。ただ、本当に見逃せなかった、本当にそれだけだったんです。男が女に先に手を出そうとするなんて、私の中でどうしても許せなかったんです。」

ない頭で痛む頭で必死に相手へと話しかけると、先ほどまでの勢いはなくなった。しかしまだ少し憤っているようである。

「あんたも、女は前に出るなって言いたいの？」

俯きながら静かにリーダーの女性は私へと問いかける。

（あああ！違う！そんなことが言いたいんじゃなくって・・・）

「だあ、もう！すいません、私頭悪くてなんて言っていいか分からないんですけど、女性に、そして無防備な人間に不意打ちでグーで殴られるところなんて私が見たくなかったんですよ！！女より、男の方が力が強いなんて当たり前じゃないですか。」

私が急に叫んだこともあってか、周囲はシンと静まり返っている。

リーダーは顔を上げ、ポカンとした顔をしてこちらを見つめていた。

私は、近くに寄って、相手の殴られて腫れている頬を手で包み、こ

ちらに向けられている両目を見つめ返した。

「余所者が入り込んで本当にすみませんでした。」

そう言うと、私は軽く首を傾げつつ小さく苦笑した。

そうしたらどういうことか、張り詰めていた空気が一気に柔らかいものへと変化した。その急激な変化に私自身驚いていると、目の前の人がしゃべりだした。

「そ、そそそ、そうね。分かっているのなら、別にいいわ。」

まるで、どこかで同じような風景を見たことあるなと嫌な予感を感じていると、その女性は私の手を払い落し、仲間に声をかけ去って行ってしまった。囲っていたギャラリーたちもちらほらと去っていくが、女の子たちが何故か黄色い声をあげているのが聞こえる。と同時に、急に肩をポンと叩かれた。

「おわ！！て、絢子か。脅かすなよ。」

「あなたのあれはもう、どうしようもないわね。」

振り返るとそこには絢子がいて、何やら不吉なことを言われた。というか、一部始終を見ていたらしい。

「まあ、そんなことどうでもいいわ。あなたのおかげか知らないけど、クラス表も見やすくなったし。」

（あ、あんなにいろいろあったのにどうでもいいんですか！）

と頬ひきつらせ、その言葉を華麗に流しつつ、話しかけた。

「どこに行ったのかと思ったら、やっぱあの人ごみの中にいたんだな。」
「当たり前よ。特別にあなたのも確認してきてあげたわ。」
二つに分けられた腰まである長いおさげを揺らしながら私を見上げた。
「ありがと。助かるよ。どこだったんだ？」
「あなたはEクラスね。」
「ふぅん。絢子は？」
「Gクラス。」
「・・・そう。」
私は忘ていた。寮の部屋が一緒だからってクラスまで一緒とは限らないのだということを。
「そんな情けない顔しないでくれない？気持ち悪いから。」
（き、きも・・・！ひ、ひどい！！）
絢子は毒舌の激しい人柄でした。忘れていた私が悪うございました！！それでも少し期待したんだ、“一緒じゃなくて残念ね。”という言葉を！！
（いや、しかし学園内では絢子の毒舌を学園では聞かないから別でよかったのか？）
しかし、一番初めに同い年で知り合って友達になれたのは目の前にいる絢子その人だ。別に小心者というわけではないが、初めてのところで一人というのはちょっとつらい、というか寂しい。知り合い

がいる方がやはり安心する。
うつうつと黒オーラをまとっていると絢子が話しかけてきた。
「そんなに沈まないでよ。まるで私が苛めてるみたいじゃない。寮に帰ったら会えるんだから別でも関係ないでしょ。」
訳：うざいから変なオーラ放ってんじゃねぇよ。
何か変な副音声が聞こえたような気がするが、気のせいだろ？え？聞こえないぁ・・気のせいと言ってくれ！！
あ、あと、もちろん周りから聞こえてくる黄色い声が激しさを増してるとか・・幻聴ですよね？

第二話　入学（後書き）

遅くなりまして申し訳ありません。
とっても難産でした・・・

第三話　斎名家（前書き）

絢子がいうことを聞かないのでＧＬＢＬ表記をはずさせていただきました。

第三話　斎名家

入学式後のホームルーム終了後、寮に戻ってきたわけだが、もちろん女の子たちに囲まれたのはおそらく想像に難くないだろう。絢子には見捨てられ、制服をもみくちゃにされつつなんとか寮までたどり着くことができた。

「そんな所につったって何してんだ？」

「寮長。」

寮の前にいたら後ろから寮長が帰ってきた。

「また問題でも起こしたのか？」

「な、なんでそんなこと言うんですか？」

「いや、誰だって思うだろ、そんなでこに湿布貼ってりゃ。」

ぐうの音も出ない。朝に問題起こすなと釘を刺されたばかりだったというのに。

「ちょっと・・・頭突きをかましまして・・・」

「そう。初日からお前も馬鹿だよなぁ。」

頭をポンポンなでて鼻歌を歌いながら先に寮へと入って行った。

実はめちゃくちゃ怒られるんじゃないかとヒヤヒヤしていたんだが、そんなに問題なさそうで思わず呆気にとられてしまった。

（というより、寮長に実害を与えなければそれでいい感じか？）

いつも以上に機嫌のいい寮長は見ていて逆に寒気がした。

＊＊＊＊＊

「あら、お早い御戻りね。」

ぐったりして戻ってきた私に、悠々と部屋のベットでくつろいでいる絢子から発せられた第一声がこれだ。

「もっと時間がかかると思ってたわ。」

「見捨てやがって、ひどいじゃないか絢子！」

一人で勝手に帰って行ってしまった絢子に思わず愚痴る。

「女の子、怖かったんだぞ！いつから女の子はあんなに積極的になったんだ！」

「意味分からないことを帰ってきてそうそう叫ばないでくれる。気分が悪いわ。」

「だって！脱がされるかと！」

「普通でしょ。」

「！！」

衝撃的なセリフを聞いたせいで二の句が継げなくなってしまった。
愕然と絢子を見やる。

「何？よくあることでしょう？」

（いやいやいやいや！！よくはないよ！？てか、たまにもないよ！！）

この学園の裏をまたしても見てしまったような気がする。

（ほんとにこの学園って常軌を逸している感が絶えません。）

「あ、そうだ。」
「アホみたいな声出さないで。」

（私は・・負けない！）

うん。自分自身でもさすがにキモイと思いました。うん。ぶりっ子系は似合いませんなぁ。

「・・午前中にさ、喧嘩仲裁したじゃない？」
「ああ、あなたが出しゃばったやつね。」

私の話を雑誌を見ながら聞き流す。そんな絢子の様子を見て、諦めを感じつつ部屋着に着替える。

「その時なんか、家同士の争いごとみたいな内容だったんだけど、どういう意味なのかなあれ。」

野次馬たちがどこかの家名を挙げていたこともあるが、喧嘩してい

た本人たちがめちゃくちゃ叫んだいたような気がする。そのため、これから学園でどう対処すべきか考えるためふと疑問を問いかけてみたのだ。
絢子の反応は顕著だった。
雑誌をめくっていた手がぴたりと止まり、まるで信じられないものを見つけたかのように私を見た。短い前髪によって、眉が中央に寄せられているのが丸わかりで、眼鏡の奥からみられるバカにしたような視線が私を捕える。

「な、何か？」

ちなみに現在着替えているため半裸状態だ。さすがにちょっと恥ずかしい。

「どうしてあなたみたいな人が私より頭がいいのかしらね。というよりよくここが受かったものね。」
「ええと、絢子さん？」

なんだか物凄く怒らせたらしい。
雑誌に顔を戻してぶつぶつと私に対しての文句を吐きながらページを乱暴に捲っていく。

「これを見なさい！」

見つけ出したらしい雑誌の見開きのページを顔の目の前で開かれる。

「“これぞ斎名家若（いつめいか）（次期）当主たちだ！”？？」
「そうよ。」

絢子から受け取った雑誌にはアイドル顔負け必死な美男美女の写真

と彼らの将来を期待した記事が載っていた。ただし記事の内容に彼らについて語ってはいるが、インタビューしたわけではないらしい。

「これがどうかしたのか？」

「いいから黙って読みなさい。」

絢子の目は本気でした。

記事の内容はこうだ。

つまり彼らは、国内でもトップクラスの魔術師の気質がある、代々続く由緒正しき血統で、その次代を任される若い（次期）当主たちである。

誰もが注目する佐倉家次期当主佐倉葵。独特な魔術は人を動物を草木を魅了してやまない。

妖艶さがたまらない倖村家新当主『倖村千鶴』。水系の魔術を得意としている。

穏やかな気質の久瀬家当主『久瀬日和』。風系の魔術を得意としている。

何事にも動じない菊池家当主『菊池一眞』。地系の魔術を得意としている。

誰よりも心やさしき朝倉家次期当主『朝倉蛍太』。火系の魔術を得意としている。

写真も載ってはいるが、すべて視線がカメラから外れている。

「隠し撮りも気になるけど、2人うちの制服着てない・・？」

「当たり前じゃない。ここをどこだと思ってるのよ。」

（いやまあそうなんだけど。）

読み終わった雑誌をベットに腰かけている絢子に返しつつ、向かい

側の自分のベットに腰かけた。

「佐倉と朝倉は私たちと同学年ね。」

「マジで？」

「ほんっとに何も知らないのね。斎名家くらい覚えておきなさいよ。一般常識よ。」

そんなこと言われても世俗じゃ魔術の話をしても家柄の話なんかしない。魔法は使えても魔術はすべての人が使えるわけじゃない。高度なものになればなるほど世俗から離れていく。どんなに有名人であったとしても、身近に感じられなきゃ一般人なんか見向きもしないんだ。こうやって掲載されてる雑誌だって魔術師関連の雑誌だ。

「く、その斎名家が朝の喧嘩と何が関係あるんだよ。」

「あれは佐倉と朝倉の従者たちよ。」

「じゅ、従者だぁ！？」

「当たり前でしょ。名家ってことは金持ちってことなんだから。」

（分かる、分かるけど、理解したくない！！）

「その従者たちが価値観の相違か何かで小競り合いしていたんでしょう。考え方が行き違ってるから何かとぶつかるのよ。まあ実際、上の方は仲いいっていう噂だけど。」

もういいでしょ、とでも言うように私に背を向け、先ほどの雑誌をまた読み始めてしまった。

私は、雑誌を読む絢子の背を眺め、斎名家は魔術を習うものであれば誰もが知っているものであると同時に、魔術に無関係なものには規制が敷かれているものなのかと思った。

＊＊＊＊＊

部屋の時計が７つの音を響かせる。
午後７時は夕食の時間だ。食堂の準備もあるため食事の時間は大体決められている。朝は６時から８時まで、昼は学校のため行っていない。休日は１日閉まっている。そして１９時から２４時までが夕食の時間だ。夕食の時間が夜中まで行っているのは野外活動時に時間が延長してしまったときを考えてだ。それでも間に合わない人も結構いるらしいが。

「絢子、夕食の時間だけどどうする？」

絢子は眉を寄せて私の顔を見つめた。

（う、またおかしなことでも言ったか？）

さっきも同じようなやり取りをしていたこともあり、生傷に塩を刷り込まれそうな気がして顔をひきつらせた。

「裕也、今朝の説明、聞いてなかったの？」

「今朝？」

今日の朝といえば思いだされるのが、もう二度とあってほしくない痴漢不法侵入事件（別名：性別勘違い事件）だろうか。あの時最後の寮長の笑顔が怖すぎてあの後の記憶が曖昧だな。

「覚えてないのね。」

「・・・はい、すみません。」

そんなほんとうに馬鹿な子を見たみたいに大きな溜息つかないで下さい。

「今日は歓迎会でしょ。」

「歓迎会？」

「そう。新入生の歓迎会。」

「新入生の。」

「ええ。期待していいと思うわ。毎年すごいから。身内で騒ぐものだから怪我人も出るけどね。」

最後の言葉は余計だったような気がするが、でも新入生歓迎会！入学式にはガッカリさせられたけど、確かにあんなに見張られてる所でそんなにはっちゃけられないよな。だからその代わりに、学園のほとんどの生徒が寮に入っているからこちらでほんとの歓迎式をするってことか！

「あれ、そう言えば帰ってきたとき寮長とすれ違ったんだけど、その時機嫌よかったのって・・」

「おそらくそのせいね。料理も豪華なのいっぱい出るし。」

あ、色気より食い気なんですね。

「で、夕食とそれが何の関係が？」

「談話室で行うんだけど、準備に時間かかるから１９時３０分に集合って言われたのよ。」

確かに朝寮から出る直前にそんなことを説明されたような気がする。ダメージを受けすぎて覚えてないが、おそらく言われた。

＊＊＊＊＊

天井は現在美しい橙色の空が存在している。さっきまでは赤色に染まっていた。誰かの魔術によって七色の空を演出しているらしい。上手くもなく、しかし下手でもない、まるで誰かの落書きみたいな月や太陽・星と対比して、透明感もある自然界ではありえない空をより美しく見せている。

入寮歓迎会は絢子が言っていた通り談話室が会場となっていた。ヴィッフェ形式で執り行われており、話の途中で先輩たちが魔法を使って新入生を楽しませてくれる。

他にも、見たこともない生物がそこら辺をうようよしている。

「なあ、絢子。あの生き物ってもしかして・・・」

「式または使い魔じゃない？あと実体をもってないのもいるみたいね。」

絢子が指差した先には人で混雑しているにもかかわらず、走回って遊ぶ体の透けた生物もいた。初めて見る光景に目を奪われながら用意された豪華料理へと手を伸ばす。

「それにしてもすごい人の数だな。全員居るのこれ。」
「当たり前じゃない。今日を何だと思ってるの。あと、これに出なかったら夕食も食べられないんだから。」
「そうなの？」
「当たり前じゃない。ヨーコさんがどれだけ下準備に時間かけて、これだけの量を作ってると思うのよ。」

それもそうだと思いつつ周りをもう一度見渡す。
見事な魔術も圧巻だが、使用されている机やテーブルクロス・壁の絵画などにも目を奪われる。こういったものには呪(まじな)いが施されている場合が多い。よく見ると柄だと思っていたものが実は小さな魔法円であったり、魔力を帯びていたり、飽きることがない。

「料理もすごいけど、こういったテーブルクロスとかあと皿とか、呪(まじな)いがかけられてるみたいだけど、やっぱ寮生の手作りかな。」
「当たり前だろう。」
「「！！」」

第3者から急に声を掛けられて、私たち二人は声のした方へ振り返った。

「寮長じゃないですか。」
「寮長機嫌いいですね。」

どっちがどっちか、皆さんにはすぐわかりますよね。
振り返ったその先には、両手に食べ物をいっぱい載せた皿を持った

寮長がいた。

「楽しんでるかお前ら。」

「はい。」

「杉沢も大変だな、こんなののお守りを任されて。」

（え、それ私のことですか。）

「ええ、ですが学園では手綱を握れないんですよ、クラスが違うので。ルームメイトとして何事も起きないことを願うばかりですね。」

「その時は私が何とかしてやるから、頑張れよ。」

「心強いお言葉ありがとうございます。」

私のことを放置して2人で私のことを乏しめながら話していく。

（というか、手綱って・・え、人とすら感知されてないんですか？）

置いてけぼりをくらいながら、とりあえず料理を食べることにする。メインと思われる料理の内の一つ牛の赤ワイン蒸しと思われるものを口へ運ぶ。

（さすがはヨーコちゃん、うまい。）

うんうと頷きながら、料理のうまさに感心する。寮長と絢子も料理を食べながら話している。寮長の手元には先ほどまで山ほどあった食べ物が既に完食されていた。

「そう言えば、今回の天井の魔術って寮長が企画されてるんですよね。」

「それがどうかしたか？」

途中から話を聞いていなかったから話の流れが分からないが、今回の歓迎会は寮長が企画しているらしい。よく考えれば当たり前のことだ。この寮の長であるんだから、何をするのも寮長の許可が必要になる。いわゆる学園で言う生徒会長みたいなものだろう。

「どうやって時間によって色を変えているんだろうと思いまして。」
「この虹色の空のことか？」
「ハイ。」
「簡単なことだよ。談話室の四隅に魔力をこめた装置が置いてあるんだ。それにはこうなるようにって書き込んでおく。後はスイッチ入れればいいだけだ。」

簡単そうに聞こえるが実は全く簡単じゃない。
私は魔術についてほとんど知らないけど、魔法文字に魔力を乗せて、魔力の供給元が離れてもなお装置が動いているというのはすごいことだ。

「簡単じゃないですよそれ。」
「急に話しに入ってきたな。まあ、私だけじゃ難しくとも何人かの力を合わせれば何とかな。」
「そうなんですか。」
「ああ。ただこの談話室から離れられないけどな。そのうちお前らも出来るようになるって。」

絢子と顔を合わせて信じられない、といった顔をする。

「ぶっ・・・そんな顔するなよ。」
「「だって寮長はＡクラスじゃないですか。」」

私と絢子はそろって寮長を批判する。そう、目の前の人はAクラスだ。私たちEクラスやGクラスとは格が違う。

「そんなこと関係ないだろう。特に持ち上がり組はよくわかってんじゃないのか？」

「だから言ってるんです。」

（何のこと？）

「藤城は分からないって顔だな。クラスなんてすぐ変わるって意味だよ。才能さえあればAクラスに入るなんて簡単だ。」

「嫌みですか？」

「事実よ。適性って言うのかしら、魔術には努力以外に生まれ持った才能がないとうまく扱えないのよ。」

絢子が憎々しげに答えた。その様子を見れば誰にだってわかるだろう。部屋にいた時の絢子の悔しそうに憤慨して雑誌を投げかけてきたときを思い出す。

（適性がないからGクラスなのか・・？）

どう対応していいか分からず、寮長に目で訴えると、意外にもフォローをしてくれた。

「そんな落ち込むな。魔術が使えても魔法にかなわないことだってあるだろう？魔法使いだって強いんだからな。」

「・・・そうですね。」

少しだけ機嫌が回復したみたいだ。

「仕方ない。そんな君たちにいいことを教えてやろう。」

（いいこと？）

二人揃って怪訝そうに顔をしかめる。

「この学園の秘密は知ってるかな？」

「っ！！」

「知ってますよ。五不思議ですよね。」

「そうだ。その内容は知ってるか？」

「っ知ってるんですか？」

「ああ、知ってるよ。」

なんてことだ。こんな初日にこの学園へ来た目的に近づけるなんて、思ってもみなかった。

「裕也、うるさいわよ。そんなのこの学園にいる生徒なら誰だって知ってるわ。」

（・・・へ？）

「いやいや、まさか藤城がこんなに反応するとは思わなかったからな。」

私よりこの学園生活の長い二人は逆にこっちの反応に驚いたみたいだった。

（いや、確かに。外部生の、しかも幼稚園児の私が存在は知っていたんだから、当たり前なのか。）

ちょっとどころかかなり恥ずかしい。

「まあいいさ、そんな興味津津な藤城に優しい私は教えてやろうじゃないか。」

優しいという言葉に一瞬疑問を感じたが、寮長の眼力が強くなったように感じたので素直に応じることとする。

「いいか？一度しか言わないからな。１つ目は実習棟の悪魔。２つ目は黄泉への調。３つ目は迫りくる水音。４つ目は見えない壁。最後が散らない桜、だ。」

なんだかとても叙情的な五不思議だ。

「散らないというよりいつでも満開なだけだと思いますが。」

「花見し放題だな。」

“キィィィ～～～～～ン”

談話室にマイクの不況音が響き渡る。音源を捜すと窓側の方に数人集まっている。おそらく今回の開会式を行うのだろう。始まって何時間経つんだ、と突っ込みたくなったが、黙っておくこととする。だって企画者寮長だろう？

「ちっ。誰だあいつらに任せたやつ。」

舌打ちして急に機嫌が悪くなったと思ったら、なんと、現在マイクを持っているのはトラブルメーカーの二人、紅葉と胡桃だった。

“えー、寮生のみんさん、楽しんでいらっしゃいますでしょうか？

ここで一度区切りを入れたいと思います。寮長、こちらまでお越しくださいませ。”

「すまんな、呼ばれたこともあるが、あいつらだけじゃ任せきれないから、行ってくる。」
「ええ、ご武運をお祈りしてます。」
「頑張ってください。」

寮長は少し疲れをにじませつつ、司会の方へと歩いて行った。これから何もないといい、と思う反面、そんなことありえないのだろうと思った。
寮長の新入生歓迎の言葉を聞きつつ、胡桃と紅葉がしたり顔で何か企んでいる顔をぼんやりと眺めていた。

第三話　斎名家（後書き）

大変遅くなりました・・・・
ここで語るには多すぎる・・・
遅くなった理由が知りたい方は活動報告まで。
（作者のヘタレ具合が垣間見れます。）

第四話　3馬鹿トリオ

学園に入学して数日が過ぎた。
なんつぅか・・・広すぎだから！！覚えらんないよ！！新入生はどこにどの教室があるのか覚えるのに必死だ。まだ、授業では座学しかないため、移動教室はないがそれも最初のうちだけだ。実際にやってみなくては何事も身につかない。そのためこれからは毎時間が移動教室になる。
まだ入学したばかりだからか緊張も重なってそわそわと落ち着きがない。ん？私？教室を覚えるのに必死だと言っておきながら落ち着いてるって？・・・ふふふ・・・もう私のキャパシティーはいっぱいですよ。もう入りません。移動教室は流れで何とかします。
そんなことよりもっと気にすべきことが残っている！！それは学校生活の中で一番大事なことだ。それは・・・友人を作ること！実は未だに絢子以外同学年の友人ができていなかったりする。寮での事件が関係しているのか、入学式の事件が関係しているのか、誰も話しかけて来ようとしない。また話しかけようとすると目をそらされたり、走って逃げられたり・・・散々だ。
そんなこともあったため、クラスの人と名前も全くわからない。というより、担任が自己紹介を後回しにしたことが第一要因としてあがると思う。なんで一日目に行わなかった、教師よ。なんで週終わりのまとめの時間で執り行おうなんてバカなことを言い出したんだ、あのアホ教師。しかも、今その時間なんですがなんで遅刻するんですかね！？
窓際の席だったこともあり、今週あった出来事を思い出し、突っ込みを入れつつ現実逃避に走ろうとしていた。なぜならクラスのリーダーである学級委員が決まっていないこともあり、教室内は無法地帯と化しているからだ。お互いに顔も知らない、名前もわからない、でもテンションだけは高い人々が集まるとどうなるでしょう。はい、

その通り。ムードメーカー的な人を筆頭に男子は野球的な何かを始めてしまいました。

「よおし！！行くよ！！予告ホームランだぁ！！」

放棄をバットに見立てて高らかに振りあげ宣言するバカ1。
なかなか女の子たちとの距離が縮まらない私とは正反対でなんだか悲しくなってくる。あ、これは目から汗が出てきただけです、けして涙なんてものじゃないんです。

「ふふふ、俺の魔球が打てるかな。」

そしてどこから持ってきたのか、硬球の野球ボールを何故か構えるバカ2。あ、後ろの方で山田君（仮名）が友達に慰められながら泣いている。

「来い、陽介！しっかりと受け止めて見せるぜ！！」

こいつもどこから持ってきたのか謎なキャッチャー専用ミットを持っているバカ3。・・山田君（仮名）の鳴き声がさらに増したような気がし・・なんでもない。

「行けぇ！！消える魔球！！」
「来おぉい！！」

何故か技名を言いながら投げる。それを打つ。

キーーーン

箒のくせに意外といい音をさせて硬球の野球ボールが飛ぶ。

「い”！！」

ガン・・・

予告ホームランといった割にファールとなったボールは真直ぐに私の頭へとクリーンヒットした。見事に星が目の前を飛び、平衡感覚がおかしくなり、ふらふらと机に体を預けた。

「だ、大丈夫ですか！？」

幸か不幸か、一部始終を見ていた女子生徒たちがわらわらと私の周りへと集まってきた。というか、同じ学年でクラスメイトなのに敬語なんですね・・

「ちょっと、そこの男子！！やるにもちゃんと考えてよ！！」

「そうよ、特にそこの３バカ！！」

まだ頭がふらふらしているので誰が言っているのか分からないが、声を張り上げて野球を始めた男子たちを非難し始めた。特に中心で暴れていた目立つ３人組へと視線が集中する。

「悪かったよ。まさか蛍太がそんなに打てるとは思わなかったから・・」

「ええ！！ちょっと！全部僕の責任だって言うの！？押し付ける気！？」

中心で暴れていたのだから押し付けられるわけではないと思うが。

「でも、俺もお前があそこまで力強く打てるとは思わなかった。去

年から成長してるぞ、蛍太。」
「ほ本当!?陽介!」
「それは俺も思ったぜ!特訓の成果だな!!」
「た、匠・・・!」

勝手に盛り上がりはじめた。
周りのみんなも反省の色が全く見えないためか呆れた顔をしてるよ。
まあ、そんなこと今の私には関係ない。やることは1つだ。

ガタッ

「え、あ・・ちょっと!」

近くに子が急に立ち上がった私に驚き、制止しようとしたがそれを無視して教室の前へと進む。途中、私にぶつかっただろう硬球の野球ボールを拾い上げ前へと進む。

「む、なんだ、お前。」

バカ2が近くに寄ってきた私に気がついたらしく、不愉快そうに話しかけてきた。そこで歩みを止めた。距離はおよそ3m。私は無言で振りかぶる。

「「「え」」」

ひゅっ・・ゴスン!・・ぱら、ぱら。

私が放ったボールは、3人の目の前を通り後ろの黒板へとめり込んだ。

「「「「・・・」」」

呆然と黒板にめり込んだボールをみている3人にゆっくりと近づき、

ガン！ゴン！ゲイン！

「「「「・・いってぇ！！」」」

グーで頭を殴った。3人は殴られた頭を抱え込みしゃがみこんだ。

「痛いのは当たり前だろう。思いっきり殴ったからな。」

「なんで！」

バカ1が涙目で反論する。

「反省の色が見えない。」

「それだけか！」

バカ3がこちらも涙目で顔を上げる。

「いや。」

「それは何だ！？」

バカ2が顔を上げる。一番情けない顔をしている・・

「やられたらやり返す。常識だろう。」

「「「常識じゃねぇーーー！」」」

胸を張って言い切りましたよ？もちろん。

「それは冗談にしても、言うことがあるだろう、言うことが。」
「悪かったよ！悪かったと思ってるけど、思うけど・・ホントに痛てぇ！！」
3人はずっと頭を押さえている。反省はしているらしいが、異常に痛かったらしく、頭を押さえて悶え始めた。
「・・そんな強く殴ったかな・・？」
「「「殴った！（から！）（よ！）」」」
さっきからそんなにハモらなくても。これに懲りて教室でもう暴れださないといいなあ。

＊＊＊＊＊

「すいません。ちょっと資料作成に手間取って遅刻してしまいました。」
やっと担任がやってきて教室にも秩序が戻った。
「みなさん静かに待っていましたね、と言いたかったのですが、この惨状ではそうも言えそうにないですね。」

まあ、確かに担任が来たときは静かだったが、黒板に開いた穴はそのままだ。山田君（仮名）机にうずくまらず顔を上げてくれ。

「でも、すごかったですね。」

ん？

「初めてにしてあの3人を押さえつけられるなんて。ねぇ、藤城さん」

和やかな声音で私に話しかけて来やがった。もちろんクラスの目は私に集まる。

「・・いつから見てたんですか？」

「え？初めから？」

「止めに入ってくださいよ！！」

「え～～、だってなんか・・・おもしろそうだったから？」

（なんだこのダメ教師。語尾にハートとか今時はやんねえよ！その前に、男なんだからマジヤメレ。）

体をくねらせ“きゃは”という効果音までが聞こえてきそうだ。いや、初め見た時からおかしな人だとは思っていたが、ここまでとは思わなかった。

「そういうわけで、クラス委員長は藤城さんにしたいと思いまぁす。」

（どうしてそこに話が飛躍した！）

そしてクラスメイト達、流で拍手とかし出さないで！みんな賛成なんですか？反対なのは私１人だけ？

ガタガタガタッ

「「「異議あり！」」」

「きゃっっっかあぁぁ！！！」

当たり前だと思うが、３人のバカが立ち上がって否定した。しかし、どこからそんな男気出したと思わせる勢いと声音で、担任が３人に反論を引き下げさせた。

「何でですかぁ。」

「君たちに発言権はありません。」

「「「そ、そんなぁ～。」」」

がっくりと椅子に座り込む。教師がそんなこと言っていいんですか？てかお前らそこで引き下がるのか。

「他に反対の人もいないみたいだし、これからよろしくね、藤城さん。」

「う」

ポンと肩に置かれた手に力が微妙に加わっているのは気のせいか？まるで逃がさないとでも言うかのようにギリギリといった音が聞こえてくるのだが・・・

「ね」

「はい・・。」

クラスから何故か巻き起こる歓声が、遥か遠くに聞こえたような気がした。

「ふふ。助かるわぁ。僕のクラスにあの3人が来ちゃうなんて、思ってもみなかったから。君みたいな子がいてくれて本当に助かるよ。」

現実逃避しようとした、が、担任のその言葉で現世に戻ってきた。背中を思いっきり叩きながら嬉しそうに話すその顔を仰ぎみる。

「・・・どういう意味ですか？」

「ん？ああ、藤城さんはもしかして今年からこの学園に入ったのかな？」

「そんなに分かりやすいですか？」

なんだか前も似たようなことがあった気がする。ここは内外かまわずふるいに掛けられるはずじゃないのか？

「違う違う。あの3人は名物の一つだから。接していくうちに分かるわよ。」

「はあ。」

“名物”ってどういう意味だ？なんだか嫌な予感しかしない。

パンパンパンッ

クラスのみんなの集中が切れたのが分かったのか、隣にいた担任は手を叩いて注目させる。

「それでは、後回しにしてた自己紹介の時間よ。見本として、藤城裕也さん。前へ出て頂戴。」

クラス委員ってそんなことのために使うのか？いきなり前に立たされるとは思わなかった。目立ちたくないのに、目立つ方に順調に進んで言っているような気がするのは気のせいか？

＊＊＊＊＊

私のあいさつを基本として、出席番号順に自己紹介が始まった。大体は普通に挨拶していったが、最後の3人だけはおかしかった。

「はいは～い！次は俺ね！！『鈴木匠（すずきたくみ）』。匠ってフレンドリーに呼んでくれ！よろしくな！！」

無駄に高いテンションと声音でハキハキと言い切る。性格が表れているかのような髪色をしている。というより目がチカチカする。

「幼等部からいるから顔見知りも多いみたいだけど、今日から高校生になったということで、心機一転！また仲好くしてくれ！！」

（よくこんなバカが心機一転なんて言葉知ってたなぁ。）

「ちなみに、仲好くしてくれる人は殴っても優しくしくれる人がいいです。」
「お前の言いたいことはよくわかった。よし、とりあえず歯ぁくいしばれぇ・・・！」
席は離れているのに、視線で喧嘩を売ってきたと捉えることができたので、その喧嘩を買ってやろうと一歩踏み出す。
「はいはい、あともう少しだから授業終わってからにしてね。」
委員長だからという理由と、前に出たまま戻るタイミングを逸してしまったということのため、担任の隣に立たされたままだった私を、担任は引き留める。
思わず売ってしまった喧嘩を買われそうになったバカ3改め匠は顔を青くして“助かった”と小さく呟き椅子に座り込んでいた。
「次の人ぉ～、止まらないで続けてねぇ～。」
「あ！はいはい！！次僕ね！！」
わざわざ手をピンとあげて、ぴょこぴょこジャンプしながら自己主張する。高校生になってまでなんてあざとい行為を・・・てかあいつは本当に高校生か？どう見ても見た目は中学・・・・・
「朝倉蛍太です！さっき場外ホームラン打ってたよ！！明るく元気に、クラス一丸となってがんばって行こう！！」
「「おぉ～！」」
前後2名のみバカ1改め蛍太とともに拳をあげる。てか、どこの小学校だ！！どんな自己紹介の仕方なんだよ！声に出してツッコミを

入れたい、入れたいが、隣で呑気にしているこの担任に諭されるなんて周りが許しても私のプライドが許せん。つーか場外ホームランじゃなく“場外ファーボール”だろうが。

「最後は俺だな。俺は『武藤陽介』だ。まあ、言わずと知れたマッドサイエンティストだ。なぜ人々が俺をその名で呼び始めたのか・・それは思い起こせば5年前にさか・・」

「それぐらいでいいからねぇ。自己紹介だけに1時間も掛けてられないんだから。」

興味が惹かれなさそうな昔話が展開されるところだったが、担任によってその陰謀は阻止された。悔しそうに椅子に腰を下ろすのが目の端にちらっと映ったが、気にしないこととする。

「はい。それでは以上で自己紹介全員終了ね。みなさん仲好くしてくださいね。さあ、では続いて委員会を決めてもらいたいと思います。藤城さん後よろしくね。」

え、と思っている間に委員会表を手渡され、担任は自分の仕事は終わったとでも言うかのように、教室から出て行こうとする。

「え、な、先生！どこに行くんですか！」

「え？教員室に戻るわよ。さっきも言ったじゃない。資料作成、まだ終わってないから続きを行いにね。じゃね。」

ひらりと去って行ってしまった。

いや、よろしくって本当の意味でよろしくだったんですか！？まだ、私の委員長しか決まってないっていうのに、一人で何とかしろと！？しかも全員の名前、今日初めて聞いたのに、私にどうしろというの？

そんなことをグルグル思いながら、とりあえず手渡された委員会表を眺める。なんだか見ただけでは意味のわからない（分かりたくない）ものがぽろぽろ見受けられるみたいだが、とりあえず無視だ。一人でクラスを仕切るのは無理がある。だったら・・・

「先生が教員室にお戻りになってしまったので、まず、副委員長と書記を決めたいと思います。」

現在仕切るにしても私一人しかいないので、司会進行しつつ黒板にも文字を書き始める。

カツカツカツ・・・

「「「ちょ、ちょっと待ったあぁぁぁぁ〜〜！！」」」

「黙れ」

「さすがに聞いてあげようよ。」

急に聞こえてきた担任の声に、教室の扉の方へと顔を向ける。

「どうしたんですか？」

「ちょっと忘れ物をね？問題起こさずにちゃんと決めてね。」

それだけ言うと忘れものと思われる黒い革の鞄を持って出て行った。

「はぁ、仕方がないので君たちに発言権をくれてやろう。」

「何その言いぐさ・・・」

三人は脱力しつつ立ち上がる。

「どうして俺たちが書記とかにもう既に決定してるんだよ！」

「「そうだそうだ！」」
「それに役職は“副委員長と書記”なのにどうして連名で三人の名前があるのさ！！」
腕やら足やらを振り回しながら、強制的に進めようとしたことに異議を申し立てているらしい。

「そんなの、お前らを目の届かないところにやるなんて末恐ろしいから。クラスの評判を下げないためにも、お前らの面倒を直接見てやろうと思っただけ。連名なのは、お前らで誰がどれをやるか決めてもらおうと思ったから。委員会なんて全員分あるわけじゃないんだから、クラス委員として一人くらい多くても構わないだろうし。」
「そ、そんな横暴な。」
「許可します。」
「「「せ、先生！！」」」
「通りすがっただけだから、じゃ今度こそばぁい？」

私の横暴を許可してまた去って行った。意外と何度も戻ってくるところをみると心配してたりする？でも、やっぱりハートは気持ち悪い。
でも、今はそんなことはどうでもいいので、進行させることに集中する。

「さて、では許可も下りたので、とりあえず3人とも前へ来て、手伝ってください。」

3人は落ち込みながら前へと出てくる。クラスのみんなは、なんだか同情のこもった様子で拍手をする。同情するけど、代わりにやるって人は出ないんですね。

第四話　3馬鹿トリオ（後書き）

いつになったら再会するん・・・

第五話　武術の授業（1）（前書き）

教育上よろしくない言葉がいくつか出てきます。

第五話　武術の授業（1）

「今日はいつもより早いのね。」
「どちらかといえば、絢子が一人で起きていたことに私はびっくりしたよ。」

朝7時。
いつもより早く起き、朝食を済ませて戻ると既に絢子が起きていた。

「・・うるさいわね。まだほんの数週間しか一緒に過ごしてないのに。」

機嫌を損ねてしまったらしい。でも、私より朝に弱い絢子が、起こすより早くに目を覚ましたことが今までなかったため、どうしても驚かざるをえなかった。

「だって、あんだけ寝起きが悪いと・・・ねぇ？」

さらに機嫌を損ねてしまったらしいが、いつも以上に朝からテンションの高い私を不思議に思ったのか、はたまた気色悪く思ったのか、眉をしかめて何か言いたげな目をして眺めてきた。その目を満面の笑みで見つめ返すと、さらに顔をしかめられた。

「今日は何の日でしょう？」
「・・・ああ。」

それを言っただけで気がついたらしい。
昨日の夜からはしゃいでいれば誰だって記憶に残る。そう、今日は初武術の授業の日だ。おつむの方は全く自信がないが、体力にだけ

は自信がある。昨日まで授業ではアホなことばかりさらしてきたため、やっと汚名を返上できる機会がきたってことだ。

「そうよね。あなたの頭じゃ、どうしてEクラスにいるのか全く分からないものね。」

「ぐ・・・」

そう、クラスによって学ぶ内容がそれぞれ違ってくるのだが、授業を受けているうちについていけないことに気がついたのだ。専門用語もバリバリ使われ、魔力の構成の仕方とかなんやら・・・全くできなかった。まさか、あの三バカに馬鹿にされる日がこようとは、ついぞ思わなかった。あいつらのせいで近所のクラスまで、私の馬鹿さ加減が広がってしまった。

「で、でも！武術は本当に自信あるんだって！」

絢子の冷たい視線を浴びながら、必死に言い募る。初日に、非常識だ、と絢子から忠告を受けていたにもかかわらず、非常識っぷりを発揮してしまった。それに、勉強面で言えばおそらく絢子の方が上だ。それなのに私が絢子より上のクラスにいるっていうのは、所謂“才能”という奴のせいなのだろう。

そう考えると余計絢子の視線が冷たく感じる。

「そのお手前拝見させてもらうわ。」

「お、おおう。がんばります。」

どうしていっつも絢子にこんなおびえていなくちゃいけないんだろう・・・嫉妬というよりも私をいじるのを妙に楽しんでいるように感じるところ・・・サディストの才能がありますか・・・？

＊＊＊＊＊

うららかな春の陽気、さんさんと降り注ぐ太陽の光、澄み切った青い空の中、校庭の隅っこで我らが１－Ｅは集まっていた。

「せんせぇ～。なんでこんなバカ広い校庭なのに、こんな隅っこで集合なんですか～？」

クラスメイトが目の前の教師に向かって、誰もが思っていたであろう質問をする。そう、何故か広い校庭で何故か隅っこの、妙に土地の悪いところで授業が始まろうとしていた。

「いい質問ですね。では、よく聞いておいてくださいね。みなさんがこの学園で生活する上で心得の１つですから。」

目の前の武術の教師がにこやかに私たちに言い聞かせる。

「高等部は結構な縦社会です。至って普通に見えますが、水面下ではクラスごとの小競り合いが起こっています。中学まではとは全然違います。だから、皆さんも気を付けてくださいね。」

それとこれとが、どう関係あるんだ？と思わざるを得ない回答に、

私たちは困惑するばかりだ。

「そう、気を付けて・・気を、付けたはずなのに、あの女(あま)わざと俺の授業にぶつけて来やがってぇぇぇ！」

ここにいる全員びっくり。

物腰のいい先生とばかり認識していたものだから、急に言葉が荒くなった目の前の人を、驚いて眺めていることしかできない。

「あの女(あま)、マジふざけてやがる。犯すぞコラ。目にもの見せてやろうか・・・」

どう対処すればいいのか全く分からない。三バカ、お前ら男のくせに私に任せようとこずいて来るのやめなさい。え、何、委員長だからって私が何とかしなきゃなんないの！？

まだ見えない誰かに向かって怨念を呟いている教師に向かって恐る恐る話しかけた。

「あ、あの、先生？・・・そろそろ授業の方を・・・」

「あ、ああ。ごめんごめん。すっかり忘れてました。まあ、とりあえず、上クラスには気を付けてねってことです。今日こんな場所なのは、Aクラスも武術の授業を行っているので、いい場所取られちゃったんで、ここしか取れなかったんです。」

成績がいいとちょっといいことがあるって確かに知ってたけど、それってこんなところにも関係してくるのか、と内心呆れつつ、やっと始まった武術の授業に集中する。

「では、気を取り直しまして、授業を始めたいと思います。皆さん、武術について知っていることってありますか？」

生徒を見まわして、近場にいた生徒を当てる。

「では、君。武術は大きく分けていくつに分かれるかな。」

「はい。確か、大きく分けて、体術と武器術の２つに分かれたと思います。」

「はい、正解です。武術は体術と、武器術が存在します。今年１年は体術を君たちの体に叩き込みたいと思います。」

ん！なんか、先生の言い方がおかしくないか！？叩きこむとか普通言わないでしょう！私を含め生徒たちは皆引いている。そのことに気がつかないのか、はたまた気が付いていてあえて無視しているのか、そのまま話を続ける。

「魔術師は魔術があるから、武術とか必要ないって思う人が多いのですが、本当の戦闘に立った時、詠唱の間とか自分の身は自分で守らなければなりませんからね。体術の基本を今年で覚えてもらおうと思います。」

先生から黒いオーラを感じる。

話を聞いていた者は皆恐縮しきっている。

「では、２人１組で向かい合ってください。私が笛を鳴らしたら、組み手を開始してもらいます。相手を地面にひれ伏せることができたら終了です。怪我をしても大丈夫ですからね。私これでも癒術の資格持ってますので。」

なんとなくわかる気がする。痛めつけた相手を治してまた痛めつける・・ような構図がありありと浮かぶ。でも今はそんなことを考えている暇はなかった。誰と組めばいいのか、女の子とはやりずらい

ので、出来れば男子がいいが・・都合よくそんな女子と組んでくれる男子が居る訳・・・

「ユーヤ！俺と組んでくれ！」

いた。バカがいた。そこには無駄に明るい頭をした匠が手招きしながら立っていた。

「おう。でも、いいのか？」

「何が？」

「いや、私とだと、やりずらいだろう。」

「ん？どおしてぇ？」

舌ったらずな感じで蛍太が割り込んできた。隣では陽介も難しそうな顔をしている。

「だって、女相手に組み手とか・・・やりずらくないか？」

「「「・・・ああ！」」」

3人は今気づいたと言わんばかりに手を叩いて頷いた。

「「「忘れてた」」」

ガン！ガン！ガン！

「「「いってぇ！！」」」

同じネタを使いまわしはしたくないんだが、いかんせんこいつらアホだからそんなことにまで気を回せないんだろうな。でも、毎日のように殴っているので、私もこいつらも慣れてきたのか、初日ほど

の痛がり方はしなくなった。

「そこ！ふざけてないで、準備しなさい！！」

「「「「はい！」」」」

先生にどやされて、やっとクラス全員が位置に着く。私の相手は先ほど話しかけてきた匠だ。お互いに相手を見据えて身構え、笛が鳴らされるのを待つ。

「それでは・・・・」

ピィィィィィィィィィィィ・・・・

甲高い笛の音が響き渡る。それと同時に匠が突進してきた。

「でやぁ！」

（いきなりグーパンとか、えげつないことしてきやがる、な！）

左から流れてきた拳をバックステップで避け、次に来た下からのアッパーを後ろへバクテンすることで避ける。その時に顎に蹴りを入れておくことも忘れない。

「ぐはぁ・・・」

私の蹴りをくらい上を向いているうちに次の行動へと移す。匠が顔を戻した時にはもう前には誰もいない。

「な！どこいっ・・・！」

どしゃっ・・・・・

あたりを見回そうとした匠を地面へと叩きつけた。
勢いを付けすぎたせいで、倒れる音が派手だったこともあり、周りのクラスメイト達は唖然とこちらを見ていた。
倒れた本人は目を回して地面に伸びており、倒した私は呆気なさすぎたことで困って立ち尽くしていた。

（えっと・・・どうすればいい、この状況。）

「うわあぁぁぁ！匠ぃ～！！」
「生きてるか！？生きてたら返事をしろ！回復薬使うか！？」

少し離れたところにいた3バカの二人が倒れ伏し、目を回した仲間を心配して駆け寄ってきた。がくがく揺らしたりしながら、騒ぎ続けている。・・・陽介はその妙な色した薬は何に使うつもりだ？2人とも、そいつは一応けが人なんだからそっとしておいてあげて・・揺らしたりなんかしたら余計馬鹿に・・

「素晴らしかったです！きれいな上段回し蹴りでした！！久しぶりにいいものを見せていただきました！！ええっと名前は何と言いましたっけ？」

混乱して騒いでいる2人を無視して、生徒たち同様、匠を倒した後唖然としてこちらを見ていた先生が、テンション高めにほめながら近寄ってきた。何というか、正直目がマジでちょっと怖い。

「藤城裕也です。」
「そう！藤城さん！パワー、スピード、判断力、どれも完璧でした！もしかすると、このクラスではあなたの相手を出来る人は居ない

かもしれないですね。」

何を言い出すんだこの先生は。

「実力が伴われないところに居ると、せっかくの能力が養われませんからね。ちょっとだけ私についてきていただけますか？」

さっきから、テンションが高い先生は、私の返事も聞かず、勝手に肩を抱いて連れていく準備を進める。口をはさむにも、ずっとマシンガントークなせいで、なんて言っていいものか分からない。

「では少し席をはずしますので、皆さんは組み手の続きをお願いしますね。」

そう一言告げると私をずりずり引きずりながらどこかへと歩き始めた。

私も一言言っておく・・・誰もついてくなんて言ってないんですけどぉ！！！

＊＊＊＊＊

ずりずりずりずり

先生は私を引きずりながら、何事かをずっとしゃべり続けている。

「・・・だからね、藤城さん、頑張ってね。」

「へ？」

急に話しかけられるとは思ってもみなかった。何事かをベラベラ語っているとは思ったが、まさか私が聞いているだなんて相手が思っていたなんて。

「な、何を、」

「あ～ら、何だか耳障りな声が聞こえてくると思ったら、あなたでしたのね。」

甲高い女性の声が聞こえてきた。

「ああ、こんなところであうなんて奇遇ですね。」

その声に受け答えする武術の先生。どちらの声音も刺々しい。どう考えても嫌な予感しかしない。とりあえず現状を把握するため女性の声のする方へと顔を向ける。

「ほんと偶然って怖いものですわねぇ。」

そこにはジャージを着た女性が1人と、おそらく私の勘違いでなければ、あれはAクラスの生徒達だ。突然始まった大人たちの醜い言い争いを困惑した顔で眺めている。

（というより、いつまで私は拘束されてなきゃいけないんだろう。）

肩を組まされているため、斜め上で飛び交っている口汚いせりふを真直で聞かされる。

「今日という今日は目にもの見せてやるよ、このクソ女(あま)！！」

「やれるもんならやって見やがれこの負け犬が！！」

ドンッ

「うわっ」

背中を押され前に出される。ずっと存在を忘れられていたがここにきて、やっと認めてもらうこととなった。しかし、こんなに居たたまれなくなるくらいなら、あのままフェードアウトした方がましだ！

「えっと・・」

「こいつが今回の俺の手札だ。」

「そんな可愛らしい子なの？大丈夫かしら？こちらはもちろん佐倉さんよ。」

なんだか展開についていけないが、向こうも誰かがこちらへとやってくる。

「やはりな。藤城さん。気を付けてくださいね。骨の1本や2本だったら俺がいくらでも治してやるから絶対負けるな。」

「え、ちょっと、先生。話についていけないんですが。なんでそんな危険な話になっているんですか！」

「お前は話しを聞いていなかったのか？」

あんなマシンガントーク、聞き流さずに聞いていたら発狂します。聞いているわけがないだろう！！

第五話　武術の授業（1）（後書き）

なぜ終わらなかった・・・
次回は短いかもしれません。

第五話　武術の授業（2）

今現在、とある1人のAクラス生徒と対峙している。その相手の名前は佐倉葵。入学式に挨拶を読んだ代表生徒、所謂首席という奴だろう。周りはAクラスの生徒達に囲まれ、今から始まる戦いを観戦する気まんまんだ。
何故こんなことになっているかって？それはこの2人の教師のせいだ。

なんでも、幼いころから交流があるらしいが、初めて顔を合わせた時から“こいつとそりがあわねぇ”とお互いに思ったそうな。そこから始まるエンドレスバトル・・・
斎名家の分家であったため、子供のころから魔法を使えたこともあり、相当にえぐいことをやってきたらしい・・・それはもう死ぬような眼にもあったらしく・・・
もう、何というかただ単に個人的な恨みだよ。

（そんなことに生徒巻き込んでんじゃねぇよ！！）

そう思わざるを得ない、そんな内容の話だった。

（この年になってまでいがみ合ってるだなんて・・大人げない、大人げなさすぎる。）

「それではルールを決めます。」
「ルールはどちらか一方が倒れるまで」
「最後まで立っていた方の勝ち。」
「無制限の一本勝負。」

つらつらと紡がれる内容に、どんだけ言いなれてんだと思いつつ、容赦ないルールに気が重くなる。相手はどう考えたってスペックは上だ。いつまでこちらが持つか・・・ほんとは逃げたいところだが、取り囲まれてるし、その観戦者たちの視線がまた見下げられていること・・・どうにかして見返してやりたい。

「「それでは、開始！」」

ピィィィ！！

短めに笛が鳴らされ戦いの火蓋が切って落とされた。
相手を睨みつけ、もうどこからでも来てもいいように身構える。相手はこちらをうかがうようにこちらを見ている。相手もこちらの様子を見ているらしい。お互いに初対面だから力量がつかみきれない。

（あちらも様子を見ているというのなら、）

真直ぐ正面から突っ込んでいく。

（油断している今に賭ける！）

「はあぁ！！」

一瞬で目の前まで詰め寄り、みぞおちに向けて拳を入れる。
が、それは空ぶる。しとめたと思ったところその人影が消える。

「な！」

（上か！！）

上に飛んで私の攻撃を避け、体をひねって私の背後へ回る。
背後で空を切る音が聞こえる。下にしゃがみこみ相手の攻撃を避ける。

「い！」

（何今の突き技！！）

スピードがあって、切れが良すぎる突き技、あんなのくらったら骨何本か持っていかれてしまう。先生が言っていたことが本当になりそうだ。

ひゅ・・・

「い”」

どっ

後方へ飛び避けるつもりが、相手の蹴りの攻撃が先に来てしまった。
一応ガードが間に合ったものの、数m飛ばされる。
転がりながら、衝撃を逃がして体制を整え立ち上がる。

（これはまずいな。）

飛ばされたことにより相手との距離が一気に開いたことだけが救いだ。どう見ても本気を出しているように見えない。なのに初手に賭けた私の攻撃が見破られただけでなく、本気じゃない攻撃がもしかしたら避けきれないかもしれない。最悪の状況だ。

「来ないんですか？」

（え？）

ずっと黙っていた相手が、急に話しかけてきた。

「だったらこちらから行きます。」

そう言った瞬間、私の方へと突っ込んできた。
正面からこられたことに驚きつつ、相手から出される攻撃を避け、受け流しつつ、ちょいちょいこちらからも仕掛ける。がしかし、すぐ跳ねのけられてしまい全く効果がない。

（誰かたすけてぇ！）

あんな重そうな蹴りや突きを受けたくない私は必死でその攻撃の防衛を続けるのであった。

＊＊＊＊＊

一方その頃、私がそんな状況に陥ってしまった元凶である大人げない人達は、生徒達に交じりながらこちらを観戦していた。

仲が悪いからなのか人ひとり分のスペースを空け、並んで見ていた。

「チッ・・なんなのあの子。」

「ふん。だから言っただろう、今日負けを見るのは貴様だと。」

「あなたがそれを言っていいのかしら。あの子攻撃に転じようとして何度も失敗してるみたいだけど？」

「・・様子を見ているんだろう。それより佐倉だって、かなり焦っているように見えるが？最初ほど切れがなくなってきているな。」

「な・・あんな子の相手させられて苛立ってるんでしょう。」

「藤城はうちの優良物件だ。なかなか倒れないのは当たり前だ。」

「ちょっとは遊んであげようと思ってたのよ！それなのにしぶといから・・・ゴキ○リみたいなしぶとさね！」

「ふん！お前の負け惜しみの面拝ませてもらうぜ。」

「・・きいいいいいいいいいいいいいい！！」

なんて話をしていたりする。もちろん生徒はドン引きだ。半径２ｍには誰も近づいて行こうとしない。というよりもう視界にも耳にも入れないようにしている、いや、耳にも視界にも入る余地がないのだ。生徒達は目の間のハイレベルの戦いに魅了されていた。先程の教師たちの会話でＥクラスの教師が優勢だったが、それにはきちんとした理由があった。

葵はこの学年で飛びぬけて首席を納めている。そのため、相手をできる人間が限られており、武術の授業では相手をするのは専ら担当の先生たちであった。高校になり、もしかしたら生徒の中にいるかもしれないと思い試したところ、Ａクラスは全滅だった。誰も葵に指一本触れることができず倒されてしまった。

それなのに、今対戦している人間はほとんど対等に渡り合っている。観戦当初はそれを妬む人間もいたが、レベルの高い戦いは、傍から

見ればきれいなのだ。スピード感があって、リズムを取って、重さを感じられないその組み手は、一種の荒めのダンスを踊っているかのよう・・・

「にしても、佐倉の奴、苛立ってないか？」

「そう言えばそうね。体調が悪そうには見えなかったんだけど・・・」

腐っても教師。生徒の動きはきちんとよく見ている。どんなに仲が悪かろうとも、仕事に対しての姿勢は誰にも負けないのがこの２人のいいところだ。

例え、個人的恨みのために生徒を使っていようとも。

＊＊＊＊＊

ひゅっ

どっ

じゃりっ

汗が滴る中、まだまだ戦いは続く。
私はさっきから小さく声を上げたりして攻撃を避けて、避けて、避けて。避けることに必死になっていた。
相手も私と同じく息を上げていたが、声は出さず、私からの全く力の入ってない攻撃を受けても、何かを我慢するかのように口をぎゅっと結んだ。

（なんかもう、どうすればって感じだ。）

お互いに、相手に決めの一手を入れに行きたいと思っても、隙を見つけられないため、さっきからずっと同じの攻防が続いていた。こうなってくると持久戦に持ち込まれてしまう。そうなればここまで頑張ったって言うのに私が負けるのは確実だ。ほんの数年鍛えてきただけの私と、幼いころから英才教育を受けていた者との体力差なんて明らかだ。

（そんな情けない負け方嫌だ！）

何とかして隙を作れないか、そう焦ってきてしまったのがいけなかった。

ずる・・・

「へ？」

集中が一瞬途切れてしまった。そのせいで足元を疎かにしてしまい、自ら滑らせてしまったのだ。もちろんそんなラッキーな隙を相手が見逃すはずもなく、容赦なく胸倉を掴まれた。

ふに

「・・・え？」
「！」
相手は何に驚いたのか、私の胸倉を掴んだまま固まってしまった。
こんな大チャンスを私も見逃すはずもなく、ここから一気に攻めた。
滑った足を踏ん張らせ、上体を起こし、胸倉を掴んでいる右腕と相手の胸倉を掴み、自分の右足を相手の右足に掛けた。当然、相手の体は後方へと崩れ、掴んでいるところに体重を掛け地面へとその体を倒す。
ドスン・・・
辺り一帯が静けさに包まれた。
倒れた葵は、既に掴んでいた腕を放しており、私の目をジッと見つめていた。私は息を荒くしながら、葵を見返し、満面の笑みを返した。
「私の勝ちだな。」
「・・・君は」
“わあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！”
急に大きな歓声に包まれた。
途中から戦いに必死になりすぎて忘れていたが、周りにはギャラリーが居たのだ。そのギャラリーが何故かとても興奮している。びっくりして、決め技をかけた状態でいた体を起こし、思わず周囲を見回してしまった。よく見ると、組み手の授業をしているはずのクラスメイトまで何故かいる。

「藤城さんに佐倉さん。お疲れ様でした。最高の試合でしたよ。」
「先生・・・」
不気味なほどいい笑顔で近寄ってきた先生の後ろには、めちゃくちゃ沈んだ表情をしたAクラスの武術の先生がいる。
そう言えばこいつらの恨み辛みにつきあわされたんだよなぁと思い出しつつ立ち上がる。いまだ上向きで寝ころんだ状態でいる葵に手を差し出す。
「頭打たなかったか？大丈夫か？」
「・・・」
差し出した手を掴んだと思ったらぎゅっと強く握られ思わず前の目になる。
「君・・・女の子・・・？」
「え”」
何を言い出すと思ったらまたしても性別の話。・・いい加減飽きませんか？それよりも背後で上がった妙な声の方が私は気になります。
「ちょっと、あの子、女の子だったの！？」
「ええ、そうですよ？見れば分かるじゃないですか。」
「分からないわよ！じゃあ何！私は女の子に男の子と戦わせたタダの鬼畜じゃない！！」
なんだか背後で妙な戦いが始まった気がするがそこはあえて無視だ。うん、無視が一番いいだろう。

「ねえ、どうなの？」

ぎゅうっと握られた手が痛いです。まだそんな力残ってたんですね。私はもう疲れたよ。

「見て分からない？これでもれっきとした女だよ。」

「・・・・」

最初の科白に一瞬不服そうな顔をされたので、すぐに肯定の意を伝える。すると視線を落としてだんまりを決め込んでしまった。それもそうだ。もし私が男だったら勝っていたのは葵の方だ。予想外に私が女だったせいで、胸倉を掴んでしまい負けてしまったのだから。

どう声をかけても葵には嫌みにしか聞こえないのだろうと思い、こちらも黙っていると後ろから騒がしいのがやってきた。

「ゆうやぁ！」

がばあと私の背中に飛びついてきたのは身長が１４８ｃｍしかない蛍太だ。小柄ではあるが、全身脱力している私には鉛のごとく重い。何とか気力だけで潰れるのを踏みとどまり、顔だけ背後へと振り返った。

「すごかったぜ！」

「ああ！俺も久々に興奮させてもらった！！」

後ろにもまたうるさそうなのが２人。目をキラキラさせて私に詰め寄ってくる。なんだかめんどくさそうだ。

「おい、裕也！聞いてるのか！」

匠が私の反応を確かめに来たので、背中に張り付いている蛍太をひっぺがし、空に放り投げる。

「ぎゃ！」

「ええ！！」

匠がキャッチするだろうと蛍太を任せて、そちらに注意が行ったところで校舎の方へダッシュした。面倒なことは逃げるが勝ち。

「あ！裕也！！」

陽介が声を上げたが無視だ。引き留めようとした声の中に先生の声も聞こえたような気がしたが、この際それも無視だ。とりあえず少しでもゆっくりできるところに移動したい。ゆっくりするために、また突かれることをしなければいけないこの矛盾・・・どうにかして・・・あれだけ体を酷使したんだからちょっとでもいいからほっといてください・・・

第五話　武術の授業（2）（後書き）

大外刈りですね。なるほどわからん。

第六話　さいかい

「ねえねえねえねえ！！」
「だあーー！うるせぇ！！」

午前中の武術の授業からずっとうるさく付きまとってくるのは蛍太とその仲間たち。休み時間はもちろん、授業中でさえ話掛けてくる始末。ただでさえついていけない授業が、絶望的になってしまったかのよう・・・

「僕うるさくないよ！」
「そうだぞ。お前がだんまりを決め込んでいるから話しかけているだけじゃないか。」

当たり前だと言わんばかりに詰め寄る3人。

「授業中も人の集中邪魔しやがって・・・私がこれ以上バカになってもいいというのか！！」
「・・ああ。そう言えば、そうなんだよね。」
「ごめん。そう言えばすかっり忘れてた。」
「そう言えば、お前・・バカなんだよな・・・」

（ち、ちきしょう！！バカどもにバカ呼ばわりされた！！）

私の前で3人して頷く。その可哀そうな人を見るかのような目で私を見てくる視線を払いのけるかのように机を叩いた。

「いいから、マジでほっておいてくれ！飯ぐらいゆっくり食わせろ

！！」

ちなみに今いる場所は学園内の食堂だ。
寮暮らしなのでお昼は基本食堂か、購買で済ます。弁当を持参する人もいないわけではないが、私も絢子も朝はギリギリ（絢子はたまにアウト）なので弁当など作っている暇がない。
そんなこともあり、今日はクラスの視線が痛かったので、食堂に来たわけだが、いかんせんこの3人はしつこかった。ここに来る間もずっと騒いでいたので、周りの視線が痛いこと痛いこと・・・しかし、そのおかげで、他の人はなかなか話しかけてこれないみたいだった。

（普通にクラスメイトに話しかけられた方がかわしやすいってのに。）

もしかしたら、それがきっかけで仲好くなるかもしれない。
こんな騒がしい奴ら、監視すると入ったが、仲好くなりたいとは思ったことありませんよ？

「もー！黙ってご飯食べ始めないでよーー！！」

明らかにしつこいのが蛍太ではあるが、後ろの2人も頷いたり、相槌を入れたりしているので同罪である。

（放課後までしつこかったらまとめて沈める。）

横に移った蛍太が私の腕を掴んで“ねーねーねーねー”と左右に揺らすのを無視しながら昼食に集中することにする。
隣でずっと騒いでる人に気づかれないように、斜め前の食器からおかずを少しずつつまんでいると、食堂の雰囲気が変わった。

「ん？」
「誰か来たみたいだ。」

ずっと騒いでいた蛍太でさえ静かになった。
食堂は学園の者であれば誰だって利用できる。年功序列など関係なしに高等部以上の者がここを利用する。だが、ここは一般庶民のくる場所であって、有力者、所謂貴族の子女子息には専用の食堂があり、そちらを使用するか、弁当持参が常である。だが、好奇心旺盛な年頃のため、わざわざこちらに来て見学していく生徒も少なくない。
おそらくはその一派なのだろう。
ここまで雰囲気が変わるということは、よほど珍しい人物がここを訪れているということで・・・

「あ」
「・・・」

思わず目が合ってしまった。
そこにいたのは原因であろうと思われる人物、佐倉葵である。きょろきょろと周りを見回し、何かを探しているようであったが、私と目が合うと何故かこちらに歩みを進めてきた。

「ちょっと、Aクラスの佐倉、真直ぐこっちのくるんだけど。」
「え、な、なんで？何かしたっけ僕ら。」
「あれじゃないか。裕也があいつに勝ったからその腹いせで・・・」
「は、なんでだよ、私のせいか！」

こちらに近寄ってくる佐倉に対し、視線をそちらに向けたまま、顔を突き合わせてヒソヒソと語りだす。

「なるほど、その線はあるな。」
「あるな、じゃねーから。おい匠。どっち見てんだ。こっち見ろ。」
陽介の言い分に対し肯定しやがった匠は、一気に顔色の変った私の様子に気がついたのか、あさっての方向を見て口笛を吹いている。
（よい子のみんなは食事中に口笛なんかしちゃダメだよ？）
ふざけた態度を取る匠を頭から机に叩きつけるように擦りつけていると背後から声がかかった。

「藤城・・裕也さん？」
「・・・はあい？」

匠の頭を掴んだまま、顔をひきつらせて振り返ると、いつの間にか近くまで来ていた葵が少し首をかしげながらその場で立っていた。
私の名前を呼んだきり、ジッと私の目を覗き込むかのように顔をずっと見ている。

「ええっと・・何か御用でしたでしょうか・・？」

こちらも同じ方向に同じ角度だけ首を傾げ、ひきつった笑顔を浮かべる。こちらから話しかけてもジッと見てくるばかりで反応がなく、私と葵の間にいる蛍太もその異様な空気に2人の顔を行ったり来たりしている。

がしっ

「「「「え」」」」

ぽいっ

「ふえ？」

やっと反応があったと思ったら、目の前にいた蛍太を掴んで後方へと投げ捨てた。匠と陽介は“わあわあ”騒いで蛍太の様子を確認しに行った。

私も立ち上がろうとしたが、出来なかった。なぜならば、葵が私にがばあと抱きついてきたからだ。

（て、えええぇぇぇぇ～～！！）

ふわふわとした少し色素の薄い髪が私の頬をくすぐる。

「あ、あああああの！」

「・・ちゃん。あいたかった。」

（ん？）

葵は、私の肩に顔をうずめるようにして抱きついているため、なんて言っているのかよく聞き取れなかったが、最後に言っていた言葉だけ聞き取ることができた。“会いたかった”という言葉、確かに私も探し人が居るが、斎名家なんて貴族様・・・小さいころに出会う機会が一度でもあったら奇跡だ。

ぎゅうぎゅうと少し苦しいくらいに抱きしめてくる葵を、とりあえず引きはがそうと思い相手の両肩を押し返す。

「申し訳ないけどっ、何か勘違いしてませんかっ！？」

やはり押しても全くびくともしないことにプライドを傷つけながら、どうにか離してもらえないものかともがいてみる。

私がジタバタしつつ、否定の言葉を述べると、葵はがばっと勢いよく顔を上げた。

「間違うはずがない。ゆうちゃんでしょう？」

（て、近い近い近い近い！！！）

抱きつかれたままで急に顔を上げられれば顔が近くなるのは当たり前で、もちろん、こんな性格にこの容姿なのでこんなことに免疫があるはずもない。

「か・お・が・近い！！！」
「おぶっ」

相手も油断していたこともらったのか、テンパってしまった私は取りあえず手で相手の顔を掴んで自分から引き離した。その際葵の体も少しではあるが、引き離すことができた。

（ん？ゆうちゃん？）

掴んでいた顔から手をそっとどけると、噂とはかけ離れて、見捨てられた子犬のような顔をした葵がいる。

「ゆうちゃん・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・うさ・・・・？」

その瞬間、まるでご主人さまを見つけた犬のごとく、明らかに嬉しそうな表情をして、またしても勢いよく首に腕をまわして抱きついてきた。

「やっぱり！ゆうちゃんだ！ゆうちゃんだ！！本物だ！！」
「ぐぇ」
あまりに勢いが良すぎたせいで、首を絞められつつも、ぎゅうっと力強く抱きしめられ、プラス首筋に埋めた頭をすりすりとすりつけられる。
（こいつは本当に犬か何かなのか。）
話しかけようにも、既に自分の世界に入っているらしく、こちらの様子など気にも留めていない。
そろそろ、周りの視線の痛いことに気づいてもらいたいが、まだ気付きそうもない。
（それにしても、全く変わってないなぁ。）
噂では、孤高の存在、みたいに言われていたみただが、この様子を見る限りでは、幼いころと変わっているところを探す方が難しそうだ。
まさか、あの泣き虫で弱虫のうさが、やんごとなきお家柄だったとは驚きだ。名前も小さい頃の話なので、全く覚えておらず、お互いに呼び合っていた渾名しか分からなかった。
「ええ！！何何！？佐倉と仲いいの！？」
「まさか、そっちの趣味が・・・」
「裕也、まさかそんな・・」
三者三様の反応だ。とりあえず後半2名は死亡確定な。つうかそっちの趣味って何だ！！何度も言うが私は女だ！！

「ん？」

話しかけられたことによってやっと周りにも気がついた葵が、その声の方へと顔を上げた。すると一気に機嫌が悪くなり、顔をしかめた。

「朝倉の・・・」

「佐倉！久しぶり！！」

機嫌が悪くなった佐倉に反して、機嫌が好さそうな蛍太。

まるで知り合いのような対応を取っているが、この二人に接点なんて・・・

「あ！」

思わず声も出てしまうほど、ピンと来た。というより忘れていた。

「ゆうちゃん？どうしたの？」

（葵が一方的に）睨みあっていたが、私が大きな声を出したことで、こちらに皆の視線が集まった。

「いや、蛍太ってまさか、朝倉って・・・？」

「うん？僕がどうかした？」

「あれ？もしかして、気がついてなかった？あいつは斎名家の朝倉家の人間だよ。」

確かに前から少し引っかかってはいた、気にはしていたが、否定してほしかった。まさか、誰が思うだろうか、やんごとなき貴族様が、

まさかEクラスにご在席だとは。

（はっ！まさか担任が言っていた名物にもなれるほど昔からいられたのはそれが理由か！？）

「ちなみにあの2人も朝倉の分家の人間だね。」

もう何も言えない私は、口をパクパクとするしかなかった。

＊＊＊＊＊

周りの目が気になるところだが、落ち着いて話をするため、先ほどまで座っていた席へ座ることにした。何故か当たり前のように私の横には葵が着席していた。

「ゆうちゃん・・・」

「あの、恋する乙女のごとき目で見ないでください。そして恥ずかしいので普通に名前で呼んでください」

直視できない目を避けつつ、もう、本当に、切実な気持ちを込めてお願いすると、むっとした表情を返された。ほんと誰が始終無表情なんだよ。

「やだよ。それじゃあみんなと同じになるじゃない。」
「イミガワカリマセン。だったらせめてちゃん付はやめて・・・」
何にそんなこだわっているのか分からず、弱ってそう返すと、まるで仕方がないとでも言うかのような雰囲気を醸し出しつつ頷いた。
それをジッと見つめる目の前の６つの目。
「・・・何か言いたいなら言ったら。」
その視線に耐えきれず、話しかけると、“そんな奴らどうでもいいじゃない”みたいなことを葵が呟いたが、もちろんきれいに無視して陽介の話を聞く。
「これが、本当に佐倉かと・・・」
「え、偽物じゃないよね」
「本人だよ。何言ってんだお前ら。」
このぎすぎすな空気、誰かどうにかしてください。
忘れていたが、なんでも、佐倉家と朝倉家は仲が悪いんでしたっけ？なんかそんな話、ありましたよね。それで１度痛い目を見た気がする。
それをなしにしても、葵の態度は物凄く悪い。
私に対しては従順な子犬のようなのに、他の人に対してはこの暴言の数々・・・私の思いあがりでなければ、私と仲がいい（？）３バカが気に入らない、といった様子に見えるのだけれど・・・
「とりあえず、佐倉は黙って」
「ヤダ。」

（え？）

「うさ、それか葵って呼んで。」

私の言葉を遮って何を言うかと思えば、葵の呼び方だ。今遮って言うことでもないだろう！と思いつつも、私も呼び方もに文句を付けたのだから、とりあえず大人しく従っておくこととする。

「・・葵は黙っててくれ。」

身長があまり変わらないため、自分と同じ位置にある頭をなでて言うことをきかせる。いや、だって触りたかったんだ。すんごいふわふわする。

頭をなでられた葵は嬉しそうに頷いた。

「あの佐倉が裕也の思い通りに・・」

さっきから匠と陽介が、聞こえていないとでも思っているのか、小さめの声で、まるで信じられないものでも見た、とでも言うかのように話しあっている。どうしたものかと思っていると、真ん中にいて、ずっと黙っていた蛍太が急に机を叩いて立ちあがった。

「どうして裕也は佐倉と仲がいいの！？」

「は？」

「僕だって昔は一緒に遊んだりしてたのに・・・急に態度変わっちゃって、あんまり遊ばなくなっちゃうし。どうして！？」

物凄い剣幕で捲し立てられ、こちらはきょとんとするしかない。いや、そんな当事者でもないのに私に理由を聞かれても。

「約束したんだ。」
私がなかなか話しだせずにいたためか、黙っている約束をしたはずの葵が話し出した。
「約束？」
「そう。小さい頃、この場所で、また再会しようって。」
蛍太は、怪訝そうに、私に向けていた視線をついと葵へと移す。葵は、淡々と、しかしほんの少しの感情を乗せて返答する。
「それが何だって言うの。」
「この学園に絶対に居続けなきゃいけなくなったから、お前らと遊んでる暇なんかなかっただけ。」
目線も合わせず、淡々と話していく葵を見つつ、あれ？と思う。
「居続けなきゃって・・葵、あの時からここの生徒だったの？」
「うん。あれ、言ってなかったっけ？」
私の方へ顔を上げて、こてんと首をかしげる。様になっていて笑えないからやめて。
「すると・・・もしかして私のせいで・・？」
「ゆうのせいじゃないよ！それに、遊んでたっていっても、俺が一方的にいじられてただけだから、逆に離れることができてよかったって思ってるよ。」
満面の笑みでこちらを見上げてくるが、少しだけ黒いものが混じっているように見えるのは気のせいでしょうか。

まあ、昔の葵は、本当に弱虫だったので、確かに、こいつらみたいなアホには格好の餌だったのかもしれない。

「だからって、手のひら返したような対応ってどうなの。」

「絶対にここに居続ける最適な方法は、やっぱり首席になることだと思ったから、いじられてる暇なんかなかったんだよ。」

まだ納得していないようではあるが、どんだけ魔力が一流であっても頭が可哀そうなだけあって、反論できなくなってしまったらしい。

「でも、佐倉もひどいな。」

「何が。」

急に話に入ってきた匠と陽介が、葵に話しかけた。

もちろん葵は、機嫌悪くそれに返事をする。

「だって、ずっと探してた相手に対して、あんな本気で技決めるんだもん。」

おそらく言っていることは、午前中に行われた武術の授業の試合についてだろう。

それを聞いたとたん、葵はギクッと肩を揺らしてさっと下に視線を動かした。

「それは、すべての科目で首席じゃないと、ダメだって、思ってたから。なかなか倒せないから、焦ってきてイライラして・・・ゆう！怪我とかなかった！？痛いところない！？」

ボソボソと沈んだ声音で話していたかと思うと、急に顔を上げ、私に詰め寄り、怪我がなかったかどうか、確認しだした。

「て、やめい！」
「いたっ」
目の前にあった頭頂部を軽く叩き、人の体のきわどいところを触ろうとしたことをやめさせる。
「だって、触ってみなきゃ分からないじゃない。」
「私だって受け身くらいとれる。そんな痛めてるとこなんかないから。」
「でも」
まだ物足りなさそうに人のことを眺めてくるが、思いっきり無視して、蛍太に話しかける。
「だんまりしてないで、そんなに仲良くしたいなら言えばいいんじゃないか。」
「・・・・」
「トップ同士・・・今のご当主様ってやつ？が仲いいって噂は、お前らの話を聞くところ、本当なんだろう？だったら普通に仲良くすればいいんじゃないか？葵だってかまわないだろう？」
「まあ・・ゆうがそう言うなら。」
「ほんとうっ？」
私の言葉に少しも反応を示さなかったが、葵の肯定を聞くと、飛び上がるように顔を上げ、嬉しそうに葵に聞き返した。葵もまさかそこまで反応されるとは思っていなかったらしく、驚いて体を少し背後に引きつつ、頷いた。
啓太は、今にも飛び上がりそうな笑顔をして、左右の2人と手を叩いて喜びを分かち合い始めた。

そんな3人をしり目に、こちらの会話が聞こえないように、小さな声で葵に話しかけた。

「まあ、それなりに成長してるし、立場とかも昔と違うだろうから、大丈夫でしょう。」

「たぶん。それにどうせ、ゆうに会いに行けば必ず近くに居るんだろうし、仕方ないよ。」

仕方ない、で話しかけるのを許可するのもどうなんだ、と思いつつ、会いに来るという言葉に驚いた。

「会いに行けばって・・・まさかこれから休憩時間Eクラスに来るってこと!?」

「当たり前でしょ。やっと一緒にいることができるんだから。あ～あ。こんなことなら俺もそこそこにしとけばよかったな。・・・でも大丈夫!来年は一緒のクラスになれるようにするから!」

にっこりと笑って言われたが、今、物凄く大変なことを言われたような気がする。

まだまだ喧騒がやみそうにない食堂に、お昼の終了を知らせる鐘が鳴る。

目の前にはまだ、半分ぐらいしか手を付けていないご飯が４人分置かれていた。

第六話　さいかい（後書き）

書きなおす可能性ありますが、方向性は一緒です。

ちなみにこの後、全力で裕也が説得しました。これも入れたかったけど、眠くて思考能力が・・・・

６／６書きなおしました。

全く変わってないです。自分の馬鹿！！

第七話　切っ掛けの欠片（前書き）

遅くなって申し訳ないです。

第七話　切っ掛けの欠片

怒涛の一か月が過ぎた。
入学早々、いろんなことがありすぎて、飽和状態であったが、この一カ月で何とか慣れてきた気がする。

「ゆーーう！！会いに来たよ！！」
「佐倉ぁ～！会いたかったぁ！！」
「てめ、こっち来るんじゃねぇよ！！」
「佐倉！蛍太の思いをちょっとは分かってくれ！」
「そうだ、俺たちもまたお前とこうやって雑談まで出来るようになって嬉しいぞ。」

・・・そう、慣れてきた気が・・・

「つーか、放せ！ゆう以外の人間に触られたくない！」
「そんなつれないこと言わずに～。」
「来るな、触るな、抱きつくな！！」
「佐倉～！！」

・・うん、うん、慣れて・・・

「ちっ離れろ！“突風”および“爆破”ぁぁ！！」

ザザ・・キィ・・・・・ドオンンン・・・・

「・・・て、慣れるかあ！！」

いきなりの教室爆破。これが初めてなわけがない。私に会いに葵はEクラスに来るわけだが、何故か葵に執着している蛍太が居るせいで、必ず何かしらのアクションが起こる。

「なんで爆破？なんで爆破したの？今！」

「ん～・・そんなのどうでもいいじゃない。あ～ゆう、会いたかったよぉ。」

「いやいや、ついさっきも会いましたよね？昼なんて誘いもしないのに勝手についてきてましたよね？！」

目の前に焦げて倒れている3人組の屍を踏みつけて、私の方へやってきてぎゅ、と抱きつく。

「いやいやいやいや、抱きついてなごんでる場合じゃないから、あれどうすんの？てか、必要以上に知識が豊富だからって、むやみやたらとぶっ放さないでください！！心臓がいくつあっても足りません！！」

「え～・・・あいつらしつこいから、手加減とか出来ないんだよなぁ・・・。」

（え、なんか小声で怖いこと言ってる！）

すすけた教室に、目の前の焦げて目を回している3人組を見やり、これからどうすればいいのだろうかと、廊下から聞こえる、教師のものと思わしき足音を聞きつつ、ぼんやりとどう言い逃れようかと考えていた。

＊＊＊＊＊

入学して教室を破壊した回数計１５回。教師に呼び出された回数１２回。絶対に歴代最多の最大だと思ってしまうのは私だけだろうか。そんなことを手を動かしつつ考える。

「陽介、こっちにはホルマリン漬けがあるよ！！」
「ほんとうか！」
「こっちには作りかけのマジックアイテムがあるな。」
「そこ！！さっきから全く反省の色なし！！いいから手ぇ動かせ！！」
「「えぇ～」」

あんなことが毎回起こっているからには、もちろん罰則だってある。現在進行形で、実習棟の掃除を手作業で行っている。

「不満げな声を出すな！！陽介にいたっては返事もしない・・・誰のせいでこんなことになっていると思ってるんだか・・・」
「え、佐倉でしょ。」
「お前ら全員だ！！」

思わず手に力が入ってしまい、箒にひびが入ってしまったが、致し方ない。まあ、おそらくまだ使えるだろう。
元凶の３人組は掃除をせず、未開の地であった実習棟に入れたことで興奮し興味津々で見学している。また、葵にいたっては、優秀さ

からか、教師の贔屓が入り、罰則なしとなっていてこの場にはいない。

「・・・遅いから何してるのか様子を見に来たら、また掃除をしてるのね。」

「絢子！！どうしてここに？」

「あなたのクラスに行ったら、そう聞いたのよ。」

絢子が自分から動いて人に声をかけるのはとっても珍しい。何か用事などがない限りはいつも静かに本を読んでいたり、何かを描いていたりする。

「特別何か用事があったわけじゃないけど、実習棟の掃除をしてるって聞いたから寄ってみただけ。」

「絢子も見学ですか。どうぞどうぞ～、1人で掃除しますから。」

「いじけるのも分かるけど、私だったらそんな無意味なこと、適当に終わらせるわ。」

3バカが知っていて見学しているとは全く思えないが、確かにこの実習棟を掃除するのは無意味と表現するのが正しい。なぜなら、昼夜問わず生徒達が訪れ、ここで作業し、汚していくからだ。掃除するのは専ら魔法による“浄化”である。どんな薬品がこぼれているか分からないところに生身で向かうのはただのバカだ。

そんなわけで実際には掃き掃除しかしていない。教師もいろんな薬品があるこの場所に生徒だけで訪れれば少しは大人しくなるとでも思ったのか。

（逆効果でしかない。）

興味津々にあちこちの薬品を触って回るバカ3人組。もう何も言う

まい。

「無意味でも、とりあえずやっておかないと、また何言われるか分からないからな。」

「・・・あなたがそれでいいならいいけど。」

呆れたように視線を外される。

「それだけ言うために来たのか？」

「そんなわけないじゃない。」

きっぱりと言い切られた。私が本当に何も知らなくて、泣きながらあの3人をまとめ上げてたとしても気にしないんだろうなぁと、考えて、思わず苦笑してしまう。

「で、どうした？」

「・・・五不思議の一つがこの実習棟にあるって覚えてる？」

「ん～、そういやそう聞いたかもなぁ。それが？」

「・・・先に戻ってるわ。」

「え、絢子？」

スタスタスタと速足に帰って行ってしまった。

今のニュアンスからすると、もしかして、ちょっと心配してくれてたのかな？と思いつつ、帰って行く絢子の後姿を見送った。

・・・かしゃーーーん！！

「うわ！！」

「！」

何かが割れた音がして振り向くと、陽介の足もとから煙が上がっていた。

「何やってんだ！！」

「わ、悪い。手元を狂わせた。」

「そんなこと言ってる場合か！悪いと思ってるなら陽介を医務室に即刻連れて行け！」

「ああ！」

3人で何やら怪しい液体の入った小瓶を取り合っていたらしく、匠がそれを陽介の足もとに落としてしまったらしい。

何が起こるのか分からないので、バタバタと足音を立てて、匠と陽介は医務室へと向かった。

「お前は何放心してんだ。」

ぱこん、と放心状態の啓太の頭を叩く。

「うえ！！」

「いつもバカみたいに擦り傷とか作ってるくせに、こういうときは耐性ないのかよ。」

目いっぱい見開いて微動だにしない姿はさすがに怖い。

「そういうわけじゃないんだけど・・・」

なんだか言いずらそうに、自分自身何が起こったのか理解してないかのような返答に思わず眉をひそめた。

「どうでもいいけど、切り上げるぞ。」
「え？」
「これ以上やってもしょうがないからな。私たちも医務室行くぞ。」
得体のしれない薬品のにおいをかいでいるのだからとりあえず見てもらうのも悪くはないだろう。
「そうだよね！陽介も心配だし、急ごう！！」
「あ、待て！危ないから走るな！！」
パタパタパタと軽快な足音を立てて走って行く。
私もその後を追おうとしてふと眼の端に何か映った気がして立ち止まる。
振り返って目線だけで探すが、特にこれといったものは見当たらない。
（虫かほこりか・・・？）
さっきまで暴れまわっていたのだから、ほこりが舞っても不思議ではない。気にはなったが、前の方から聞こえてきた転ぶような音に溜息をついて、現場へと向かった。
＊＊＊＊＊

「あんな立派なこと言っといて、すぐに帰ってきたのね。」
疲れた体を引きずって寮に戻ると、開口一番にそんな嫌みが飛んできた。
「これには色々事情があったんです。」
「事情、ねぇ。」
淡々とした声音が、いつも通りのはずなのに、圧迫感を感じる。
「やっぱりあの後、３バカが余計なことを起こしまして・・・医務室に行ったら薬渡されてすぐ帰るように言われたんだ。」
そう。医務室に行った後、なんだかよくわからない解毒薬だかを渡されて、明日まで自宅待機を言い渡された。
しかも、医務室に行くと、陽介が（・）匠の付き添いをしていた。気がつかなかったが、小瓶を落とした時、腕に薬品が引っかかっていたらしい。匠は医務室のベットに寝かされ、気を失っていた。陽介は特に異常はなかったらしいが、私たちと同じく薬を渡され、自宅で安静にするよう通達されたらしい。
「全く・・・裕也の周りはいつも騒がしいのね。」
「面目ない。」
私が何かしているわけではないのだが、周りにいる人間が濃すぎた。そのせいで、何か起こると、私が中心になっているように見えるらしい。おかげで毎日飽きずに過ごしている。

「そんなので、文武合同茜祭をこなせるのかしらね。」
「・・・？」
「まさか知らないって言わないわよね。」
「さすがに知ってるから！」

文武合同茜祭とは、所謂学校公開だ。
一年に一回だけ、学校の敷居を外部の人間もまたぐことができる、学園唯一のイベントだ。
武術や魔法の競技大会、出店や研究発表など様々なことが３日間行われる。それらすべてを生徒ののみで実施しなければならない。そう、クラス委員が中心となって。

「はあ、本当に、どうしようもないわね。」

呆れかえってまた本へと目を落としてしまった。

「・・でも、ありがとう絢子、心配してくれて。」
「・・・心配なんかしてない。」

この意地っ張りな友人は、さらに素直じゃない。けれど、ここから見える絢子の耳が赤いのは私の気のせいではないのでしょう。

第七話　切っ掛けの欠片（後書き）

文化祭&体育祭ですね。
ファンタジーの学校にそういうのを見たことがなかったので受け入れてもらえるのか・・・そして書くことができるのか・・・

第八話　呪術

「ここは、君たちも既に知っての通り、自由に立ち入ることが出来るが、パスがないと入れないところや、トラップがしかけてあるところもあるので、気を付けるようにしてください。」

昨日も来たばかりのここ実習練の一角である教室には、２クラスが呪術を学ぶため集まっていた。
右隣りにはおなじみの３バカ。おい、陽介。目輝かせている暇があったら隣の真のバカを叩き起こせ。微妙にいびきが聞こえる。
そして左隣り・・・というより左腕には葵が貼り付いている。
言わずもがな、合同授業はＡとＥの２クラスだった。

「・・・葵。暑苦しいんだが。」
「ん～？それなら脱がしてあげ・・」
「とぉ～思ったら気のせいだったなぁ！！何だろう、みんなの初魔法の授業で中てられてたかなぁ！！」

あぶねぇ！！なんかこいつ、いきなり訳分かんないこと言い出したんですけど！！え？何？今のは私が悪いんでございましょうか！？悪いの？いや、悪くないよね！！ちょっ舌打ちしてんですけど横の人。

「では、まず、呪術といかなるものか、説明していきたいと思います。」

そうこうしている間にも授業が進んでいく。

（これは自分自身のためにも周りなんか気にしている場合じゃないな。・・・ん？）

周りに注意が行かないよう、目の前の先生に集中しようとした矢先、制服の裾をひかれた。

「ねぇ、裕也。」

「何？」

制服の裾を引っ張ったのは右横に座っている蛍太だ。

声を少し落として低い声で私に話しかけてくる。あまりにも真剣な目をしていたので、こちらも何があったのかと少し体を傾けた。

「この間の掃除、何の意味もなかったんだね。掃除したところがもう汚くなってるんだもん。これがほんとの罰掃除ってやつなんだね。」

「・・・・」

蛍太のその言葉に返事をすることが出来ず、ひきつった笑顔を返すことしかできなかった。

（おおおお、お前は今頃気がついたのかぁぁ！！）

腹の中はかなり煮えくりかえっていましたが。

掃除を言い渡された時も言われていたはずなのに。

さっき冒頭でも説明があったがこの場所は“鍵がなく、いつでもだれでも使用可能”であるということ。ということは、入れ替わり立ち替わり誰かかしらは居る訳で、ここを使用する人間は、おもに実践がしたい訳で、すなわち、掃除をする暇がない。そんな場所を掃除しろって言っていた本当のところは“危険な場所で無意味なこと

をしたくなかったら学習しろ”って意味だったはずなのだが・・・この分だとその裏の意味を理解していない。そして、呑気に授業を受けている2人（片方爆睡中）にも言える話だ。いや、もしかすると気が付いていない可能性の方が高い・・・！

「はぁ。」

先が思いやられると感じて溜息を吐きだすと、蛍太は不思議そうに私をみていて、そんな私と蛍太に、顔が近い、と言って前かがみになっていた体を葵に引っ張り上げられた。

＊＊＊＊＊

主に呪術とは術者の祈りの力が具現化したものである。
祈りと言っても様々な意味が含まれている。
すぐに気がついた人もいると思うが、“呪”術なのである。読んで字のごとく相手を呪うのだ。それが術を掛けた相手に幸となるか不幸となるかは、術を掛けるものがどのように祈りを込めたのかによってくる。

「はい。ゆうにあげる。」

コロン。と私の目の前に差し出されたのはシルバーリングだ。

「変な虫がついたらいけないからね。」

（今の私（の容姿）にどうやったって付きようがないと思うが。）

とりあえず手にとって眺めてみる。光が当たるとキラリ、と輝く磨き抜かれた傷一つない指輪。だが、よくよく眺めてみると細かな字が刻まれているのが見える。寸分のずれなく配置されているそれに思わず感嘆のため息が出た。

「？どうかした？気に入らなかった？」

「いや、違うけど、これ本当にもらっていいのか？」

「もちろんだよ！ゆうのことを思って作ったんだから。」

満面の笑みでこちらへ微笑みかける葵。あ、すいません。離れてください。あなたの隣にいるＡクラスの方（男）の視線がめちゃくちゃイテェです。

まあされはさておき、さすが万年首席が作った“呪具”なだけあってきれいな作品である。

「おや、もう出来たのかと思えば、佐倉さんですね。」

気がつくと呪術の先生が目の前に来ていた。

私の手の中からひょいとつまみあげ、ゴテゴテしたルーペらしきレンズを使って完成度合いを見始めた。すると、始終穏やかであった表情が一瞬固まって少しひきつった表情になった。

「・・・うん。簡単なものではありますが、これだけできれば、全く問題ないでしょう。」

「先生？」

一言それだけ言うと、ソッと私の手に戻した。私とも葵とも目を合わせず、不自然なまでに穏やかな表情で。

「はい、皆さんもこの時間内に一つ作り上げましょう。効果がないと思われがちでも祈りの文字が刻みこまれればそれは呪具となります。」

（先生！！ちょ、どう言うことですかぁ！！）

呼びかけにも全く反応を示さず、スタスタと若干足早に去って行ってしまった。

手の中には、先生をひかせた物体Ｘ（シルバーリングの呪具）

「・・・・」

「ちょ、なんでつき返すの？なんで無言なの？」

ぐいぐいと押し付けるかのように葵につき返す。

「・・・」

「ちゃんと受け取ってよ。ゆうのために作ったんだから。」

突き返した腕を掴まれ、突き返される。そうはさせまいと腕を突っ張る。

「いやいやいやいや、そんな、学年主席の素晴らしい呪具など私めにはいただけませぬ。」

「なんで急に卑屈な商人っぽくなってんの！？」

突き返す理由など明白である。

「・・・なんて祈った？」

「えぇ～それ聞いちゃうの？」

聞かずにはいられないだろう！！見た目は普通であるが、刻まれた意味を読み解いていた先生が表情を変え、こちら2名とも視界に入れようとしなかっただなんて・・・絶対になんかあるに決まっている。

「な・ん・て・祈・っ・た！？」

う”～と唸って、ふてくされたような顔をしていたが、強めにもう一度聞き返すと、ジトッとした目で見返してきながらポツリポツリと話しだした。

「・・・ゆうに近づく虫どもに制裁を・・・」

「分かった、もう分かった。しゃべるな。」

なんだ虫って、虫避けか何かか！制裁って、身につけるもんは虫避けじゃなく殺虫剤か！！殺虫剤の匂いなんか嫌だ！！（勝手に薬品と変換されておりますが、実際には虫避け指輪です。）

「・・・ちゃんと喋ったのに・・・」

説明を促したくせに回答を途中で遮られたことが不服だったらしく、むっつりとして一点（指輪）をジッと見つめている。

「えい」

「！！」

スポッと私の右手の小指にはまったのは呪いの指輪。
「な、ななななな何をするんだお前はぁ！！」
「わあーーゆうちゃんが怒ったぁ～」
あまりのことに立ちあがり叫ぶ私に、さっきから変わらず呑気な表情で微笑んでいる葵。そんな穏やかな表情にイラッとしつつ、内も外も荒れ模様の私はさらに続けて叫ぶ。
「怒ったじゃねーー！！これは何だ！！」
ビッと手を広げ、小指を協調させつつ葵の顔の前に掲げる。
「うん？指輪？」
「たっだの指輪じゃなく呪いの指輪だろぉうが！！」
「呪ってないよ～」
「私は呪われているように感じる！！しかもこれ外れねぇし！！」
呪い呪いと連呼していたせいか、指輪を付けていることに気味が悪くなってきてはずそうと試みたところ外れないどころか、定位置に居着いた全く動かない。
「一度つけたら外れないよ。だって、そういう風に刻んであるもの。」
「ちくしょぉ～～～！！」
ばしゃんっっ
水を頭からかぶった。

なぜなら目の前には笑顔で切れている先生が杖を私たちに突きつけているから。

「そろそろ授業に戻ってきていただいてもいいでしょうか？」

「はい・・」

水をかぶったことによって頭が冷えた私の横で“うえ～～、びしょぬれだ～”と文句を言う葵が居たそうな。

＊＊＊＊＊

「美少年が出現したって聞いたわよ。」

「飯食ってる時急に何言い出すの、絢子さん？」

午前の授業が終わったので、食堂に来ると絢子が先に来ていたのを見つけた。

「クラスメイトが言っていたのよ。午前中に“水も滴るいい美少年”を見たっていう噂が流れているのよ。」

何やら不穏な空気を感じるが、気のせいだといいんだが・・・

「だからってなんで私に言うんだ？関係ないだろう？」
「その美少年、佐倉と並んでたって話らしいのよね。」
「ああ、それなら裕也し・・」
陽介の口を強制的に閉じさせる。目の前にあったコップを詰め込んで。当の本人はゴッという音とともにムガァという奇声を上げて背もたれにだらりと身を預けた。
「「・・・」」
3バカ他2名は何かを察したのか無言で昼食を食べ始めた。
「はあ、あなたってほんとバカな人ね。」
「うぐ、いい返す言葉もありません。」
「まあ、仕方がないよね。ゆうは可愛いもんね。」
1人空気が読めない人間がいるようだが、この際そこは無視しておこう。
「まあ、別に、私に被害があるわけでもなさそうだから、いいけど。」
「絢子さあん。他人事だからってひどいっすよぉ・・・」
「今に始まったことじゃないでしょう？で、呪術の授業はうまくいったの？」
今、一番聞きたくないことを聞かれた。
私は長い溜息を吐きだすと、ポケットから金色のロケットを出した。
「・・・これは？」
「私の呪術を掛ける媒体。」

「・・・何も掛ってないわね。」

絢子は、机の上に出されたロケットを手にとって眺めたりしたが、今、言っていた通り、呪術がかかっていないのだ。
あの後、葵と席を離され、やっと集中して授業を受けられると思って、真摯に取り組んでいたのだが・・・授業内で呪術を刻むことがかなわなかった。
きちんと掛けられたのは少数だが、皆、何とか一言でも刻めていたのだが、私は一切刻むことができなかった。

「もう、なんでこんな落ちこぼれなのかな。」
「Eクラスなんだからそれなりに実力があるんでしょう。こんな授業一つで、気にしていられないんじゃない。」
「授業一つだけならな。」

そう言った私の言葉に、誰もフォローの言葉を掛けてくれませんでした。

「これ、ゆうが作ったんだよね？」
「んえ？そうだよ。授業中に身につけるものに刻むのが一般的だって言ってたから、用意された中からロケットを選んだんだよ。」

葵は何を思ったのか、ロケットを手にとって眺めては頷いて、見るのに満足すると、満面の笑みを私に向けた。

「これ、俺がもらっていい？」
「・・・何も刻まれてないロケットでよければやるけど・・・」
「！ありがとう！嬉しいなぁ、交換こだね。」
「・・・」

私自身、不本意ではあるが、奴が作った（呪われた）指輪を今も右手に付けている。そして、今、奴の首にあるのは私が選んだロケット。

「・・・やっぱ返せ。なんか虫唾が走る。」

「返さないよ～。」

手を伸ばして首にかかっているロケットを掴もうとしたが、ギリギリのところでひらりとかわされてしまう。ひらりひらりと何度も。

「あ、俺そろそろ行くよ。次、ちょっと早いんだ！」

「あ、ちょっと待て！」

“バイバーイ”と手を振って葵は食堂を出て行ってしまった。

「あきらめた方が賢明ね。」

「俺もそう思う。」

「僕も。」

「・・・チックショーー！！」

私の右手小指の指輪がキラリと光った。

第八話　呪術　（後書き）

陽介は食堂を出ていくときに裕也に八つ当たりされてやっと目覚めます。

第九話　役割分担

皆入学して月日も流れたからか、既にこの学園に慣れてきたようだ。慣れてきたからにはやらなければならないことがある。今期末の大舞台に向けた出店決めだ。

「おら、そこ。はしゃいでないで前に出てこい。板書やれ。」

茜祭は学園全体で行われるため、本当に学園を上げた大イベントだ。半端なものは出すことはできない。運が悪い（良い？）と国のお偉いさんとかを相手にしないといけないらしい。そのため準備は今から行わなければならない。

もちろん後ろの方で騒いでいたアホどもはいつものメンバーで、しぶしぶ前まで出てきて板書の準備をし出した。

「本当に、最初はどうなるかと思ったけど、藤城さんが私のクラスにいてくれて、本当によかったわ。既に手綱も握っているみたいだし。」

「先生、それを本人たちの前で言うのはどうかと思います。」

「気にしないで進めて頂戴。」

「・・・」

自分の手を煩わせずいることができてご機嫌な担任をとりあえずほっておくことにする。物凄く気になるが、ここはぐっと己を押さえつけて耐える。

・・・なんだかこの学園にいるだけで胃に穴が開きそうだ。

「・・・では、まず何を行うかですが、1年の場合、休憩所・観覧

施設の設置とありますが、何かアイディアがある方はいらっしゃいますか。」

文武合同茜祭とは他校で言う文化祭・体育祭が混合した学校公開のことだ。外部からも出店を出しにやってくる。学校がある街だって祭り一色になる。

しかし学園の生徒達が行うことはとても祭りといえるものじゃない。よくて4年生までは祭りだと浮かれていられるかもしれない。しかし、この茜祭で行われることは、競技大会が主だ。1年でどれだけの生徒が魔術師へと近づくことができたのか、どれだけ特殊な魔法を身につけることができたのか、それを後輩へ、親へ、教師へ、有力者へ見せつけることが目的のイベントだ。

もし、有力者に気にいられれば、将来を約束される。結構シビアな世界だ。

そのため、多くの競技大会が実施される。

たとえば、水系の魔術形成だったり、武器術によるトーナメント戦、魔法のトーナメント戦、学年別トーナメント戦、無差別トーナメント戦など、数多くの競技が実施される。生徒達は事前に参加を登録して当日参加する。

ただ、1年だけはちょっと事情が違う。まだ基礎しか学んでいない1年は学年別で構成されている者にしか参加ができない。そのため、他学年と比べ自由時間が多い。先輩の競技を見に行くのもいいが、観客席だってそんなにあるわけではない。そのため、お客の相手を1年にさせるのだ。2年3年はも少数だが行っている訳だが、圧倒的に足りないので、仕方なしに下っ端へと役割が降ってきたのだ。

まあ、慣例であるのでしかたがない。

「とりあえず、なんでもいいのでどんどん出して言っていただけるとこちらもやりやすいので、思いついたものから言っていってください。」

そうすると、意外と色々出てくるものだ。
ポンポン飛び交う単語を3人で何とか黒板へとあげていく。私は飛び交う単語の拾い忘れたであろうものを繰り返し伝えていく。
少しして、すぐに描くところがないくらいにいっぱいになった。

「・・・」
「あらあら、なんだかすごいことになっているわね。」

まあ、結果は分かっていたさ。
頭のいいクラスじゃない。それなのに自由に意見を言わせれば、混沌なアイディアばかりが並ぶのだろうと。
だがしかし、これはほんとにひどい。ただの悪口が並んでいるようにしか見えない。本当に使えるアイディアは2，3といったところか・・・

「というより、お前らはまともに板書も出来ないのか？」
「あんな次から次へ言われたらきちんと書けるか！見てみろ、蛍太なんかキャパ越えして目を回しているじゃないか！」
「そうだ。なんとか聞きとれたものを書いていくので精一杯だ！」

（いや、まあ、そうなんだろうけど・・・）

どう見ても奴らは悪口しか拾えていなかったようだ。私が拾った単語しか使えそうなアイディアがないっていうのもどうなんだ・・・

「ほんとにこのクラス、大丈夫なのか？」
「期待してるわ、藤城さん！」

＊＊＊＊＊

よくわからないものはすべて消したはずで、必要なものをもう一度書き出して見たんだが、混沌なのが変わらないのはどうしてだろう。メイド喫茶、呪具売買会、使い魔癒しの空間・・・どれ一つ似た趣向のものがない。

「念のため聞いておきますが、皆さん、休憩所・観覧施設の設置ということは理解していただいてるんですよね。」
「当たり前だろ！だからこその喫茶じゃないか！」
「有力者の人はお抱えの本物のメイドいるでしょう！！」
「だからこそ！自宅と同じ使用人が居たら楽じゃない！！」

何故か女子たちまで加勢して来た。
確かに、有力者にとっては使用人が自分の世話をするのが当たり前なのだから、落ち着いて休憩することができるのかもしれない。
少し考えこんでしまい、気がついてみると男子と女子で言い争っている。

「メイド喫茶に決まっているだろう！」
「執事喫茶に決まってるわ！！」

・・・激しくどちらでもいいのですけれど。

どちらも似たようなものなのだから、合わせれば一番いい案の気もするが。

「だって裕也君の執事姿がみたいのよ！！」

ん？

「あんなイケメンに給仕されたいのよ！！」

・・・・前言撤回。メイド喫茶がいいと思われます。

乙女たちの本心がむき出際にされたことによって、クラスの女子たちが騒ぎ出し、男子に猛抗議していく。

「お、俺たちだって、こんな出会いのないところなんだから、一時でも夢が見たいんだよ・・・」

なんだか男子は哀愁が満ち始めたぞ。可哀そうになってきた。

「はいはい！全く、そんなに熱くならないの！」

そこでずっと黙って見ていた担任がやっと重い腰を上げて話しかけてきた。

「どっちかにしたいって気持ちは分かるけど、男女で作業に差が出てくると不公平だからね。どちらの意見も取り入れるのがこの際最善でしょ。ね、クラス委員長！」

「そこで私に振りますか。」

結局一番めんどくさいところで私に振ってくるとは、担任失格だ！誰だ！こんな奴を教師にしたのは！！

そんな文句を言ったとしても仕方がないことは分かっている。分かっているさ、これはただの逃避なのさ。

「振るにきまってるじゃない。中心人物なんだから。」

知ってて振って来ましたか！そうですよ、女子はメイド服も可愛らしい制服なので、嫌な訳ではないんだ！ただ、ただ！私の執事姿を見たいというだけで否定してきていたんだ！もう何なの、どうすればいいんですか。誰だよ“Ｅクラスに水も滴るイケメンおる（笑）”なんて噂を流したやつは！！
そうです、あの日から女子の目から怯えは消えましたが、違う熱が灯ってしまった訳ですよ！！まだ実害はないけど、最近では絢子に少しずつ避けられるし・・・まさかこんな所に弊害が現れるとは・・・！

「ええと・・・私的にはメイ・・・ええ！！先生の意見に大賛成です！！」
「うん！じゃあ決まりね。」

メイド喫茶がいいと言おうとした時の女子の目がトテモコワカッタデス。全員睨んでくるとは・・・さすがの３バカも空気を読んだのか私から目をそらしていましたよ？

「これで申請出してみるから、通ったらまたクラス会開きましょう。」

担任がそれだけ言うと教室から出て行った。今日の授業はこれで終わりだ。意外と長く話し合っていたのか、外はもう日が暮れはじめていた。

「裕也君？」
「はい？」
「私たち、楽しみにしてるね？？」
帰り仕度していたところにクラスの女子が近寄ってきて、それだけ言うときゃあきゃあと黄色い声をあげ、パタパタ足音を立てて去って行った。

「・・・」
「愛されてるね、裕也。」
「佐倉はこれ知ってるのか？」
「気をつけろよ、あいつは何をする変わらないからな。」
「お前にだけは言われたくないと思うよ、葵も。」

実は陽介、昨日も身に着けていた薬品をこぼしただかで、教師に呼び出しをくらっていた。自称マッドサイエンティスト、他称歩く危険物は伊達ではない。バカなくせに危険物持つ歩くな！！

「楽しみにしていたはずの茜祭がなんだか嫌になってきた・・・」
「まあまあ、絶対似合うからいいと思うぜ。」

だから余計嫌なんだよ！つーか似合ってたまるかっ！また変な噂、立たないといいなあ。

＊＊＊＊＊

「ああ、よかった。まだ帰ってなかったわね。」
パタパタと足音を立ててEクラスに飛び込んできた人が私と目が合うとほっとしたように肩を落とした。
「お？」
「あれってAクラスの武術の教師じゃないか？」
黙っていれば高校生にも見える童顔な、しかし大人の余裕を垣間見せるその教師は、私たちの方まで近寄ってきた。
「久しぶりね。学園生活はその後順調かしら。」
「この惨状をみてそう思うのであればそうなのでしょうね。」
「・・・・そうね・・・・」
先ほどまたしても男女で喫茶店の内容についての話し合いが勃発してしまったこともあり、ちょっと教室が見るも無残な状態になっていたりする。
Aクラス教師はその異様な光景の教室を見回した後私に目を合わせた。
（お願いだからそんな憐れみをこめた眼を私に向けないで！！）
目の中に込められた意味を察して私は顔を引きつらせながら顔をそらした。

「それより、担当クラスでもないのに、どうしたんですかぁ？」
蛍太が私たちの奇妙なやり取りに疑問を浮かべつつ、それよりももっと気になったのであろう最初の疑問を口に出す。
すると、教師はギクッと体を揺らして顔色が一気に変わった。
「た、たた担当のクラスじゃなくても来るわよ、ええ、だって教師ですもの。」
「そんな動揺してどうしたんですか？」
今最も聞かれたくなかったであろうことを匠がぽろっと口に出してしまった。顔色の悪かったのその顔が今は俯かれてしまい、今、どういった表情をしているのか読み取れない。
「・・・先生・・？」
「・・ふ・・ふふふふふふ・・・ふふふ・・」
カタカタと震えはじめ、小さく笑っていたかと思えば、大きな声で笑い出した。
「ははははははは！そーよ、やつに負けたペナルティよ！！ええ！いつもは私がこき使ってやっているというのに、今回は奴に使われている！！何という屈辱！！」
身ぶり手ぶりで、誰に訴えかけるという訳でもなく、語りかけるかのように叫び出した。もちろん私たちを含め、教室に残っていた生徒は、ドン引きだ。一番間近で叫ばれている私たちは顔面蒼白だ。
「先生？あの、落ち着いてください。」

何故かこういうとき先頭へと差し出されてしまうため、勇者となるべく教師へ話しかける。

「落ち着く？これが落ち着いていられますか！！」

（・・・あああああ・・・）

地雷を踏んでしまったらしく、ヒートアップしている。
教室のはもう私しか残っていない。あいつら私を生贄にして先に逃げ出しやがった。明日見てろよ。
教室には誰もいないが、ドアには野次馬がかなり集まってきていた。
というかおい。魔法陣の先公も交じってるじゃねえか！止めようと思わねえのかよ！！

「あれ？先生？」
「ん？」

そこに現れたる救世主葵様！！ああ！お待ちしておりました！！
この惨状で話しかけてくるとは本物の勇者だ！！パチモンの勇者ですみません！！

「佐倉さん・・・」
「！・・ああ、この間の試合の件ですよね。僕が負けてしまったから・・・・」

野次馬の間を縫って教室まで来ると、私と目が合い、その一瞬で何が起こっているか把握したらしい。

「あ、いや、別に佐倉さんだけのせいじゃ・・・」

「本当にすみません。僕が先生のキャリアを汚してしまって・・・」
「佐倉さん・・・」
葵がしおらしく教師に謝ってシュンとしていると、だんだんとまた別の意味で顔が青くなってきた。
確かに、教師が私情に生徒巻き込んで泣かしたとか、まずいもんな。うんうんとこれはいい攻め方だと思った。
「・・・やめてちょうだい、気味が悪いわ。」
（ええーーー！なんか言い出したよこの人！！）
「ああ、そうですか。」
（おま、あのしおらしさはどこに行った！！）
教師は冷静に戻ったみたいだが、心底具合の悪そうな表情をしている。それに対して、葵は先ほどの沈んだ表情はどこに行ったのか、噂通りの無表情に戻った。
「・・・」
「何をするもの別にかまわないですけど、ゆうを勝手に巻き込まないでください。迷惑ですから。」
「ごめんなさい。」
「俺に言ってどうするんですか？」
「藤城さん、申し訳なかったわ。直前まで言い争っていたから。」
「ああ、いえ、私は大丈夫ですよ。」
直前まで私らの武術教師と争っていたのか。それならこの荒れ具合にも納得がいく。

「それで、ゆうに何の用があったんですか？」
「あ」
そう言えば忘れていた。早くこの空間から解放されたくて私に用があって話しかけてきていたことを忘れていた。
「ええ。伝言をね、伝えに来たの。次の授業できちんと言われると思うけど、一応ね。体術って心構えだって大事だから。」
「？なにかありましたっけ？」
「あなた、武術の授業だけど、次からうちのクラスと混ざって受けてもらうわ。」
「は？」
「伝えたから、聞いてなかった、なんてことないようにしてね。そんなことがあったらあいつになんて言われるやら。」
ぶつぶつと不満をぼやきつつ女教師は帰っていってしまった。
「え」
「ゆう！」
がばあと葵が横から覆いかぶさるように抱きついてきた。
「嬉しいな！ゆうと一緒に授業受けられるんだ！」
「え」
「これからずっと俺と組んでね。」
ぎゅうぎゅうと抱きしめて喜色オーラを振りまいている。
いつもならここで突き放すところだが・・・今はそんなことを気にしていられる場合ではない。

（武術がＡクラスと一緒って・・・え、それってありなの？）

第九話　役割分担（後書き）

方向性がバラけてきたような気が・・・誰かまとめて、作者の頭の中を。

第十話　実力主義

授業が始まって5秒後。

「よし、では藤城さんはこれから、武術はAクラスと一緒に受けてください。」

「授業開始直後に何を言い出すんだあんたは！！」

そんな突拍子もないことを言われたせいでみんなどんな反応示せばいいか分からなくてざわついてるじゃないか。

「先日のあの発言は本当だったってことですか。」

「ええ、そうですよ。ここにいるからまさか本当に分からなかったのかと思いましたよ。」

“そうしたらあいつに何のペナルティ課そうかと・・”と不穏なセリフを吐きだしたので、とりあえず話をそらそうと試みる。

「でも、それじゃあ他の授業が・・・」

「大丈夫です。そこは放課後に残ってもらうこととなりました。」

「ええ！！」

「自分が規格外であることを忘れないで下さいね？」

その黒々とした笑みに言い返す勇気など私は持ち合わせておりません。

＊＊＊＊＊

どすっ！
がっ！！
ばすっ！！！
「げ！！」
がつんっ！！！
どさぁ・・・
「勝負ありだね。俺の勝ち。」
差し出された手に自分の手を重ね引っ張り上げてもらい立ち上がる。
「はぁ・・・」
「そんなにやりずらい？」
めちゃくちゃいい笑顔で私の顔をのぞきこまれる。
私はその顔を恨めしそうに睨み返した。
（こんな衆人環視よろしく、な状況下で集中して授業が受けられるかってんだ！！）

冒頭であった通り、現在私はＡクラスにいる。
大体の授業時間が同じだから問題はないとの教頭の判断らしい。
そこは頑張って否定していただきたかったんだが・・・あの２人に囲われたら誰だって頷くしかないのかな、と納得もしてしまうのだけれど。
そんなこんなで、現在、奇異なものを見るかのようにこちらをちら見する生徒が後を絶たない。前回の授業であれだけのことをしたおかげか、乏しめるかのような雰囲気ではなかったが、これはこれでかなりきつい。

「まあ、俺が居るから大丈夫だよね？」

（いやいやいや！あんたのせいでこんなことになってるから・・・！）

はあ、と溜息をついて手で顔を覆った。

「はいそこー、自由に組手してていいって言ったけど、誰も休んでいいなんて言ってませーん。周りの手本になるように休み（・）なく（・・）続けなさあい。」

やる気のなさそうな声が項垂れた私の耳に飛び込んでくる。

「先生、ちょっとくらい休んだって・・」
「ダメです。」

スパっと気持ちのいいくらいはっきりとした返答をありがとうございます。
胡乱気な視線を教師の方へ向ければ、既に他の生徒の指導へと移って行った後であった。向けた視線を自分の足もとへと移して小さく

溜息をつく。休みなくずっと動けば疲れるのは当たり前だが、規則的な動作と見本として見られているということからの精神的疲れはどうにも堪える。

「溜息ついてないで、続きやろう。授業も後ちょっとだし。」

何の疲れも感じさせないさわやかな顔をして話しかけられたが、この同じ状況下だというのにそのさわやかさ、腹立たしさを覚えるぜ。

「ほんと、なんでこんなことになったんだか。」

「鍛えてばっかりいるのがいけなかったんじゃない。」

ごもっともで。

＊＊＊＊＊

「なんか、みんなざわついてない？」

「え？そうかな、そう言われればなんか違う方に気を取られてるって感じかな。」

ちらちらとみんなが見る方向は・・・校舎？

さっきまで、見たいけど関わりたくないから気配を殺してこちらを

ちら見していたAクラスの生徒たちだったが、今は何故か校舎の方を見ている。そんなに早く授業を終わらせたいのだろうか。

「佐倉！裕也！」

鋭い声音がこちらへとやってくる。驚いて声のした方へ振り返ると、全力で走ってきたのだろう陽介が膝に手をついて息を整えていた。

「全速力で・・どうしたんだ？」

「・・・」

「はあ、はぁ、・・っ蛍太が・・っ蛍太が倒れたんだ！」

「は？」

「ちょっとおかしかったんだ！とりあえず一緒に来てくれ！」

蛍太が倒れたってことはよくわかったが、授業中しかも離れたところで授業を受けている私にまでわざわざ急いでまで伝える必要ってあるのか？

「先生、すみません。私と藤城、このまま授業を抜けます。」

「は？」

「分かった。」

「え！」

当たり前のごとく葵の言い分が通ったことについていけない。

「裕也！何してんだ！行くぞ！！」

「は？え、ちょ、ちょっと待ってぇぇ！！」

先頭を陽介が走り出すと続いて葵も走り出した。・・・私の手を掴んで。もちろん引きずられるように走らされ、足はずたぼろです。

（いって！ちょ、体勢整えさせて！！って、ん？）

体を起こそうと顔を上げると、遠くの方に私のクラスメイトたちが見受けられた。が、何か様子がおかしい。確かに生徒が一人倒れれば、ギクシャクとした雰囲気が残ってしまうが、そんなの鼻で笑えるくらい騒然とした雰囲気が漂っている。時折、校舎の方を確認したり、とにかく落ち着きがない。

「全く・・なんだって言うんだよ・・・」

私はそう、小さく小さくぼやいた。

＊＊＊＊＊

ガララララッ！！

「匠！」

「陽介！！連れてきてくれたか！」

とりあえず医務室では静かにするべきだと思います。病人（けが人）が居るって言うのに騒ぎたてることは病に響きます。

「何やってんだお前ら。」

勢いよく立ちあがった匠とこれまた勢いよく医務室へ飛び込んでいった陽介を眺め私は思ったことをそのまま口に出した。ベットをのぞいてみるとよく眠っているのだろう蛍太が放り出されていた。よくよく見てみると確かに青い顔をしている。

「慌ててるから仕方ないかもしれないけど、きちんと布団の中に入れてやれよ。」

「いや・・だけど」

「う・・んん・・・・」

当たり前のことを言っただけなのに何故か歯切れの悪くなる2人。

「「あ」」

「どっせい！」

何を言っても行動を起こしそうになかった2人を放置して、とりあえず蛍太の体を持ち上げる。

「やっぱり重い・・・見てないで布団捲ってくれない？」

呆然とこちらを見ていたバカ2人に顔を向けると、その後ろにいた葵と目があった。すると何故かとっても楽しそうに笑った。いつものバカ正直な笑顔ではなく、なんだかとても気持ち悪い笑みだった。頼りない2人を放置して葵と一緒に蛍太の世話をする。

「・・てか医務の常勤どこ行ったんだよ。」

「俺が蛍太運んで来た時には既にいなかったよ。」

「だから他に頼りになりそうな奴を探しに行ったんだ。」

2人して私の質問に答えてくれるのはいいが、どうしてそこで思い浮かんだのが同級生なんですか？普通担任とか・・・やっぱりバカだからですか。

「とりあえず身体に異変はなさそうだね。」

「本当か！！」

「うん。ちょっと予想以上に魔力の消費が激しいけど、他には特には何も。」

葵のその言葉を聞いてあからさまにパァァァと表情が明るくなるバカ2人。てか魔力消費って・・・魔力使わない体術の授業だって言うのに何で消費されるのよ・・・やっぱりバカだからなんですか？それとも私がバカだから訳わかんないんですか？・・・あ、すみません、両方ですよね。

「そう言えば葵って医学面も強いの？」

「うん？」

「いやだって体調確認とか普通見ただけじゃ分からなくね？」

私は分かりません。言ってもらわないと全くと言っていいほど分かりません。

「俺も詳しい訳じゃないけど、まあ、斎名家は特徴あるからお互いに分かりやすいんだ。」

何を感じ取れるって言うんですか。気ですか、お互いのくせの強い気を読みとれるってことですか！

「あ、もちろんゆうのも分かるよ！」
「分からなくていいです分からなくていいから忘れてください。」
「え～・・」
そんないじけたように唇突き出さないで！子供じゃないんだからそんな仕草するのやめなさい！
「にしても、なんでこんなことになったんだろうね。」
明らかにすねている口調で大事なことを聞き出そうとしないで！というか早く機嫌直せよ！水に流してしまえ！！
いきなり振られたからか一瞬キョトンとした顔でお互いの顔を見合わせたバカ2人は、どうして自分たちがここに来ることになったのか思い出したらしく、私と葵へ蛍太が倒れた経緯を話し始めた。
「授業中いつもどおり普通にしてたはずなんだけど、急におかしくなったんだ。」
「そうそう。おかしくなったて言うか、急に顔色が変わって、すうっと何かが身体から抜け落ちたかのように崩れたんだよ。」
「崩れた？」
「そう。足もとからゆっくりと力が抜けて膝から地面に倒れたんだ。」
「「へぇ」」
実際に見ていた訳ではないのでニュアンスが伝わってこないため気のない返事が出た。葵に関しては興味がないと言った感じだ。・・・おまえが話題振ったんだろ！！
「ほんと魂出ちゃった感があったからマジビビったぜ。」
「ああ。俺は死んだかと思った。」

（こいつらの蛍太に対する考えがなんだか見えるようだ・・・）

布団の中で眠っている話題の人は、青い顔をしつつも、幸せそうに眠っている。

起きたら起きたでやっぱりうるさかった。いつもより顔色が悪いという点を除けば本当にやかましかった。病人出なかったらラリアットをくらわせてやるのに、と思うほどいつも通りだった。

倒れたとか・・・私の夢だったんじゃないのか？と思いたいほど元気になっていた。

第十話　実力主義（後書き）

遅くなりました。すいません。

第十一話　炎舞う実習棟（前書き）

あけましておめでとうございます。
遅くなっていまい、申し訳ありません。
拙い文章ではありますが、よろしくお願いいたします。

第十一話　炎舞う実習棟

実技ってみんな楽しみなもんなんですよ、本当は。

「きゃあああ！！」
「うおおおぉぉ！そっち行ったぞ！！」
「ぎゃあああ！！た、助けてえ！！」

決してこんな阿鼻叫喚な地獄絵図が繰り広げられるような授業じゃないです。ことの発端はほんの少し前に遡る。

＊＊＊＊＊

ざわざわざわ

今日の教室は皆が少し浮足立っている。何を隠そう、今日は初めて魔法を授業で使うことができるから。
確かに貴族だったら家庭教師でも何でも雇って、少なからず使ってきている。しかし、そんな優秀者がこのEクラスにいるはずがない。

「おはよう、裕也！」
蛍太が元気よく右手を振りあげて教室に入ってくる。その後ろから、腰巾着2名も一緒に入ってきた。

「ああ、おはよう。唯一の例外のバカども。」
「な、なんかバカにバカって言われた！」
「今日はいつにもまして暴言が激しいが大丈夫か？そんなことで息切れしないか？」

朝っぱらから何やら不愉快なことを言われた気がする。
いや、だって私が正しいと思うぞ！このクラスで唯一魔法または魔術を使ったことがあんのってお前らだけだからな！！周りを見てみろ、微妙に痛い視線を送ってくる奴らが居るだろう！

「だが、許してやるよ。今日の私の寛大さに跪くといい。」
「・・・裕也？大丈夫？具合でも悪いんだったら保険室まで付き添うよ。」

どこまでも失礼な奴らだ。
まあ、私としても、初めて魔法を使うということに気持ちが高揚しているのかもしれない。いや、している。

「なんでもないよ。それより、保険室と言えば蛍太、お前はもういいのか。先週ぶっ倒れて、2、3日出てこなかっただろう。葵いわく魔力切れを起こしてるとか言ってたけど。」
「うん！もう大丈夫だよ！そんなに弱くないからね僕は！！」

それは知ってる。じゃあなきゃ倒れた後、すぐ目を覚まして騒ぎ出すなんて芸当、出来やしないだろう。

「なあに、ゆうはそんなに朝倉のことを気にしてたの？」
「！！」
「佐倉、おはよう」
「わあ！朝から佐倉に会えるなんて！らっきぃ！！」
「ラッキーか？俺には逆に思えるぞ。」

突然現れた葵に驚くでもなく、各々平然としたやり取りを返している。

「と言うか、重い！！朝っぱらから人の上に乗っかるな！！」

そう、なんで私がびっくりしたかと言えば、椅子に座っている私に向かって、急に背後からのしかかってきたからだ。背後から寄ってきたということは、私と対面で座っていたこいつらはすぐに気がついたのだろう。

「え～、乗っかってないよ。抱きついただけ。」
「なお悪いわ！！」

ドンっと机に拳を叩きつける。
いつでもどこでも、私を見つけるとひっついてくるせいで、世の中のお嬢さん方があらぬ妄想を描き立てられてるようなんですけれども。
普通こういうときって、女子に嫉妬されて体育館裏行きだったりしませんか？なんでそこで頬を赤くして黄色い声を上げていらっしゃるのでしょう。
て、ハッ！！あれは・・・

「絢子・・・」

用事があったのか、ただ単に通りかかっただけなのか、絢子がEクラスにいることは珍しかった。さらに、入り口ドアに隠れつつこちらをうかがっている様子は、いつも堂々としている絢子とは一瞬誰もが見紛うだろう。

「あや・・・」

「ついに裕也も落ちたのね・・・」

上に張り付いている葵も鬱陶しかったので、立ち上がろうとしたら、小さく、本当に小さくポツリと不吉な言葉を残してすうっと音もなく去って行った。

（え、え、ええええ！何？え、何なの？どういう意味！？）

「いやあ、杉崎さんって面白い人だね。」

「今ので何がわかったんだ！！」

「佐倉、そろそろ戻らないとまずいんじゃない？」

「ん？・・・ああ、そうだな。じゃあ、ゆう。また後でね。」

陽介が話しかけたはずなんだが、何故か私しか眼中にないあいつをどうしつけたらいいんだろうか。３バカは３バカで気にしてる様子もないようだが、いかんせん私が気になる。

と言うか、お前ら既に慣れ切ってるけど、少しは気にしろよ！！

＊＊＊＊＊

「それでは、最後にもう一度だけ繰り返します。魔法を使うときは１つ精神を乱さない、２つ魔力を枯渇させない、３つ魔力を注ぎすぎない、４つイメージを強く描く。以上４点について、絶対に忘れないで下さい。いいですね？」

処変わってここは実習棟の教室。
はーい。と素直に皆返事をする。入学してなかなか実技を行ってもらえず、やっと行われると思った授業でも、繰り返される基本事項に皆あきあきしており、そんなことはどうでもいいから、早く魔法を使ってみたいと言った様子だ。
もちろん私もそんな中の一人だ。

「まったく。返事だけはいいですね。では、先ほど説明した魔法円を机の上に広げて、手をかざしてください。周りには荷物を置かないようにしてくださいね。・・・そう、そこの君に言っているんですよ。さて、では準備が出来たものから始めてください。」

教室は急に静かになった。皆、魔法を使うため集中しだしたからだ。周りに気を配っている場合じゃないので、私も目の前の魔法円に集中することにする。
今日は初めて魔法を使うものがほとんどということもあり、魔法の発動を補助する魔法円を使用している。初回ということもあり様子見ということなのだろう。そして使う魔法は火の発現だ。何もないところから、己の魔力のみをもって発現させるということ。このくらいであれば呪文などの難解な羅列は必要ない。

補助も付いていることだし、先ほどしつこいほどに念を押された４つを実行してみる。ゆっくりと吐いて、魔法円に手をかざす。そしてゆっくりとイメージする。拳ほどの大きさの赤い炎を・・・ゆらりと空気が陽炎のように揺れたと思ったその時。

ドオォーン！！！

「！」

静寂の中での急な爆発音に、全員が驚いて集中が解かされ、音の方へ振り返ると、そこには大きな一匹の炎の竜が居た。

「え」

一瞬の沈黙の後。

「きゃあああああぁぁぁ！！」

「うわあぁぁぁ！！」

生徒達の叫び声や、机や棚にぶつかって倒れる本やガラスの割れる音が響き渡った。

「なな、な、な、なん、なんだあ！？」

私もみんなと同じように驚き、炎の竜から目をそらさず立ち上がった。紅蓮の焔を身に纏いしその竜は一声『グオオオオ』と叫ぶとこの教室を叫びながら飛び回りはじめた。

「う、うるっせ・・どうなっているんだよ。」

実習棟の教室と言っても普通の教室の2，3倍あるくらいで、人の何倍もある竜にとっては狭い空間であるため、締め切られたこの空間では叫び声はとてもうるさく響いた。
そうでなくても、生徒達の悲鳴などが響き渡っており、より場が騒がしくなっていた。

「裕也！裕也！」
「んあ？」

誰かに話しかけられ、声のしたを振り返ると、陽介、匠そして涙目になっている蛍太がいた。

「お前ら！大丈夫か！」

こんな近くにいても叫ばないとお互いの声が聞こえないらしく、怒鳴りあって話しあうはめになっていた。

「ああ！大丈夫だ！！裕也は！？」
「こっちも大丈夫だ！！というか、蛍太は何泣きそうな顔してんだ！男なら泣くな！！」

女尊男碑だ、とか言わないで下さい。確かに、この場に居合わせているクラスの女子で泣きだしてしまった子も多数いて、そんな女子を守ろうとしている男子生徒もいる訳です。まあ、それはよしとしましょう。ただ、ちょっと離れているところにいる恐怖に顔を歪めた男子と、それを泣きだしそうな顔で必死に守ろうとしている女子をみるのはちょっといただけない。と言うか、男子！！もうちょっと頑張ろうぜ！？

「いや、これはちょっと違うんだ！！」

陽介が匠と顔を見合わせて、ちょっと困ったような顔をして蛍太を擁護した。

「は！？何が違うって！？」
「いや、実は・・・・」
「何だって！？聞こえない！！」

自信な下げにボソボソと語られてもこの状況下では全く聞こえない。もごもごと2人して話しずらそうにしているところに、蛍太がやっと口を開いた。

「僕が、あれ、出したの！！」
「・・・はあ！！？」

またしても一瞬理解できなかった。

「ちょっと、詳しく話してください！！」
「「「「！！！」」」」

急に私の肩を掴んできたいつの間にか近くにいたのであろう教師は、血相を変えて私たちに説明を求めてきた。
3バカはちょっとビビりながらも事の詳細を話し出した。
まとめるとこうだ。

1. 蛍太の魔力量は常人をはるかに上回る。蛇足だが、そのためバカでも次期当主になれたと言っても過言ではない。
2. 小さいころからなかなか制御できず、現在でも何とか制御しているところである。
3. イメージでは確かに小さい炎だったのだが、魔力量の加減を

間違えたとのこと。
4．　それに気づいて間違ったイメージを膨らませた。
その結果がさっきの大爆発、所謂大暴走だ。
「「・・・」」
「・・ごめんなさい。」
「ごめんで許される問題か！！」
「いたあ！！」
ゴンッと蛍太の頭に力を込めて拳骨を一発くらわせる。
非難の声が聞こえた気がしたが、この騒音で全く聞こえない。
そして一行目へと戻る。
「事情は分かりました！！原因が分かれば対策も取りやすいです！！」
聞き終わった後、ちょっと頭を痛そうにしていたが、教師は気を取り直し、私達へと話しかけてきた。
「斎名家の魔力には私ですら干渉できません！！出来るのは斎名家の血を濃く引いているあなた達3名のみです！！ここまで言えばどうすればいいか分かりますね！！？」
3バカはまるで言われることが分かっていたようで、すぐに頷いた。
「では、少しの間でいいのであれを引き留めてください！！私は水系の魔法が得意なので何とか焔の勢いを削ぎます！！そうしたら、後は制御できるでしょう！！」
「「「はい！！」」」

「最後に、あの竜は発現の際、補助の魔法円を使用したことによりこの教室の外に出ることができません！！そのことを本能で理解しているのか、この教室から出ようとするとその人間に攻撃を仕掛けてきます！！物陰に隠れていますが、全員この場にいるので気を付けてください！！」

「「「了解！！」」」

（バカに見えてもお貴族様ってか・・・）

3バカは走って竜の近くまで行き何と応戦しだした。と言っても攻撃しても、すぐ仕返されすぐ逃げかえって、を繰り返しているだけなのだが。

呆然とその現実離れした状況を眺めていると、ガシっと腕を掴まれた。

「！」

「何をしているんですか！！あなたには、私の手伝いをしてもらいます！！」

教師が私の腕を掴んだまま、歩きだした。

「あれを止めることは朝倉の人間にしか出来ません！！次期当主の魔力があれほどつめられたものを私は見たことがありません！！幼稚な案かもしれませんが大量の水をあの上に落します！！ただ、威力を間違えるとこの実習練が吹っ飛びかねません！！あなたには私の術を最後まで描けるよう援護してもらいます！！」

「は、はい！！」

少し広くなったところで、足を止めた。

「ここに魔法陣を描きます！！しかし、私の魔法量だけでは敵いません！！あちらに倒れている棚が見えますね！？あそこに透明の液体に浸された青色の水があります！！それを取ってきてください！！他に必要なものは揃えてあります！！後はそれだけです！！」

「分かりました！！」

それを言うと教師はすぐに魔法陣を描き始めた。

私は指示された通りに目的の物を取りに向かった。

（透明な液体に浸された青色の・・・み・・ず・・・？）

今更だが言葉が矛盾していることに気がついた。

「そんなもん本当に存在するんかコラァ！！！」

切羽詰まってきたこと、いろんな瓶が見つかるものの、言われたようなものが出てこないため、多少キレながら倒れた棚をひっくり返す。

ドゴオォォ！！

「！！」

と、誰かがさっきまでひっくり返していた棚の方へ吹っ飛んできた。

「ごほっごほっ！！けほ！！」

「匠！大丈夫か！？」

「ごほごほ！裕也！？どうしてこんなところに！！」

「教師の手伝いをな！！お前、怪我は！？」

まるでマンガのように勢いよく突っ込んできたから骨の一つでも折っているんじゃないかと不安を感じる。

「大丈夫！！これでも朝倉の人間だからね！！こんなこと日常茶飯事だよ！！」

（そんなことが日常茶飯だったら余計心配になるんだが。）

「まあいい！！状況は！？」

「悪くもなければ良くもないってところかな！！」

それを聞きぐうの音も出なくなる。さっきから戦況を確認しつつ探し物をしていたがどう見ても一進一退。朝倉は火系の魔法が得意だが、相手も炎の竜だ。足を止めようと彼らが攻撃してもその魔法を相手が吸収してしまう。

「どうしたら・・・」

「いった！！」

どうしようもないこの状況を打破したいが探し物は見つからない、戦況も良くならないと悪いことが重なり焦りが込み上げてきたときだった。

「どうした！？」

「なんか踏んずけてて！！・・・何だこれ？」

「あ！！」

匠がおもむろに取り出したものこそ私が探しているものだった。収められている瓶は確かに他と違わないが中身は先ほど聞いたものだった。

透明な液体の中にまるで閉じ込められているかのように浮いている青色の水。揺れると透明のものと青いものとで別々に揺れる。

「探し物！？」

「ああ！！そうだ！！匠！！」

「何！？」

私は匠が見つけたそれを手にしてあることが思い浮かんだ。あたりまえのことだ。

（そう、魔法が効かないんだったら他の方法で足止めする！）

「あいつらにも伝えろ！！私が足止めするから、先公が言った通り奴を捕まえろ！！奴の気さえ逸らせればお前らでも何とかなるだろ！！」

「ええ！！裕也！？何言ってるの！！？」

「いいから！必ず伝えろ！！」

「ちょ、裕也ぁ！？」

匠の困惑した声が響いた気がしたが、早くこの瓶を教師のもとまで届ければならないので、無視して走り出す。

（魔法以外での足止め・・・このクラスで言ったら、私以外いないだろう！訓練だと思え自分！！）

「先生！！」

「！遅かったですね！こちらの術は完成していますが、あちらの状況が思わしくありません！まだ発動させれるずにいます！」

「はい！そのことで、先生にご相談があります！！」

「相談？」

「はい！！魔法での攻撃が効いていないように見えます！！なので魔法が効くように仕向けます！！おそらく、あの竜は同系の魔法を吸収することができるようですが、それはその術に対し意識を向けているものに対してのみです！！だから彼らの制御の力も効かない！！他の系統の魔法を使える人間が居ないなら、武力をもってしてそれを制します！！」

「・・・」

「先生！！私もあちらへ参加します！！」

「はあ、ダメだと言ってもあなたはもう決めてしまっているのでしょうね。分かりました、こちらは何とかしましょう！行きなさい！！」

「ありがとうございます！！」

許可が下りたことから、軽く礼をして戦地へと走った。

「裕也！！」

「！蛍太！！」

「大丈夫！？こっちは危ないよ！！」

おそらく匠から話を聞いたのだろう。今までがかなり劣等生であったため、心配で近寄ってきてくれたようだ。

「誰に言ってんだ！！とりあえず私が囮になるから、奴の気が完全にそれた瞬間を狙って捕まえてくれ！！」

「・・・むむむ、仕方ない！分かったよ！後で佐倉に怒られそうだなあ。」

「んあ！？なんか言ったか！？」

「何も！じゃあ頼んだよ！！」

「ああ！！」

その言葉を交わした後、暴れている竜の方へと突っ込んでいった。

「陽介！どけ！！」

「！」

苦戦していた陽介を退かせ何かの液体の入った瓶を投げつける。

グゥアアアァァァァァ！！

何が入っていたか分からないが、中身が炎の体にかかった瞬間、一際大きな声で啼いた。そして私と陽介のいる方へと頭を向けた。私はもう一つ瓶を投げつけながら、陽介と離れた。竜はその瓶を片手ではたき落とし、その長い胴よりつづく長い尾を私の方へと振り落とした。それを色々なものが落ちている床を転がりながら避ける。

（床かなり痛い！！・・やっぱりあの竜、物に触れるのか。）

初めに投げたのは確かに注意を引くためだったのだが、２回目はそのために投げたのだった。初めに投げたものが、焔の体にぶつかり割れたので、おやと思ったのだが大当たりだ。

（まあ、じゃなきゃ今頃ここは火の海だよな。）

と、納得しつつ顔を上げると、竜がこちらに炎を吹いてきた。

「きゃあああああ！！」

「藤城ぃぃぃ！！！」

クラスメイトの悲鳴がここ一番に響き渡る。あたりまえだ。これでは私が焔にのまれてしまうのだから。私は、近くにあった机であっ

たであろう木の棒を掴み、まるで居合切りをするように構え、振った。

「っ！！」

シュッ

ボッ・・ブシュウゥゥ・・・

焔が消えたことにより辺りは静寂に包まれた。皆、目の前で起こったことが信じられなかったからだ。唖然としてこちらを注視している。もちろん竜も一瞬動きを止めた。そこを見逃す手はない。私は竜の方へ走って木の棒で頭を思い切り叩いた。

「やあああぁぁぁぁぁぁ！！！」

ぎいいいいいいいん

叩いた時の音が、おかしいような気もしたがそんなことに構ってなどいられない。

「蛍太あぁぁ！！」

「「封縛！」」

私が竜の相手をしている間に匠と陽介が線対称の位置に移動しており、竜の意識が完全にそれたところに魔法をかけた。

グルアァァァァ！！

竜は、急に自分が動けなくなったことで苦しそうに咆哮する。竜は逃れようとめちゃくちゃに暴れるので、陽介も匠も苦痛に顔を歪め

ている。

バシャアアァァァァ！

「ぶべっ」

「「がっ」」

なんの掛け声もなく、近くにいる私たちを巻き添えにして、大量の水が頭上から降ってきたことにより、床に叩きつけられた。

そんなことをしたら、もちろん制御していた彼らの術も解けてしまった訳だが、炎の竜にとってこの水はかなりの痛手だったようで、床に這いつくばっていた。

「よし、後は僕の出番だね。」

水の掛かっていないところをみるとどこか離れたところで様子を見ていたのであろう蛍太が、弱まった竜に近寄って行き両手で触れた。

「ごめんね。」

そう言うと、ゆっくりとその竜の体が消え始めた。最後にはキラキラと赤い光をいくつか発しながら消えていった。

「ふう。終わったよ！！」

一仕事終えたように、いい笑顔をして私たちの方を向くので、クラス全員＋教師1名の心を代弁して言わせてもらおう。

「誰のせいだ！！！」

第十一話　炎舞う実習棟（後書き）

魔法学園っぽく・・・なってきたんじゃないでしょうか？
ここまでするつもりはなかったのですが・・・いつのまにやら筆が進んでしまいました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6445s/

---

the magician's reunion

2012年1月4日01時47分発行